2016年11月1日発行(毎月2回1日・15日発行)10月15日発売　第20巻20号(通巻416号)
1997年3月10日第三種郵便物認可

Pen

with New

11/1
2016 No.416



完全保存版

ゴッホ、君は誰？

建築家の自邸から学ぶ、
家づくりのアイデア

pen

with New Attitude

Pen with New Attitude
2016 No.416
11/1

Contents



「ペン」11月1日号　通巻416号
発行所
株式会社CCCメディアハウス
〒153-8541
東京都目黒区目黒1-24-12
編集 03･5436･5783
販売 03･5436･5721
広告 03･5436･5730
発行人　小林圭太
編集長　安藤貴之

印刷･製本　大日本印刷株式会社

本誌にて掲載の商品は、すべて税込(8%)価格です。

pen

with New Attitude

Pen with New Attitude
2016 No.416
11/1

Contents









編集長 ―― 安藤貴之
Art Director ―― 志村正人 (REVEL 46)
Chief Designer ―― 佐藤晃大 (SANKAKUSHA)
Designer ―― 佐藤美枝子
大橋健司
黒羽拓明
(SANKAKUSHA)
Cover Photo ―― 『自画像(ポール・ゴーガンに捧ぐ)』
1888年
フォッグ美術館、
ハーバード大学
ケンブリッジ
©Fogg Art Museum, Harvard Art Museums, USA / Bridgeman Images/ amanaimages
Contents Photo ― フィンセント・ファン・ゴッホ
13歳の肖像
(1866年)
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

pen
with New Attitude

| EDITOR'S VIEW |

約30年ぶりに復刻された、ドレス顔のチロリアン

パラブーツ ニヨン

Paraboot NYONS

宇田川 淳・写真 photograph by Jun Udagawa

初めてパラブーツの靴を買ったのは約10年前。同ブランドの代表作、Uチップシューズの「シャンボード」だった。以来、年間で200日履くほど私のスタンダードになっている。購入のきっかけは、たまたま見つけたウエブサイトの記事に影響されて。「革靴だが歩きやすく、雨に濡れても大丈夫。取材で歩き回ることが多い人に最適なジャーナリストシューズ」

当時、編集者として仕事を始めたばかりだった私は、その紹介文を読んですっかり惚れ込んでしまった。細身のシルエットでありながら、ぽっこりと丸いつま先が愛らしく、革靴だが堅苦しさを与えない。多くのシチュエーションに対応できるので、天候や仕事の予定を気にすることなく、玄関でその日履く靴に迷う時などは、たいていこの一足を選んでいる。

そのパラブーツの新作コレクションに、約30年ぶりの復刻モデルが登場した。アウトドアを起源とするチロリアンシューズをベースに、キルトとバックル付きストラップを備えた「ニヨン」がそれだ。カントリー調の雰囲気に加え、ドレッシーな気分も楽しめるデザイン。ふたつの顔をもつ洒脱な一足は、「着崩す」時も「着飾る」時も頼もしい存在であり、いまの時代にぴったりフィットする。今季、各セレクトショップがこぞってニヨンをベースに別注商品をつくっていることも、その証明となるだろう。

冒頭で書いたシャンボードも現役で活躍中だが、この靴ニヨンなら合わせやすい服が増える分、出かける場所の選択肢もさらに広がりそうだ。もしかすると、年間で300日履く相棒になるかもしれない。

パラブーツが打ち出す多くのモデル同様、本来は登山靴やスキー靴に用いられていたノルヴェイジャン製法を採用。タフな状況下でも耐え得る能力に加え、キルトやバックル付きストラップによりドレスの要素も備わった。ホワイト×ブラックのコンビカラーも展開。シューズ¥72,360／パラブーツ（パラブーツ青山店）



●パラブーツ青山店 ☎03・5766・6688

pen

with New Attitude

PenNEWS

TOKYO NEWCOMERS

外山温子(CROSSOVER)・写真 photographs by Atsuko Toyama
地図屋もりそん・マップ制作 map design by Morison

南青山

エッジが際立つ、東京ストリート シーイー

C.E

グラフィックデザイナーのスケートシングが中心となり、2011年に立ち上げた東京発のブランド、「シーイー」。これまではセレクトショップで主に展開してきたが、ついに実店舗がオープンした。アイテムがフルラインアップで揃うのは、ここだけだ。

割れた鏡を敷き詰めたフロアには、エッジの利いたウエアや小物が並ぶ。ブランド名はフィリップ・K・ディックの著作に登場する女性のタトゥーに由来しており、そういったSF作品や、ほかにもイタリアンホラー映画を彷彿とさせるようなグラフィックやロゴのアイテムが多いのが特徴だ。新作に加え、今後は店舗限定のアイテムや音楽レーベルのマーチャンダイズも店頭に並ぶ。気に入った絵柄のアイテムがあれば、即購入がおススメ。

1点取り入れるだけでインパクトを生む、東京のストリートの先端を走るブランド。この秋のスタイルに加えてみよう。





左：フロアの割れた鏡は、イタリアのホラー映画のワンシーンを想起させる。右：コットン地にPVCをコーティングし、洗いをかけてユーズド感のある見た目に仕上げたジャケット￥42,120



ヴァンズと制作したスニーカー、11月12日発売。￥11,880



転写プリントと刺繍のグラフィックがインパクトのあるフーディー￥27,000



レトロなレンガづくりのビルの一角。近未来的な空間とのギャップが面白い。



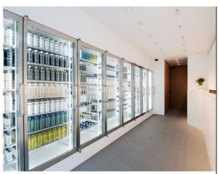
東京都港区南青山5-3-10
フロムファーストビル201
☎03・6712・6688
㈼12時〜20時
無休（年末年始を除く）
www.cavempt.com

神宮前

日常に纏う香りを、コンビニ感覚で選ぶ。 リトゥ・ストア・ハラジュク

retaW store Harajuku

香りのブランド、「retaW（リトゥ）」は、Waterを逆から読んだ名前。水のように自然で、必要不可欠なものにしたいという想いからだ。クリーンなケースに陳列されたアイテムは、髪も身体も洗える全身用のフレグランスシャンプーや、デニム専用の除菌・消臭スプレーなど、男目線でこれは使えると思えるものばかり。香りは、ひと言で形容できない絶妙さが特徴だ。たとえば、この店限定の香り「HARAJUKU＊」は、爽やかなユズやヒノキが、後に濃厚なアンバーやムスクに変化する。異なるノートをあえてぶつけることで、印象的な香りに仕上げているのだ。日常使いできるお気に入りの香りを見つけよう。



店内は、気軽に立ち寄れて必要なものが揃う、コンビニのような空間をイメージしている。



アイテム別リフレッシュナー。左から、デニム用、スニーカー用。各￥1,944



ユリの香りの「アレン」は歌手リリー・アレンから。香りの名はそれぞれ音楽に関係する。



モノトーンの店内に整然と陳列された商品を見て、「これはなに？」と立ち寄る人も多いという。



東京都渋谷区
神宮前4-26-22
☎03・6804・5470
㈼12時〜19時
㊡水
www.retaw-tokyo.com

松陰神社前

一度食べたらハマる、変わり種コロッケ オール アバウト マイコロッケ

All About My Croquette

昔ながらの商店街に新しいショップが次々とでき、じわじわと人気を集める松陰神社前に、コロッケ専門店がオープン。肉汁がジューシーなラム肉とクミンのメンチや、イカの歯応えも楽しいイカ墨味、チーズが溶けだすリゾットコロッケなど、常時8種類ほどを用意。それぞれがクセになる味わいで、ワインやクラフトビールなど、酒との相性もばっちりだ。

もちろん、ジャガイモのみを使うプレーンタイプもあり。ホクホク感が嬉しい王道の味だ。今後は、料理家とのコラボコロッケなども展開する予定。ランチに、晩飯のおかずに、酒の肴に、と昼夜問わず食べたくなる味だ。



11時〜15時の間はランチプレートもある。コロッケは2種類、好きなものを選べる。￥1,000





左：奥から、マッシュルームチーズメルトメンチ￥350、イカスミバジル￥260、ほうれん草チーズのアランチーニ￥320。右：ショーケースに並ぶ黄金色のコロッケ。メニューは今後変わる。



世田谷線の松陰神社前駅の近く。カフェのような明るい店構えだ。



東京都世田谷区
若林4-20-9
若松屋ビル1F
☎03・6450・8022
㈼11時〜20時
㊡水

pen

with New Attitude

WORLD SCOPE 1 世界トレンドまるかじり

PARIS パリ

photographs by Olivier Bardina



注文から仕上がりまで2カ月ほど。1点もので2,300ユーロ〜、限定シリーズ1,500ユーロ〜



2年前にブランドを立ち上げたアリス。すでに240点以上の1点ものをデザイン。コラボにも意欲的。



1点ものには名前と番号が。リオで銀メダルを獲得した棒高跳びのラヴィレニ選手も顧客。

Alice Balas Paris
●6, rue Charles François Dupuis, 75003 Paris
☎01·56·58·13·81 ⓂRÉPUBLIQUE
㊮11時〜19時(火〜金) 12時〜20時(土)
※午前中と月曜はアポイント制 ㊡日
www.alicebalas.com

世界に1着のライダース、発注してみませんか？

ショット社の「パーフェクト」といえば、1928年の誕生以来、世界中で愛されているライダースジャケット。このアイコンともいえるアイテムを独自の感性でアレンジし、1点ものとして提案するのが若きパリジェンヌ、アリス・バラスだ。

基本のフォルムはそのままに、丈の長さや袖口のジッパーの有無といったディテール、革だけでなくジャカードやビロードなどの素材使いや刺繍などで遊びを盛り込む。着る人それぞれに合わせた世界でひとつのジャケットは、ケイト・モス、ルー・ドワイヨン、ジョニー・アリディら多くのセレブが愛用。現在、50点ほどずつ製造するオリジナルデザインの限定シリーズを準備中。こちらも楽しみだ。

髙田昌枝 ジャーナリスト

LONDON ロンドン

たかがパスポート？ いやいや、されどパスポート！

去る6月23日の国民投票にてEU（欧州連合）離脱が決まった英国。離脱決定当日から、パスポートをめぐる残留派と離脱派のドタバタ劇が続いている。

残留派は隣国アイルランドのパスポート取得の申請を目指し、アイルランド大使館に殺到。親や祖父母のどちらかがアイルランド出身だと、市民権を得ることができるのだ。目的は、EU内の移動と職住の自由を享受すること。一方で離脱派は、パスポートをEU共通のダークレッドからもともとのネイビーに戻す運動を始めた。ハードカバーでひと回り大きなサイズのパスポートは、離脱派にとって「誇り高き英国人」たる心の拠り所となるらしい。パスポートごとき、と笑うなかれ。

Michiko Kagawa ライター



アイルランドに血縁がある英国人にとって、いま喉から手が出るほど取得したいというアイルランド政府発行のパスポート。



紺色のパスポートへの回帰運動を煽動している大衆紙「サン」。購読部数ナンバーワンを誇る。

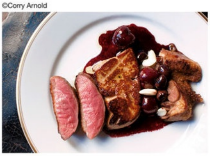


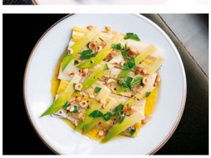
上から、EU共通のパスポートと28年前に廃止されたハードカバーの旧パスポート。内務省でも紺色への回帰を検討。

photographs by Michiko Kagawa

NEW YORK ニューヨーク

©Corry Arnold





伝統的なフランス料理の手法に則りつつも、ローズらしさを加えて繰り出される料理の数々。左上：フォアグラとオリーブを加えた鴨のチェリーソース38ドル　左下：ヘーゼルナッツをあしらったポワロー葱の前菜11ドル

©Ditte Isager



古きよきフランス式のサロンを模した、落ち着きのあるバーエリア。

Le Coucou
●138 Lafayette Street, New York, NYC 10013
☎212·271·4252
ⓈCANAL ST
㊮朝食：7時〜10時30分(月〜金) 7時〜12時(土、日) ディナー：17時〜22時(月、日) 17時〜23時(火〜土)
無休 www.lecoucou.com

ニューヨーカーの胃袋を、パリ帰りのシェフが奪う。

フランスで修業を積み、パリで自身の店「スプリング」を成功させたシェフ、ダニエル・ローズ。彼がニューヨークに凱旋して開いたのは、古典的なフレンチをベースにしたレストラン「ル・クク」だ。

伝統に敬意を払いつつ、新たな解釈を加えたり地の食材を用いたメニューが評判に。内装は人気インテリアデザイン・スタジオのローマン＆ウィリアムズによるもので、フランスの片田舎にあるマナーハウスをイメージ。新しいもの好きでパリに強い憧れを抱くニューヨーカーの心をくすぐり、予約は困難を極める。が、狙い目は朝食。こちらも話題のホテル「11ハワード」内にあるため、朝食利用も可能なのだ。噂の美味を、まずはモーニングで！

鈴木希実 コーディネーター

 ●1ユーロ＝約114円 1ドル＝約103円（2016年9月現在）

pen

with New Attitude

PenNEWS

WORLD SCOPE 2

世界トレンドまるかじり

MILAN ミラノ

老舗洋菓子店の新空間で、朝食からアペリティフまで。

プラダ・グループが展開する老舗洋菓子店「パスティッチェリア・マルケージ」。その3店舗目となる新店が、ミラノを象徴する場所、ヴィットリオ・エマヌエーレⅡ世のガレリアにオープンした。

250㎡におよぶ新店舗は、1824年から続く歴史ある本店の雰囲気を再現しつつも、グリーンの漆喰に花柄のシルクジャカードを組み合わせた壁など、より華やかな雰囲気。アーチ状の窓が並ぶ店内からは、ガレリアの見事なフレスコ画を見渡せる。ショーケースには、名物のパネットーネやチョコレート類に加え、ドラジェなど新作もちらほら。

エレガントなティールームでは朝食から喫茶、アペリティフまで楽しめる。使い勝手も抜群だ。

坂本きよえ ジャーナリスト



緑の大理石の床や梁の見える天井など、サンタ・マリア・アラ・ポルタ通りにある本店のスタイルを踏襲する。

Pasticceria Marchesi
●Galleria Vittorio Emanuele II, 20121 Milan
☎02·94181710
ⓂDUOMO
㋖7時30分～21時 無休
www.pasticceriamarchesi.it





右：リニューアルしたパステルカラーの新パッケージが、目にも鮮やか。右奥：明るいティールーム。エスプレッソや生菓子などをゆったりと楽しめる。

BERLIN ベルリン

photographs by Gianni Plescia



手前はグリル野菜のサラダとマフィン、奥はレンズ豆のカレー。ともに5ユーロ～のワンプレート。





右上：手づくり感あふれる内装。シェフや店長はプロだがスタッフの多くはボランティア。働くことで実態を知ってほしいからという。右下：余った食材はジャムなど保存食に。

Restlos Glücklich
●Kienitzer Strasse 22, 12053 Berlin
ⓊKARL-MARX-STRASSE ㋖18時～22時30分
㊡日～火 http://restlos-gluecklich.berlin

再利用してハッピーに！グルメなエコレストラン

年間1800万トンという膨大な食品ロスを出しているドイツ。2020年までに半減という目標を打ち出し、数々のプロジェクトが始まっている。今夏オープンしたレストラン「レストロス・グリュックリッヒ（残り物なしでハッピー）」もそのひとつ。大手オーガニックスーパーから週2回、廃棄処分前の食材を回収し、おいしく甦らせている。飲み物も、試飲会の余剰注文のワインなどを提供。少し古くなった食材も、工夫次第でおいしくなることを証明した。

食事を楽しみながらゴミについての意識を変えてもらおうというコンセプトは、大きな話題に。ワンプレートメニューが5ユーロからとリーズナブルなこともあり、日々、満席が続いている。

河内秀子 ライター

LOS ANGELES ロサンゼルス

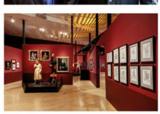
モンスターたちが大集合！鬼才の貴重なコレクション

映画『パンズ・ラビリンス』『パシフィック・リム』の監督で、独特のアーティスティックな世界観をもつことで知られるギレルモ・デル・トロ。現在はLA郊外にある「荒涼館（Bleak House）」と呼ばれる自宅をベースに、国際的に活躍する鬼才だ。

ロサンゼルス・カウンティ美術館で開催中の『ギレルモ・デル・トロ展』は彼にとって初の大規模な展覧会。「フランケンシュタインとホラー」や「死と死後の世界」など8つのテーマに分け、作品にまつわる資料や絵コンテ、メモ、コスチュームやフィギュアに加え、監督の自宅から運び込んだ500点以上のモンスターやホラーコレクションを公開。その世界観の深層を知る貴重な機会となっている。

藤野晶子 コーディネーター





左上：監督と、監督のトレードマークであり多数展示されているフランケンシュタイン人形。左下：壁はワインレッドで統一。独特の世界観に浸れる。

The Los Angeles County Museum of Art
●5905 Wilshire Boulevard Los Angeles, CA 90036
☎323·857·6000 ㋕11時～17時（月、火、木）11時～20時（金） 10時～19時（土、日） ㊡水
㊑一般25ドル（特別展入場料込み）
※開催中～11/27まで www.lacma.org

Photo © Museum Associates/ LACMA, by Josh White



映画『フランケンシュタイン』で特殊メイク中の怪優、ボリス・カーロフの等身大フィギュア。

●1ユーロ＝約114円 1ドル＝約103円（2016年9月現在）

pen
with New Attitude

PenNEWS

WORLD SCOPE 3 世界トレンドまるかじり

BEIJING 北京

photographs by Tamako Sado



人気グルメ雑誌『悦食』主催のフードフェスで、雲南省の食材を紹介するブース。豊かな自然を誇る雲南では、オーガニック食品が注目されている。





上：ブームゆえ、フード関係には投資も集まりやすい。ITなど他領域からの参入者も多く、ブランド構築力は格段に上昇中。
下：黒糖などヘルシー系食材は人気が高い。

過熱する食ブーム、フードフェスが大人気！

中国では、いま、食への関心が高まっている。食をテーマとした動画がヒット、料理教室は予約で埋まり、出版不況でもグルメ本は好調。海外旅行ブームも、料理や食材への好奇心を後押しする。そんななか、いま人気のイベントは、グルメ雑誌などが主催するフードフェスティバル。デパ地下のような多彩な食料品が並ぶ商業スペースがいまだない北京では、珍しい食材に触れられる機会がこういったフェスのみなのだ。並ぶものは中国国内から集められた食材が中心で、最近では小規模のフードブランドによる出展も多く、バリエーション豊か。パッケージなども洗練されてきた昨今、プロダクトデザインの視点からも、食のトレンドを楽しめる。

原口純子 ライター

COPENHAGEN コペンハーゲン

印象派の美術館に、オラファーの新作が。

2005年にザハ・ハディド設計の別館が完成、08年には隣接するフィン・ユールの自邸を公開と、展覧会以外も見どころが多い、印象派絵画の美術館「オードロップゴー」。その広大な裏庭に、体験型アート5点を設置した「アート・プレイグランド」が、この夏オープンした。作品は18年まで設置される予定で、なかでも、オラファー・エリアソンの『ウェザー・ザ・ウェザー』が人気。巨大な銅製のリングから、風向きによって霧が吹き出す仕掛けで、週末は子どもから大人まで、リングをくぐる人々で賑わう。現在は北欧最大規模のモネ展『モネ、印象派を越えて。』も開催中。現代アートと印象派を、ひとつのミュージアムでじっくり楽しもう。

冨田千恵子 コーディネーター

Claude Monet, Water Lilies, 1906. The Art Institute of Chicago, IL, USA. Mr. and Mrs. Martin A. Ryerson Collection. Bridgeman Images



現在の企画展は『睡蓮』(1906年)をはじめ、モネの代表作が世界中から集結し、圧巻。アトリエの写真や映像も興味深い。12月4日まで開催。

photograph by Anders Sune Berg



「風や天気など、予測できない自然との対話を表現した」とオラファー。



photograph by Adam Mørk

ハディド設計の別館も依然人気。敷地の高低を活かしたフォルムが自然と調和する。

Ordrupgaard
●Vilvordevej 110, 2920 Charlottenlund
☎45・39・64・11・83 ⓈKLAMPENBORG
㊐11時〜18時(火、木〜日) 11時〜21時(水)
㊡月、祝 ㊑110DKK http://ordrupgaard.dk

AMSTERDAM アムステルダム

photographs by Kiyomi Yui



近年数が減少しているという、チドリ科タゲリの姿も。森林公園では、コウモリやフクロウも見かける。



アムステルダム市内の動物、鳥、魚や両生類を紹介するガイド。19.99ユーロ



田舎の牧歌的な風景と思いきや、これは市内の中心にあるフォンデル公園。街中にも緑が多い。

アムスの街中で、野生動物ウォッチング

水が豊かで、森や公園も多いアムステルダムには多様な生態系が維持されているが、汚染や開発などで、一時はその状況が危ぶまれていた。そんななか、市は点在する“グリーンエリア”を連結させるプロジェクト「エコロジカル・ストラクチャー」を2012年にスタート。動物や昆虫が、移動しながら各所で生存できるようにした。そんな努力が功を奏し、いまでは保護を必要とする動植物の数も増加。市の機関が先頃発表した「自然の価値」調査結果によると、街の自然環境は向上、生物多様性も高まっているという。渡り鳥であるコウノトリやアマツバメなども増え、バードウォッチングも人気だ。街の中で、珍しい生き物を探してみては？

ユイキヨミ フォトグラファー&ジャーナリスト

●1DKK（デンマーククローネ）＝約15円 1ユーロ＝約114円（2016年9月現在）

pen
with New Attitude

デザイン日々更新
DESIGN LOG
猪飼尚司・文
text by Hisashi Ikai

EXHIBITION_01
ジャンルを超越する、2人の建築家を解析。

鈴野浩一と、禿（かむろ）真哉が2004年に設立したトラフ建築設計事務所。建築的な思考をベースにしながらも、従来の枠組みにとらわれることなく、プロダクトから空間構成にいたるまで、幅広い分野に積極的に関わっている。

本展は、事務所の設立から現在までの12年間の軌跡を振り返るもの。代表的な作品の模型はもちろんのこと、その制作プロセスの中で生まれた思考の断片やインスピレーションを受けた素材なども陳列される。さらに、あまり知られていない小規模のプロジェクトや未発表の作品まで、トラフ建築設計事務所が思考を巡らせながら、いかにジャンルを飛び越えてきたかを、さまざまなアングルから探っていく。

© 阿野太一



フジツボのような形をした「港北の住宅」（2007年）。住宅密集地特有の採光とプライバシーの問題を、特徴的な屋根の構造で解決。

© 冨田里美



© 大木大輔



左：自在に形を変える「空気の器」は2015年、モントリオール美術館の永久所蔵品に選定された。右：2011年にミラノ・サローネで発表した「光の織機」。無数の糸をスクリーン代わりに使っている。

『トラフ展 インサイド・アウト』
●10/15〜12/11
TOTOギャラリー・間
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
☎03·3402·1010
㊐11時〜18時
㊡月、祝(11/3は開館)
入場無料
www.toto.co.jp/gallerma





左：天井や壁に光をバウンスさせて照らす。上：本体はブラックとシルバーの2色。ライト・コーン（H1,800㎜）¥302,400、（H2,020㎜）¥307,800／アルフレックスジャパン☎0120·33·1951

PRODUCT
紫色LEDが生み出す、美しい光。

イタリア・デザインをベースに、洗練されたインテリアアイテムを提供してきたアルフレックスが、初めてとなる照明器具「ライト・コーン」を発表した。

最新の紫色LED方式により、太陽光に限りなく近い光を演出するとともに、京セラのファインセラミック技術を用いた放熱設計を取り入れ、より安定した光を確保。一般の青色LEDの2.5倍となる、約10万時間の寿命を実現した。さらにライティングアーキテクト、豊久将三の監修により、周囲の環境が自然な発色になるような光源の色調整も行っている。空間を豊かに照らしながら、インテリアとしてもエレガントな存在感を醸し出す、新しい照明のカタチに注目したい。

EXHIBITION_02
希少なプルーヴェ作品を、2日間限定公開。

自らをコンストラクター（建設家）と称し、構造研究や施工にも積極的に取り組んだジャン・プルーヴェ。ル・コルビュジエやシャルロット・ペリアンの活躍の裏には、常にプルーヴェの存在があったとも言われる。

本展は、ZOZOTOWNを運営するスタートトゥデイの代表であり、現代芸術振興財団の会長を務める前澤友作のコレクションから、プルーヴェ作品を中心に、同時期のデザイナーの作品約60点を2日間限定で公開。有名な家具のほか、ドアや壁パネルなどの建築部材、そして世界に2点しか存在しない組み立て式住宅「F 8×8 BCCハウス」も日本で初披露される。家具と建築の両面からプルーヴェの真髄に迫る試みだ。

© Galerie Patrick Seguin





左：1941年に発表した「F 8×8 BCCハウス」。世界に2点しか現存しない。来場者は中に入って実物を体感できる。下：グリーンとブラックのコントラストが美しい「メトロポールNo.305」。

『the CONSTRUCTOR ジャン・プルーヴェ：組立と解体のデザイン』
●10/22、23　フランス大使公邸　東京都港区南麻布4-11-44
㊐10時〜17時　入場無料（完全予約制、2日間計700人限定）
http://the-constructor.peatix.com（予約サイト）

pen
with New Attitude

FASHION SQUARE

岡村昌宏(CROSSOVER)・写真
photographs by Masahiro Okamura

ファッション最前線



01

→ラバー素材を軽量化したレインコートはライニングにメッシュ素材を起用し、より快適な着心地を実現した。レインコート¥49、680、バックパック¥57、240／ともにハンター(ハンタージャパン☎03・6427・4327)

01 HUNTER ハンター

雨の日も、虹色コーデで楽しく!

160年の長い歴史をもつ英国ブランド「ハンター」といえば、機能性とファッショナブルなデザインを兼ね備えたレインブーツで有名。このたび新しく、シーズンレスなコレクションが登場した。“コア コンセプト”(CORE Concept)と名付けられたこのコレクションは、耐候性に優れたアイテムをレインボーカラーの豊富なバリエーションで展開。軽量ラバー素材のレインコートやビニール素材のポンチョ、ラバー加工を施したバックパックまで、雨の日が待ち遠しくなる、彩り豊かなラインアップが魅力的だ。

コア コレクションはハンター銀座フラッグシップストアとハンター公式オンラインショップで展開される。ぜひチェックを。

02 VOCIER ヴォシェル

気の利くトロリーと、よい旅を。

2012年にオーストリアで設立された「ヴォシェル」。数々のデザインアワードでの受賞歴を誇る、注目のラゲージブランドだ。

上質なイタリアンカーフを使用したトロリーケースは、いたるところに気の利いた収納の仕掛けが。たとえば、ハンドル部分にはパスポートなどを収めるポケットや上着をかけるフックが設けられ、ケース本体を開閉することなくちょっとした用事を済ませられる。付属のハンガーにスーツをかけたまま、ケースごとクローゼットに吊るせる構造も便利だ。

旅先でスマートに荷物を持ち運ぶなら、機能とデザインを両立したこんなトロリーケースを。旅行も出張もこれひとつでグッと快適に過ごせるはずだ。

02



→革は上質なイタリアンカーフを使用しており、洗練された雰囲気と使い込むほどに増す味わいも魅力だ。機内持ち込みも可。(H55×W40×D20㎝)¥205、200／ヴォシェル(バーニーズ ニューヨーク カスタマーセンター📞0120・137・007)

03



←ベトンとは、ドイツ語でコンクリートという意味。カシミア混の糸を使用し、上品でやわらかな素材感が心地いい。フロントポケットにはフリース素材を使用。「モーニングコート」¥84、240／アトリエ ベトン(アトリエ ベトン☎03・6809・0638)



新聞を差し込むようなイメージの縦長のポケット。左右に2カ所ずつデザイン。

03 ATELIER BÉTON アトリエ ベトン

お洒落な引きこもり、完成です。

今季、“健全な引きこもり”に向けた新ブランド「アトリエ ベトン」がデビュー。「洋服は生活を快適にする暮らしの道具」という考えのもと、家の中でのライフワークに寄り添う機能性の高いプロダクトを提案している。

ファーストシーズンでは、コートやブルゾン、パンツ、シャツなど約40型を発表。アイテムには、日曜大工やガーデニングなど家でのアクティブな活動に適したデザインを採用したという。

写真のアイテムは、朝、パジャマの上から羽織りポストに新聞を取りに行くというイメージでつくられた、その名も「モーニングコート」。ガウンの要素を取り入れ、アウターとしても着用可能な一着に仕上がっている。







完全保存版

ゴッホ、君は誰？

時を超え、文化を超えて愛される芸術家の作品には、力強い普遍性がある。
モーツァルト祭り、シェークスピア祭り。彼らは常に、現代を生きる我々の
「同世代人」だ。フィンセント・ファン・ゴッホもまたそのひとり。
相次ぐ挫折。父との衝突。友との決別。家庭も持てず、未来も見えず、
落ち込んだりアガったり。それでも毎日、筆を握って描く……。
遺された膨大な書簡や作品から見えてくるものは、彼の魂の叫びだ。
「自分は何者なのか？」「何をなすべく生かされているのか？」
それは、いつの時代も若者誰しもが抱く懊悩ではないか。
37年の生涯を駆け抜けた君は、ねえ、いったい誰なんだ？
すべてのPen世代に贈る、渾身のファン・ゴッホ特集です。

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

●1ユーロ＝約114円（2016年9月現在）
●電話番号先頭の＋で始まる数字は国番号です。
日本からかける場合、市外局番冒頭の0は不要です。
●展示替えなどにより、特集内で紹介した施設の展示作品、
開館時間や休館日、入館料は予告なく変わる場合があります。
●『ゴッホとゴーギャン展』（東京都美術館にて開催中〜12/18まで、
愛知展は2017年1/3〜3/20開催）の出品作は、
103ページ掲載のものを除き掲載ページにその旨を付記しています。
●特集内で引用した手紙は、特に断りのない限りすべて『ファン・ゴッホの手紙』
（二見史郎編訳、圀府寺司訳、みすず書房、2001年）が出典です。

『ゴーガン　私記　アヴァン・エ・アプレ』（ポール・ゴーガン著、前川堅市訳、美術出版社、1970年）、『ゴッホ〈自画像〉紀行』（木下長宏著、中公新書、中央公論新社、2014年）、『ゴッホ全油彩画』（インゴ・F・ヴァルター／ライナー・メッツガー著、明瀬一裕訳、ベネディクト・タッシェン、1994年）、『ゴッホ ―闘う画家―』（木下長宏著、六耀社、2002年）、「ゴッホの恋と脱がれた《靴》の意味」（新関公子著、『へるめす』No.51より、1994年）、『ゴッホの手紙――絵と魂の日記』（H・アンナ・スー編、千足伸行監訳、冨田 章、藤島美菜訳、西村書店、2012年）、『ゴッホの眼』（高階秀爾著、青土社、1993年）、『ゴッホはなぜゴッホになったか――芸術の社会学的考察』（ナタリー・エニック著、三浦 篤訳、藤原書店、2005年）、『ゴッホを旅する』（千足伸行、論創社、2015年）、『書簡で読み解く ゴッホ　逆境を生き抜く力』（坂口哲啓著、藤原書店、2014年）、図録『没後120年　ゴッホ展　こうして私はゴッホになった』（2010年）、『ファン・ゴッホ書簡全集』（二見史郎訳、みすず書房、1984年）、『ファン・ゴッホ その生涯と作品』（マイケル・ハワード著、田中敦子訳、ガイアブックス、2015年）、"THE VINCENT VAN GOGH ATLAS" by Nienke Denekamp & René Blerk with Teio Meedendorp, published by Rubinstein and Van Gogh Museum, 2015.

千足伸行・監修 supervised by Nobuyuki Senzoku　ユイキヨミ・写真&文 photographs（p30〜35、p50、p54〜55、p57〜60、p63、p68、p70〜71、p74〜78、p80〜82、p90〜95、p101バッカー顔写真）& text（p92〜95、p101バッカー）by Kiyomi Yui　岡村昌宏（CROSSOVER）・写真 photograph by Masahiro Okamura（p99下）　林 綾野・文&協力 text（p36、p42〜47、p58〜63、p66〜69、p76〜81、p90〜91）& cooperation by Ayano Hayashi　青野尚子・文 text by Naoko Aono（p48〜51、p100左上）　白坂ゆり・文 text by Yuri Shirasaka（p52〜57、p64〜65、p96）　來嶋路子・文 text by Michiko Kurushima（p70〜75）　住吉智恵・文 text by Chie Sumiyoshi（p97下、p98下、p100右上）　吉田 桂・文 text by Kei Yoshida（p99下）　大隅祐輔・文 text by Yusuke Osumi（p97上、p98右、p99上、p100下）　河内秀子・文 text by Hideko Kawachi（p101右上、p102上）　もりそん・マップ制作 map design by Morison（p39〜40）　木下長宏・協力 cooperation by Nagahiro Kinoshita　高田昌枝・協力 cooperation by Masae Takata　高地良幸・協力 cooperation by Yoshiyuki Takachi　オランダ政府観光局・協力 cooperation by Netherlands Board of Tourism & Conventions（www.Holland.com/jp）　フランス観光開発機構・協力 cooperation by Atout France au Japon（http://jp.france.fr）　プロヴァンス地方観光局・協力 cooperation by Provence-Alpes-Côte d'Azur Tourisme Board（www.tourismepaca.fr）　ユーレイル・グループG.I.E.・協力 cooperation by Eurail Group G.I.E.（www.EurailGroup.org）



写真は左上から右、上から下に：『黒いフェルト帽の自画像』1886〜87年、『麦わら帽子をかぶった自画像』1887年、『自画像』1887年 クレラー=ミュラー美術館　©Kröller-Müller Museum, Otterlo（『ゴッホとゴーギャン展』に出品、103ページ参照）、『パイプと麦わら帽子の自画像』1887年（『ゴッホとゴーギャン展』に出品、103ページ参照）、『画架の前の自画像』1887〜88年、『灰色のフェルト帽の自画像』1887年、『自画像』1886年、『自画像』1887年、『自画像』1887年、『グラスのあるパイプをくわえた自画像』1887年、『自画像』1887年、『麦わら帽子とパイプの自画像』1887年。クレラー=ミュラー美術館所蔵作品以外はすべてアムステルダムのファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）蔵 ©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）

ファン・ゴッホの言葉と、彼が見た風景。

画家が30代を過ごしたオランダとフランスへ。彼が弟や友人への書簡に綴ったフレーズとともに、いまも各地に残る作品の原風景を訪ねよう。



30歳のファン・ゴッホはニューネンの実家に戻る。父との衝突は絶えなかったが、それでも身近な実家や父の勧める教会を描くことで、自らの置かれた環境を見つめようとした。

『ニューネンの牧師館』
1885年　ニューネン　油彩、カンヴァス　33.2×43㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

「人生には、周りの世間が取っておいてくれた地位に押し込まれるよりは、たとえ、それがどんなにきついものであろうと、一撃を受けた方がいいという瞬間があると思う。」

——弟テオへの手紙、1883年



現在も、ニューネンの牧師館は同じ場所に存在する。ゴッホは裏手にアトリエを構え、思う存分、油彩画を描いていた。

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

Nuenen



「それに、ねえ、パリはやっぱりパリだよ。パリは一つしかない。ここでの生活がいかにきつかろうと、たとえ、それがもっとひどくなり、もっとつらくなろうと、フランスの空気は頭脳をすっきりさせてくれるし、ためになるものがある、とてもいい効果がある。」

――イギリスの画家H・M・リヴェンズへの手紙、1886年

『ルピック通りのフィンセントの部屋からのパリの眺め』

1887年　パリ
油彩、カンヴァス　45.9×38.1㎝
ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
アムステルダム

1886年、ゴッホは前触れもなしにパリへ赴き、弟テオの住んでいたアパルトマンで同居を始める。ここは兄弟が同居した2軒目の家。パリでの最大の収穫のひとつは、印象派の画家たちやその作品との出会いだった。この絵でも、一部で点描の技法を試みている。

Paris

ふたりが暮らしたパリのルピック通り54番地。いまも同じような眺め（下左）が望める建物に、かつての住居跡だと示すプレートがある（下右）。







『ローヌ河の星月夜』

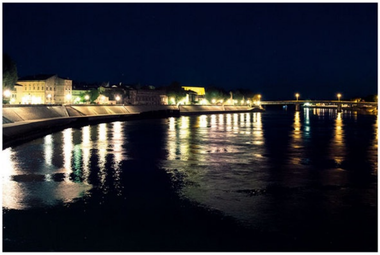
1888年　アルル　油彩、カンヴァス　72.5×92cm
オルセー美術館　パリ

ゴッホにとってきわめて重要な色、青と黄が見事な調和とコントラストを見せる一枚。手前右のふたりは、恋人同士。優しく穏やかな夜の情景は、かねてからの念願の地であった南仏についに落ち着くことができた画家の心の安らぎを示すかのようだ。

「……僕はすごく宗教
――こういう言葉で言っていいものか――
の必要を感じている。
そこで僕は夜、
星を描きに外へ出て行って、
仲間たちの一群の
生きた人物像もある
そうした絵をいつも夢想する。」

――弟テオへの手紙、1888年

Arles



現在のアルル、ローヌ河畔の夜景。町の明かりはガス灯が主流だった往時よりずっと強いが、いまも格好のデートスポット。

Saint-Rémy-de-Provence

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?



入院していたサン=ポール・ド・モーゾール療養院はいまも病院として存在し、一般が入れるスペースにゴッホの居室と画室を復元して公開中。窓外の格子に、胸が詰まる。



「ああ、僕の目の前に新しい清明期が控えている、ほぼそんな思いもある――」

――弟テオへの手紙、1889年

『病室のフィンセントの画室の窓』

1889年
サン=レミ=ド=プロヴァンス
チョーク、筆、油彩および水彩、紙
62×47.6㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

アルルで耳を切る事件を起こしたゴッホはサン=レミ=ド=プロヴァンスの療養院へ入る。1889年のことだった。療養院では寝室のほかに絵を描くための画室を与えられ、これはその窓を描いたもの。日が差し込むと、画室は明るい黄色で満たされた。



「それでもぼくは、彼らが畑を耕すように、カンヴァスを耕していくのです。」

――母アンナへの手紙、1889年※

上の書簡にもあるように、農民を描き、風景を描くことは生涯のテーマだった。オーヴェール=シュル=オワーズで描いた油彩画は2カ月で80点近く。麦畑は健在で、絵の通りの彩りで訪問者を迎える。





『麦の穂』

1890年
オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス
64×18㎝
ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
アムステルダム

終焉の地、オーヴェール=シュル=オワーズ。1890年に到着したゴッホは、最期の2カ月をここで過ごす。これは、麦の穂にぐっと寄って描かれた異色作。引いて見ると似たような麦も、間近で見れば色が違い、向きが違い、花が交じりもする様子を観察している。

Auvers-sur-Oise

さて、また希望がもてる段となって
僕が望んでいることが何かわかるかな。
それは、君にとっての家族にあたるものが
僕にとっては自然であり、土くれであり、
草、黄色い小麦、農民だということ。

——弟テオへの手紙、1889年



オーヴェール=シュル=オワーズの観光案内所前に立つ、オシップ・ザッキン作のゴッホ像。実際にゴッホの足跡をたどると、行動範囲の広さに健脚ぶりがよくわかる。



1890年7月に死んだ兄フィンセントの後を追うように、弟テオは翌年1月に死去。それぞれ異なる地に埋葬されたが、のちに並べられた。

生涯の終わりには
僕も間違っていたということになるのだろう。
それもよかろう。そのときには美術のみならず
ほかのすべても一場の夢にすぎず、
己れ自身もまるで無であったと覚るだろう。

——弟テオへの手紙、1888年

●34ページに引用した※の手紙のみ『ゴッホの手紙——絵と魂の日記』(H・アンナ・スー編、千足伸行監訳、冨田 章・藤島美菜訳、西村書店)より抜粋。

37歳の君が、追い求め続けた「人生のリアル」

フィンセント・ファン・ゴッホの人生が、その作品が湛える、唯一無二の力。ぼくらはそこに共感する。彼が人生をかけて発信したメッセージとは？

文・林 綾野

●キュレーター。展覧会の企画や美術書の執筆を手がける。美術作品との新しい出合いを提案するために画家の芸術性と併せてその人柄や生活環境、食の趣向などを研究・紹介する。著書『ゴッホ 旅とレシピ』（講談社）など。

「ぼくは人物を描きたい」。ファン・ゴッホは常にそう望んだ。描かれた人たちはおそらく本人にあまり似ていないのだろう。だけれども彼らがどんな人間なのかわかる気がする。真面目で、優しく、厳しく、悲しげで、朗らかで、孤独。彼の描いた肖像のひとつひとつには人格が滲み出る。そしてゴッホが何を見つめていたのかが伝わってくる。

ゴッホは凄まじい人だった。10年間の画家人生で、描いた作品は全部で約2000点。それと同時に約800通もの手紙を書いた。どれも数ページにわたる長文で、絵に対する思いや敬愛する画家、友人や家族のこと、心に残った風景のことをびっしりと綴った。さらに母国語のオランダ語、フランス語と英語もあやつり、各国の文学を原語で読みあさる。はじめたことは徹底的にやる、ゴッホはそういう人だった。

幼少期から変わり者として周りに受け入れられなかった彼は、両親にも理解されなかった。16歳から社会人として働くが、失恋を機に自分でもコントロールできない自我が放出。失業の事態にまでいたる。家族の悩みの種だった彼は、家に居心地の悪さを感じていた。けれども、複雑な思春期を過ごした人は、ゴッホだけではないだろう。24歳、生きる道を模索する彼は、父の仕事と同じ牧師を目指す。宗教家を志すゴッホは凄まじい一面を見せ始める。神学部に進もうと勉強に励むが、思うようにいかないと棒で自分の背中を強打し自らを戒め周囲を驚かせた。しかし、猛勉強も虚しく進学を諦めることになる。厚い信仰心を抱くゴッホは、聖書の素晴らしさを苦しむ人に伝えなければと思っていた。その心は使命感で煮えたぎるようだった。そしてベルギーに渡り宣教師として活動できるルートをなんとか見つけだす。

煮えたぎる使命感に、突き動かされて。

ゴッホは炭鉱の町ボリナージュで宣教師見習いとして説教をすることになった。苦しい労働に従事し悲惨な生活をする人々を救いたい、ゴッホの夢はかなったのだ。だけれども衣服も食糧も人々に差し出し、何もかもなげうつ彼のやり方を伝道委員会は快く思わなかった。ゴッホは解雇される。

筆者はボリナージュを訪ねたことがあるが、ぼた山が連なる風景の中に爆発事故で破壊された炭鉱跡が無残に残っていた。炭鉱で働く坑内員たちは、地下深くで腰まで水浸しになりながら10時間以上も石炭を掘ったという。過酷な労働に人も町も疲弊していた様子が見て取れた。ここに自ら飛び込んだゴッホの気持ちは、決して半端なものではなかっただろう。間違いなく、本気で宣教師としてここで生きたのだ。

その夢が破れた後、ゴッホは画家になる決意をする。ボリナージュで燃やしていた情熱をそのまま携え、絵を描き始めるのだった。

ゴッホの歩んだ道は特殊な状況をはらんではいるが、このひとりの人間が偉大な画家になるまでの過程には、思春期、青年期の葛藤など、20代、30代を通過した者には共感できる部分も多い。迷いと挫折、そして諦め。ゴッホはそれを痛烈に味わい自分の存在の不確かさを知る。それでも彼は諦めず、32歳の時に手紙に綴る。《ぼくは自分独自でありたい》（弟テオへの手紙、1885年）。生活費を送金してくれる弟には自分のそんな決意と時に自己肯定的な言葉を繰り返し書き送った。兄弟の間には不安と虚しさが漂っていた。

だが、ゴッホはここから、少しずつ、自分の手で人生を掴み取っていく。絵を描くことで、彼は自分には何が大切なのか実感を深めていくのだ。それは何にも属さないゴッホ自身が信じ確信するもの。肖像画であれば、その人物の本質的な人格ということになる。

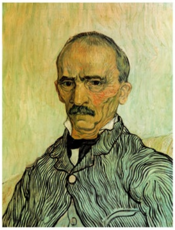
硬かった線は柔らかく、色彩も豊かになる。彼の絵の世界は深まり広がっていった。先の手紙から4年後、彼は綴る。《徹底的に芸術家でありたい》。ゴッホは、画家になっていた。

今、私たちは危うい時代に生きている。飛び交う情報の海の中で、リアリティを見失っていないか。真実とは何か？ 自分はどう思うか？ どう生きるのか？ 大切なものは何か？

ゴッホにとって、描くことは生きることだった。それを続けるのは容易くなかった。使命感に突き動かされるように描き続けても一向に絵は売れない。観客のいない劇場で独り芝居を続ける彼の中に虚無が広がっていく。32歳の手紙には続きがある。《自身のことでも、仕事のことでも人が何と言おうと、もう気にかけるつもりはない》（同前）。37歳で亡くなるまで、ゴッホは自分の気持ちを違えず絵を描き続けた。

鮮烈な色と力強い線。圧倒的な存在感で私たちをとらえるゴッホの絵。彼は常に自分の生きる世界と対峙した。その作品から率直さを感じる時、私たちは「真実の力」に突き動かされている。そうであるならば、その力を握りしめて、自分の人生にもどりたい。ゴッホが命をかけて描いた絵には詰まっている——私たちが自分を見つめ、この時を生きる力が。







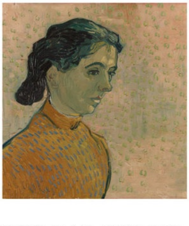












左上から右、上から下に：『アルルの女（ジヌー夫人）』1890年　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー　©Kröller-Müller Museum, Otterlo、『赤ん坊のマルセル・ルーラン』1888年　ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム　©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）、『サン・ポール療養院の看護主任トラビュクの肖像』1889年　ゾロトゥルン美術館　提供：akg-images/アフロ、『医師フェリックス・レーの肖像』1889年　プーキシン美術館　提供：Mondadori/アフロ、『カミーユ・ルーランの肖像』1888年　ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム　©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）　●『ゴッホとゴーギャン展』に出品（103ページ参照）、『パイプをくわえた農夫の顔』1885年　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー　©Kröller-Müller Museum, Otterlo、『パシアンス・エスカリエの肖像』1888年　ニアルコスコレクション　提供：Bridgeman Images/アフロ、『白い頭巾の農婦の顔』1885年　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー　©Kröller-Müller Museum, Otterlo、『タンギー親父の肖像』1887年　ロダン美術館　©Musée Rodin, Paris, France / Peter Willi / Bridgeman Images/amanaimages、『アルルの老婦人』1888年　ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）アムステルダム　©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）、『火のついたタバコをくわえる骸骨』1885～86年　ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム　©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）、『ジョゼフ・ルーランの肖像』1889年　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー　©Kröller-Müller Museum, Otterlo　●『ゴッホとゴーギャン展』に出品（103ページ参照）、『若い農夫の肖像』1889年　ローマ近代美術館　提供：Mondadori/アフロ、『男の肖像』1888年　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー　©Kröller-Müller Museum, Otterlo　●『ゴッホとゴーギャン展』に出品（103ページ参照）、『ズアーヴ兵』1888年　ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム　©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）　●『ゴッホとゴーギャン展』に出品（103ページ参照）、『若い女の肖像』1890年　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー©Kröller-Müller Museum, Otterlo　●『ゴッホとゴーギャン展』に出品（103ページ参照）

生誕から現代まで、画家と作品が歩んだ道。

わずか37年という短い歳月ながら、濃密な人生を送った画家ファン・ゴッホ。アート界の出来事や死後の評価の動きも含め、その足どりを振り返る。

年齢	西暦	出来事
0歳	1853年	●3月30日　オランダのフロート・ズンデルトに生まれる。
14歳	1867年	第2回パリ万国博覧会で日本美術が紹介され、注目を集める。
15歳	1868年	●3月　ティルブルフのウィレム2世国立高等市民学校を中退。経済的理由、あるいは成績不振か理由は不明。
16歳	1869年	●8月　伯父らが設立した美術商グーピル商会のハーグ支店に勤める。
20歳	1873年	●6月　イギリス・ロンドン支店へ転勤。下宿先の娘に恋をするも失恋。この頃から勤務態度が悪くなる。
21歳	1874年	第1回印象派展が開催される。
22歳	1875年	●5月　パリ本店に転勤。聖書を熱心に研究し、また美術へ触れる機会が多くなる。
23歳	1876年	●4月　仕事に熱が入らずグーピル商会を辞職。事実上の解雇だった。 ●補助教員としてイギリスの私立学校でフランス語、ドイツ語、数学を教える。
24歳	1877年	●5月　牧師を目指し神学部の受験準備を始めるが、途中で挫折。
25歳	1878年	●7〜10月　福音伝道師になるためブリュッセルで訓練を受けるが、修了試験に失敗。家族のいるオランダのエッテンへ戻る。
26歳	1879年	●ベルギーのボリナージュにて、過酷な環境で働く炭鉱の坑内員たちに伝道活動を行う。 ●7月　熱心すぎる伝道活動に伝道委員会は快く思わず、契約を打ち切られる。
		画家人生スタート
27歳	1880年	●目標を失ったまま貧しい生活が続き、弟テオに苦しみを訴える。テオからの仕送りが始まる。 ●画家になる決心をし、炭鉱で働く坑内員の生活を熱心に描く。 ロダンが『考える人』を制作。モーパッサンが『脂肪の塊』を発表、一躍、有名になる。
28歳	1881年	●従姉で未亡人のケー・フォス・ストリッケルに恋をするも、失恋。 ●ハーグにいる義理の従兄の画家アントン・モーヴ（マウフェ）のもとで絵画を学ぶ。 ●『祖父、フィンセント・ファン・ゴッホの肖像』1を描く。
29歳	1882年	●ハーグに移り住む。アトリエからの眺めを描いた『屋根』2を描く。 ●当時妊娠中の娼婦シーンと出会い、家族の反対を押し切って同棲を始める。

1



『祖父、フィンセント・ファン・ゴッホの肖像』
1881年　エッテン　ペンとインク、ぼかし　33×25㎝　ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

2



『屋根』
1882年　ハーグ　水彩　39×55㎝　個人蔵
提供:akg-images/アフロ

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

30歳　1883年

● モーヴがゴッホの性格に手を焼き、師弟関係を解消。

● 9～12月　シーンとの関係を解消し、ニューネンの両親の元に戻る。

31歳　1884年

● 2月　援助の見返りに、テオに作品を送り始める。

権威的な当時のアートシーンに対抗して企画された、事前審査のない『アンデパンダン展』が初の開催。

32歳　1885年

● 3月26日　脳卒中で父が死去。

● 『じゃがいもを食べる人々』3を描く。

● アムステルダムの旧・国立美術館で、レンブラントなどに感銘を受ける。

● 11月　ベルギー・アントワープに移住。街で日本の版画を購入。以後、ジャポニズムの影響を感じさせる作品が登場。

パリ時代

33歳　1886年

● 3月　突然パリへ向かい、テオのアパルトマンに住み始める。

● 画家フェルナン・コルモンの教室で、ロートレック、ベルナールらと知り合い、交流をもつ。テオを通じて、印象派、新印象派を知る。

第8回印象派展が開催される。

● 自画像4を描き始める。自画像は、生涯にわたって約40点、描くことになる。

34歳　1887年

● 3～4月　収集した浮世絵の展覧会を「カフェ・ド・タンブラン」で開催。

● 4～5月　絵具商のタンギーから、2枚の肖像画の注文を受ける。ベルナールやシニャックらとセーヌ河畔で、印象派、新印象派風の技法で制作する。

● 11月　「レストラン・ドゥ・シャレ」で展覧会を開催。しかし自らの絵は売れず。

● 12月　パリ生活に疲れ、しだいに精神に異常をきたす。

アルル時代

35歳　1888年

● 2月20日　アルルに到着。

● 3月　『洗濯女のいるアルルのラングロワ橋』5を描く。

● 5月　芸術家共同体のアトリエにすることを夢見て、「黄色い家」を借りる。家具を買い揃えるまで、ジヌー夫妻のカフェの2階に下宿する。

● 6月　漁村サント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールに小旅行し、初めて地中海を見る。

● 8月　最初の〝花瓶の向日葵〟作品となる『花瓶の3輪の向日葵』6を描く。

● 9月　「黄色い家」に住み始める。





3



『じゃがいもを食べる人々』
1885年　ニューネン　油彩、カンヴァス　82×114㎝　ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

4



『黒いフェルト帽の自画像』
1886～87年　パリ　油彩、カンヴァス　41・5×32・5㎝　ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム　©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

5



『洗濯女のいるアルルのラングロワ橋』
1888年　アルル　油彩、カンヴァス　54×65㎝　クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー
©Kröller-Müller Museum, Otterlo

6



『花瓶の3輪の向日葵』
1888年　アルル　油彩、カンヴァス　73×58㎝　個人蔵
提供：Alamy/アフロ

36歳 1889年

● 10月 ゴーギャンがアルルに到着し、共同生活を始める。
● 11月 （定説によれば）生前に唯一、売れた作品となる『赤い葡萄畑』7を制作。
● 12月23日 ゴーギャンとの口論の末に、自身の左耳を切除。病院に入り、ゴーギャンはアルルを去ってパリへ。
● 1月 退院して制作を再開。
● 4月18日 弟テオとヨハンナ（ヨー）が結婚。

サン=レミ=ド=プロヴァンス時代

● 5月8日 自らサン=レミのサン=ポール・ド・モーゾール療養院へ入院する。
●『星月夜（糸杉と村）』8を描く。
● 7〜9月 激しい発作を起こすようになり、制作やアトリエに入ることも禁止される。
● 9月 第5回アンデパンダン展に、『ローヌ河の星月夜』と『アイリス』を出品。
ゴーギャンらによる『印象派と総合主義展』がパリの万国博覧会会場で開催される。



7



『赤い葡萄畑』
1888年 アルル 油彩、カンヴァス 75×93㎝
プーシキン美術館 モスクワ
©Pushkin Museum, Moscow, Russia / Bridgeman Images/amanaimages

37歳 1890年

● 1月 ブリュッセルで開催された展覧会『20人展』に6点の作品を出展。
● テオとヨーに息子フィンセント・ウィレムが誕生。
● 3月 第6回アンデパンダン展に10点出品。
● 5月 サン=レミの病院を出て、パリにてテオの息子に初めて会う。
● 最後の自画像を描く。

8



『星月夜（糸杉と村）』
1889年 サン=レミ=ド=プロヴァンス 油彩、カンヴァス
73.7×92.1㎝ ニューヨーク近代美術館 ニューヨーク
©Getty Images

オーヴェール=シュル=オワーズ

● 5月20日 療養のためオーヴェールに滞在。
● 精神科医で、アマチュア画家でもあったポール・ガシェの診察を受ける。
●『鳥のいる麦畑』9など、パノラマの絵を描くようになる。
● 6月8日 テオとヨーと息子がオーヴェールを訪れる。
● 7月6日 テオからの手紙でパリに出向く。テオの家でロートレックらと会う。自分がテオの重荷になり悩んでいる旨をテオに宛てて書く。
● 7月27日 拳銃自殺を図り、重傷を負う。
● 7月28日 テオがオーヴェールへ駆けつける。
● 7月29日 午前1時30分、息を引き取る。
● 7月30日 オーヴェールの共同墓地に埋葬される。



9



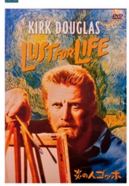
『鳥のいる麦畑』
1890年 オーヴェール=シュル=オワーズ 油彩、カンヴァス 50.5×103㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団） アムステルダム
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

死後

1891年	●ブリュッセルの20人展、パリのアンデパンダン展にゴッホ作品が出品される。 ●兄の死後、精神に異常をきたし衰弱したテオが死去。
1892年	●ヨーの尽力により、アムステルダムにて122点の回顧展を開催。
1893年	●コペンハーゲンでゴーギャンとゴッホの展覧会が開催される。 ●ベルナールがゴッホの書簡を公表、ゴッホの人物像にも関心が集まるように。
1894年	●ゴーギャンもゴッホの書簡を公開。
1900年	●『花瓶の立葵』10が1,100フランで売却。
1901年	●パリのベルネーム＝ジューヌ画廊で65点の油絵が展示。
1905年	●ヨーがアムステルダム市立美術館で474点の大規模回顧展を開催。
1910年	●文芸誌『スバル』で森鷗外がゴッホに触れる。 ●武者小路実篤ら白樺派が文芸誌『白樺』にて本格的にゴッホらを取り上げる。
1911年	●ベルナールが自分宛てのゴッホ書簡集を出版。
1914年	●ヨーがゴッホ書簡集全3巻を出版。
1928年	●ベルリンの画商オットー・ヴァッカー、画廊に持ち込んだゴッホ作品が贋作と疑われ、訴えられる。
1929年	●ニューヨーク近代美術館のこけら落としの展覧会で、セザンヌ、ゴーギャン、スーラ、ゴッホのポスト印象派の作品が展示される。
1934年	●アーヴィング・ストーンが小説『Lust for Life（邦題：炎の人ゴッホ）』を発表、ベストセラーに。
1935年	●ニューヨーク近代美術館など5都市でアメリカ初のゴッホ回顧展が開催、87万人以上を動員。
1937年	●パリ万国博覧会の企画の一環で大規模回顧展が開催。
1948年	●小林秀雄が『ゴッホの手紙』を出版、ゴッホの手紙は「告白文学の傑作」と絶賛。 ●フランスで映画『ファン・ゴッホ』（アラン・レネ監督）が公開される。
1956年	●『炎の人ゴッホ』11がカーク・ダグラス主演で映画化される。
1987年	●『花瓶の14輪の向日葵』12が歴代最高額の約3,990万ドルで安田火災海上に落札される。
1990年	●『医師ガシェの肖像』が歴代最高額の8,250万ドルで大昭和製紙の齋藤了英に落札される。 ●オランダのファン・ゴッホ美術館で没後100年の大規模回顧展が開催される。
2009年	●ゴッホの書簡集の完全版がオランダで刊行される。 ●フランスの出版社スイユがゴッホのスケッチブックを発見したと発表、11月の出版を予告。
2016年	●2002年にファン・ゴッホ美術館から盗まれた初期作品2点が、イタリアのナポリで発見される。

10

『花瓶の立葵』
1886年 パリ 油彩、カンヴァス 91×50.5cm チューリッヒ美術館 チューリッヒ
©Kunsthaus, Zürich, Switzerland / Bridgeman Images/amanaimages

11


『炎の人ゴッホ』
1956年 アメリカ ヴィンセント・ミネリ監督

12

『花瓶の14輪の向日葵』
1889年 アルル 油彩、カンヴァス 100.5×76.5cm
東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 東京
©Seiji Togo Memorial Sompo Japan Nipponkoa Museum of Art, Tokyo, Japan / Bridgeman Images/amanaimages

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

キーワード別に、作品の背景を徹底解説。

短い生涯を通じ、情熱と使命感をもって全身全霊で描き続けたファン・ゴッホ。その「本質」に迫るために、重要と考えられる11のテーマ別に作品を見ていこう。

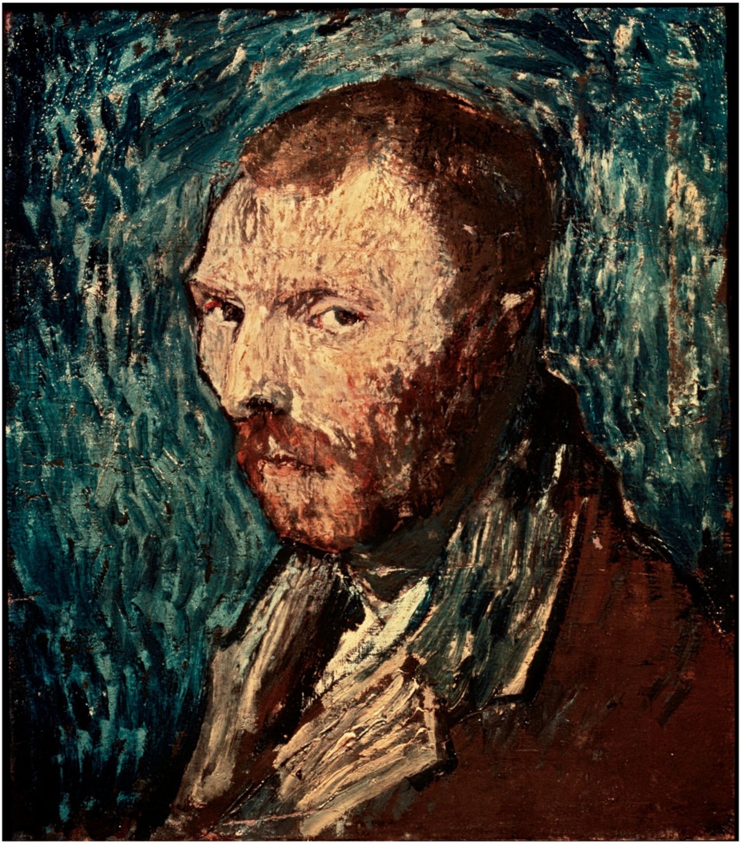
自画像は、画家の心を映す鏡なのか。

自画像



『黒いフェルト帽の自画像』
1886～87年　パリ
油彩、カンヴァス　41.5×32.5㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

1886年、ゴッホはパリにやってきた。そして自画像を描き始める。これはパリで描いた30点前後とされる自画像の中で、最初期の作品。オランダ時代の暗い色調をベースに、画面の右側から顔に光が当たっている。褐色の背景に浮かび上がるゴッホの顔はもの静かだ。

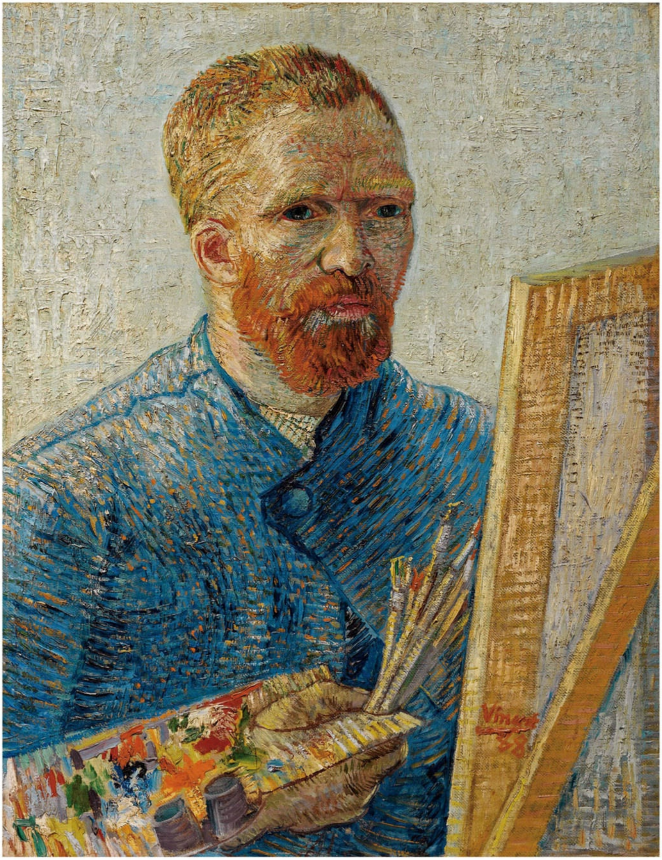


『自画像』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　51×45cm
オスロ国立美術館　オスロ

ゴッホの自画像の中で最後期の作品。塗り込められた背景と鈍い光に顔が浮き上がるような画面には、静かな迫力が漂う。肩を落とし下から見上げるような目つきは病み上がりという感じだが、実際この絵を描く少し前に、彼は精神不安の大きな発作を起こした。

提供:akg-images/アフロ



『画架の前の自画像』

1887～88年　パリ
油彩、カンヴァス
65.1×50㎝
ファン・ゴッホ美術館
（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

パリで描いた最後の自画像。パレットと筆を持ちイーゼルに向かう姿はまさに「画家」。弟テオの妻ヨハンナ（ヨー）が、数ある自画像の中でゴッホの印象に最も近いと思った絵でもある。イーゼルにかけられたカンヴァスの裏に「Vincent 88」と、サインと年代が記されている。

ファン・ゴッホを「自画像の画家」と思う人は、少なくないだろう。彼の名前を聞けば、その顔がなんとなく思い浮かぶ。本人の顔写真が20歳前の3枚しかないことを考えれば、それは自画像によって育まれたイメージだ。

ゴッホの油彩画は全部で約850点。自画像はそのうち約40点ということで、総数としては多くない。だが、自画像の画家という強い印象を与えるのは、どの作品も個性が際立っているからだろう。ここに並ぶ数点の自画像を見ても、ひとつとして似通ったものはないのである。

自分という「本質」を、いかに単純化するか。

ゴッホの画家としての人生は、農民や畑を描いていたオランダ時代を手始めとしてパリ、アルル、サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス、そしてオーヴェール＝シュル＝オワーズと大きく5期に分けられる。自画像がおもに描かれたのはパリ時代で約30点、アルル、サン＝レミでは、それぞれ5点前後となっている。パリ時代の作品を見ていくと、オランダ時代のスタイルを残した暗めの色調から始まる。そして、顔に当たる光や背景の表現に変化が表れる。帽子やジャケットをスタイリングしながら色彩の効果を試し、点描や大きな筆致など、表現が多様化していく様子は、自画像を通して絵画表現の探求をしているようにも見える。

ゴッホの自画像に見られるこの目覚ましい画法の変化は、パリという環境がもたらしたものだった。美術界の最先端であるパリで、時代は印象派から

麦わら帽子を被り、少し顎を突き出してパイプをくわえる。白い背景に帽子の黄色と上着の青が明るく映える。素早い筆致は軽やかだ。全体に明るい印象だが目元のあたりには帽子の影が落ち、限られた色で陰影の効果が図られている。ちょっと見開いたような目線は、どこか親しみ深い。



『パイプと麦わら帽子の自画像』

1887年　パリ　油彩、カンヴァス　41.9×30.1㎝
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム

●『ゴッホとゴーギャン展』に出品(103ページ参照)

くわえるパイプから煙がたちのぼる。ゴッホは愛煙家だった。見る者と距離を置くような眼差しは、どこか飄々としている。褐色の背景に朱色、さらに青い絵具の点が置かれている。パリでゴッホは、新しい画法を積極的に取り入れていった。左上に「Vincent 87」と記されている。



『グラスのあるパイプをくわえた自画像』

1887年　パリ　油彩、カンヴァス　61.1×50.2㎝
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム

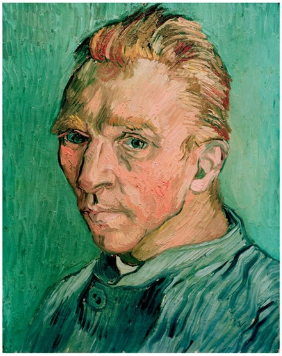
画家仲間のシャルル・ラヴァルと交換するために描いた自画像。友人に渡すためか、他の自画像作品とは異なる雰囲気を醸し出している。背筋を伸ばし視線を定め、口元もしっかり結んでいる。あえて自分を意識したような表情だ。鼻や目の下に白のハイライトも見える。



『自画像』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　46×39㎝
個人蔵

オランダにいる母にサン=レミの療養院から贈った自画像。入院中、ゴッホは精神不安の発作にたびたび悩まされたが、この自画像は母に順調に回復し元気にしていることを伝えたい、そんな思いで描かれたのだろう。血色もよく視線を右下にそらした表情は穏やかだ。



『自画像』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス　油彩、カンヴァス　40×31㎝
個人蔵

新印象派へとバトンが渡され、セザンヌやゴーギャンなど新機軸を打ち出す画家たちがしのぎを削っていた。オランダから出てきたゴッホは、この大都会パリの中でなんとか時代についていこうともがいたことだろう。彼らの画法を必死で吸収しながら、自己を見つめる日々。自分は何者なのか、何を描きたいのか、どう生きたいのか。

2年間、パリにどっぷり浸かったゴッホはくたびれ果ててアルルへ移った。多数の自画像に結実した自分探しの果てに、ゴッホは田舎への志向を思い出し、パリを後にしたのだった。アルル、サン=レミでの自画像はゴーギャンに贈るための一枚（本誌表紙参照）、耳切り事件後の作品（46ページ参照）など、特別な眼差しで自分を捉えたものに特化している。

ゴッホはサン=レミ時代に、こんな一文を弟への手紙に残している。《人物の研究こそ本質的なものを掴み、単純化することを教えてくれるのだ》（弟テオへの手紙、1889年）

ゴッホの絵には、人物であれ自然であれ、この画家が真に感じたことが明確に描き出されている。彼は対象を見つめ、観察し、考え、自分が最も感じるもの、つまりここでいう「本質」をつかむ。そして、線と色とで織りなす絵画として「単純化」するのだ。

ゴッホの自画像がどれも違う個性を放つのは、その時に見つめた自己（=本質）を、描き出す手段（=単純化）を突き詰めたからにほかならない。この画家の根本的なあり方が、ゴッホその人の顔である「自画像」も忘れ難いものにしているのだろう。

1 作家の視点

森村泰昌が考える、この2枚に潜むもの。



『パイプをくわえた包帯の自画像』

1889年　アルル　油彩、カンヴァス　51×45㎝

個人蔵

ゴーギャンとの確執をきっかけに精神不安を起こしたゴッホは、1888年12月23日に「耳切り事件」を起こす。警官に家で倒れているところを発見され病院に収容されるが、画家の脳裏には事件の記憶は残っていなかった。翌年1月になってから彼は本作を描いた。



森村泰昌

『肖像（ゴッホ）』

1985年　写真　86.5×82㎝

ゴッホの自画像に扮したこの作品は、森村さんのセルフ・ポートレートシリーズの第一作目となった。ゴッホの絵を見ながら服をつくり、絵から受ける印象をリアルに再現するため、帽子は粘土と釘でつくったという。自身はドーランでメイクをし、撮影に臨んだ。



Yasumasa Morimura

現代芸術家

●1951年、大阪府大阪市生まれ。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。85年、ゴッホの自画像に扮するポートレートで高い評価を得る。以降、一貫して「自画像的作品」をテーマに制作を続けている。

1985年、ひとりの青年がファン・ゴッホになった。作品を前に戸惑った人もいただろう。絵なのか写真なのかわからない、ゴッホなのか誰なのかわからない。青年は、当時34歳の森村泰昌さんだ。『肖像（ゴッホ）』は驚きを呼ぶ一方、高い評価を受ける。以来、森村さんは著名な人物に扮するセルフ・ポートレート作品を中心に、多彩な造形活動を展開している。

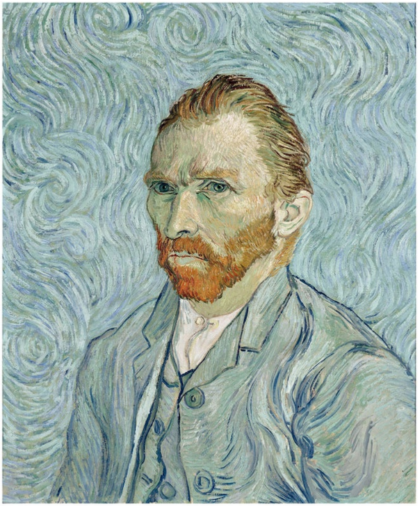
自分の中にいる、あずかり知らない自分。

この作品を通じて、森村さんはゴッホと「ご縁」ができたという。ずっと気になる存在であり、同じ芸術家としてその自画像とも対話を続けてきた。

「耳切り事件の後に描いたこの絵は、ものすごく不安な顔をしていますね」

耳を切り、意識が戻ってからゴッホは弟への手紙にこう書いている。《ところで、ゴーガンのことだが、ぼくは彼をびっくりさせたのだろうか》（弟テオへの手紙、1889年）。彼は自分がしたことを覚えていなかったのだ。

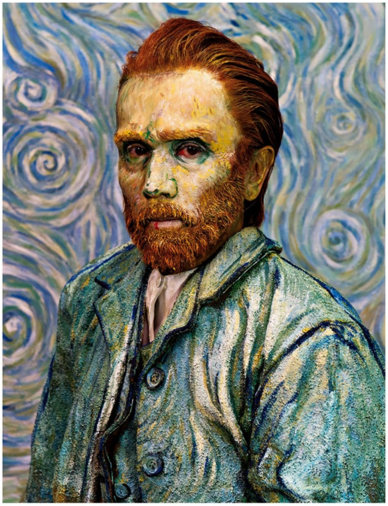
「目が覚めたら包帯が巻かれている、なんで？　そう思ったんじゃないでしょうか。ゴッホにとって自分の中にあずかり知らない自分がいる、戸惑ったと思います。彼は不安を抱えたまま、



『自画像』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス　油彩、カンヴァス　65×54.5cm
オルセー美術館　パリ

1889年の夏、サン=レミ=ド=プロヴァンスでゴッホは激しい発作に襲われた。数週間の苦しみの末に回復した彼は、2点の自画像を描く。本作はそのひとつで、自画像としては最後期の作品。「この絵の通り自分は健康だ」とゴッホは弟テオに手紙で説明している。



森村泰昌
『自画像の美術史（ゴッホ/青）』
2016年　写真　145×111cm

国立国際美術館（大阪）で開催された個展『「私」と「わたし」が出会うとき』に、新作として発表。ゴッホ、そしてゴッホを通じて自身を見る森村さん。ゴッホに扮しながらも「目」そのものは森村さんのものであり、その眼差しは、対峙する我々に投げかけられる。

自分が生きていることを確かめるようにこの自画像を描いたのでしょう」

今年、森村さんは新たにゴッホの1889年の自画像に扮した（上右の画像参照）。「僕自身、出発点に戻ってもう一度考えたいと思ったんです。僕にとってこの自画像を見ることは、まるで鏡を見るように自分を見ることでした」と。ゴッホを通して自分を見つめ、さらにゴッホのことも見つめたという。ふたりの芸術家の密接な関係が、作品へと昇華した。

「この絵は複雑で、僕にはすごく不安定に見えます。緑や青の色彩も不穏な感じがします。ですが、背景の揺らぎは萌え出づる青葉のようで生命力にあふれているという知人もいるのです」

この絵を描く直前、ゴッホは発作を起こし、自分を見失っている。

「ひとつの解釈に収まらない絵ですね。生きようとする力と、不安定で名状し難いものが背中合わせでひとつになっている。ゴッホ自身それを感じつつよくわからないまま、リアリティでもって描いているという気がします」

そして、この時期を最後にゴッホは自画像を描かなくなる。

「自画像って僕は、〝線〟だと思うんです。目や顔の形、つまり輪郭を線できっちり描いて確かめる。自画像を描かなくなったオーヴェール=シュル=オワーズ時代、線は消えています」

自分の内面を見つめて描く、そんな内省的な表現ではなく、もっと差し迫った自己確認、それがゴッホにとって、これらの自画像を描くことだったのではないか――ゴッホになった森村さんの実感だ。

1880年、画商や牧師の仕事に挫折した27歳のファン・ゴッホは、画家として生きる決意をする。その後、彼は〝ゴッホになる〟までに試行錯誤を繰り返した。なかでも、ゴッホの転換期である80年代半ばに繰り返し描かれた特異なモチーフが「靴」だ。

男性用の靴だけを単独で描いた絵は、ゴッホ以前の画家にはほとんど例が見られない。その数少ない先例のひとつに、ミレーが描いた木靴のスケッチがある。

ミレーを敬愛していたゴッホは、この絵が挿絵として掲載された本を見ていた。彼はこれに触発されたのか、靴が登場する静物画を描き始める。ただし最初は革靴ではなく木靴で、しかも単独ではなく野菜や鍋などとともに配置されていた。当時の木靴は、農民の暮らしのひとコマを切り取った静物画の伝統を踏まえたものであるようだ。

苦難に満ちた、人生という旅の象徴の靴。

我々が「ゴッホの靴」と言われて思い浮かべる〝履き古された革靴〟が、単独で登場するのは1884年頃のことだ。ゴッホは自分の目の前にあるものしか描くことができないが、モデルを雇う金はない。描く対象に困った彼が、自身の靴をモチーフにした可能性はある。しかしパリ時代の友人だった画家フランソワ・ゴージは、次のような興味深い証言を残している。

「（ゴッホはパリの）蚤の市で（略）きれいに磨いたばかりの一足の古靴（略）を買った。（略）ある雨の日の午後、彼はそれを履いて散歩に出、（略）泥にまみ



『一足の木靴』
1889年　サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス
油彩、カンヴァス　32.2×40.5㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

アルル時代に木靴を描いたもの。単独で木靴を描いた絵は、この1点しか確認されていない。この絵の少し後にアルルで単独の革靴を描くが、どちらにもサインがなく、習作と考えていた可能性もある。自己投影や農民の暮らしの象徴というよりは、素描のレッスンとして描いたものだろうか。

『靴』
1886年　パリ
油彩、カンヴァス　38.1×45.3㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

●「ゴッホとゴーギャン展」に出品（103ページ参照）

単独の革靴の絵は6点確認されているが、そのうちパリ時代に描いた最初の1点。どちらも左足であるという説もあり、当時パリで同居していた弟テオと自身の投影だとする見方もある。この絵を描いた前年の暮れ、テオは病に倒れ、ゴッホは絵画によってテオに恩返しをしようと靴の連作を始めた。



とにかく描いた！ 絵画へのほとばしる情熱。

初期作品

れてそれは興味をそそるものとなった」（『ゴッホを旅する』論創社）

ゴッホはこうして〝古色〟がついた靴を描いたという。靴の絵を多く描いたパリ時代の自画像にはこぎれいな服装のものが多く、くたびれた靴は似合いそうにない。自分が履いた靴を描いたというよりは、多分に演出が入っていると考えたほうがいいだろう。

ゴッホの靴に、苦労の絶えなかった、そして旅から旅を続けた彼の人生を重ね合わせる向きも多い。アルルで共同生活を送ったゴーギャンは、自分の部屋に飾ったゴッホの靴の絵について、「ゴッホがオランダからベルギーまで徒歩旅行をするために手に入れたもの」（『ゴーギャン オヴィリ――一野蛮人の記録』みすず書房）と述懐する。

また、ドイツの哲学者ハイデッガーは、ゴッホが描いた靴に、「労働の歩みのつらさ」（『ハイデッガー選集XII』内「芸術作品のはじまり」理想社）を見出す。ハイデッガーはゴッホの絵の靴を、農民の過酷な労働の象徴だと考えていた。が、アメリカの美術史家メイヤー・シャピロは、革靴はゴッホ自身を象徴していると見るほうが自然だという。革靴は農民ではなく、都市労働者が履くものだからだ。

ゴッホは画家としての理想の場所を求め、幼年期を除くと1～2年ごとに移動を繰り返していた。彼は手紙にも、「人生は旅である」と何度も書いている。ゴッホはアルルで自分の椅子とゴーギャンの椅子を対にしたものなど、椅子をモチーフにしたいくつかの作品を残した。休息の象徴である椅子と、旅をイメージさせる靴のように、



『一足の靴』

1887年　パリ　油彩、カンヴァス　32.7×41.3cm
ボルチモア美術館　ボルチモア

片方が裏側を見せている構図。年紀・署名があり、作品として意識していたことをうかがわせる。鮮やかなオレンジ色は、他の靴の絵には見られないものだ。靴は女性用のものであれば性的な隠喩でもあるが、ゴッホの場合は、靴にエロティックな意味を込めたとは考えにくい。



『黄色い麦藁帽子のある静物』

1881年　ハーグ
油彩、カンヴァス　36.5×53.5㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

風景画・農民画で知られたハーグ派の画家アントン・モーヴに学んでいた時に、最初に描いた油彩画。モチーフはモーヴの指導と思われる。彼はこの絵でゴッホの才を認めた。モーヴは習作をすべてとっておくようにとも指導。ゴッホはこの最初期の作品を母に預けていた。



『水盤の芍薬と薔薇』

1886年　パリ　油彩、カンヴァス　59×71㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

パリに出てきたゴッホのもとには当初、友人たちからよく花が贈られてきた。ゴッホは一連の花のシリーズで、ドラクロワらの色彩理論を実験している。この絵でも、暗い背景に壺や葉の緑と赤い花（現在は褪色している）の補色を配置、画面に強さを出している。

ゴッホは人生のさまざまな局面を「物」に仮託して描いたのかもしれない。「靴」以外の初期作品にはモチーフや色彩に関する実験を重ねていたことがうかがえる。独学で絵を始めたゴッホは生真面目な性格もあり、画商時代に見た実作や模写など、古典絵画に学ぼうとした。短い間だがアカデミーやハーグ派の画家アントン・モーヴのアトリエに通って指導を受けたこともある。

特にパリ時代の最初に多く描かれた一連の花の絵は、オランダ時代の暗く重苦しい雰囲気の絵から、色彩が躍る後期の作品への橋渡しとなる存在だ。《25歳（1878年）の頃の僕は灰色に夢中で、色彩のことなどほとんど眼中になかった》（友人の画家エミール・ベルナールへの手紙、1888年※）が、《去年（1886年）は灰色以外の色階―すなわちピンクや、柔らかい鮮烈な緑、明るい青、菫、黄、オレンジ、豊かな赤―の使用に慣れるために僕はほとんど花しか描かなかった》（妹への手紙、1887年※）という。

ゴッホは、パリで近代の色彩理論とウジェーヌ・ドラクロワの色彩論から、補色を隣り合わせに配置することで強い表現になること、色は隣に置かれた色によって感じ方が変わることなどを学んだ。南仏出身の画家アドルフ・モンティセリの絵具を厚く塗り重ねる技法や、自身が集めていた浮世絵からも、この時期に影響を受けている。

これら初期の試行錯誤は、のちのアルル時代にゴッホ独特の表現となって花開く。一見、のちの作品とは異なるようでも、そこにはゴッホにしか描き得ないものが潜んでいる。



『林檎の入った籠のある静物（リュシアン・ピサロに捧ぐ）』

1887年　パリ
油彩、カンヴァス　50×61cm
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

リュシアン・ピサロは、印象派の画家カミーユ・ピサロの長男。カミーユは印象派の画家たちのまとめ役と目されており、ゴッホとは親子ともに交流があった。カミーユはゴッホの主治医だった医師ガシェとも親しく、ゴッホの生涯におけるキーパーソンのひとりだった。

『後姿の石膏トルソ（女）』

1887年　パリ　油彩、カンヴァス　40.8×27.1cm
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

パリでゴッホは、サロン（官展）の画家であり古典的な画風で知られた画家フェルナン・コルモンの画塾に通う。ここで彼は着色されたトルソを約10点描いている。ゴッホはコルモンに人体表現を学びたいと考えていたが、当時ヌードモデルは少なくトルソで代用した。



『横たわる裸婦』

1887年　パリ　油彩、カンヴァス　24×41cm
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

数少ない裸婦像のひとつ。モデルは不明だが、カフェ・ド・タンブランを経営していたアゴスティーナ・セガトーリという説が有力。ふたりは“派手な喧嘩をする仲”、つまり愛人関係にあったと考える人もおり、ヌードモデルを雇う金がなかったゴッホのモデルとなったと思われる。



●50ページに引用した※の手紙のみ『没後120年　ゴッホ展』の図録より抜粋。



『画家の母親の肖像』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　40.5×32.5㎝
個人蔵

アルル滞在中のゴッホが、妹ウィレミーナ（ウィル）から送られてきた母のモノクロームの肖像写真が気に入らず、「記憶のなかの面影のように調和のとれた色合い」で生彩を与えようと描いた油彩画。顔には光が差し、緑の背景が品格を表している。

モデルに表れる、彼なりの女性観。

女たち

フィンセント・ファン・ゴッホの母、アンナ・コルネリア・ファン・ゴッホ（旧姓カルベントゥス）は、ハーグ王室御用達の製本師の娘だった。2歳年下の牧師のもとに嫁いだ彼女がフィンセントを産んだのは34歳の頃になる。

それが、ゴッホがかなり年上の女性に惹かれたり敬意を表することと関連があるかはわからない。だが、彼が描いた女性像を眺めると、年を重ねた姿や苦労の跡のにじむ姿が多く目にとまる。両親との不和や放浪の中、母への思慕もあったのではないだろうか。

テオからもらったモデル料で、若く可憐な女性も描いてはいる。だが、《いっぱい働く女の手をもっている》《通り過ぎていった人生の面影がある》（弟テオへの手紙、1881年）女性に魅力を感じると、ゴッホ自身も語っている。こうした女性観は、対象を目の前にして、その奥にある人間性を描こうとする絵画の探求にも通じている。美しさとはなにかを問う、近代的な肖像画の萌芽ともいえる。

ことごとく実らぬ恋、そして家族への憧れ。

プロテスタントの家に育ったゴッホは、人を愛することこそ神の教えに従うことだと考え、なにより孤独感から妻子をもちたいと願っていた。だが、何度も恋に破れ、絵も売れず、その夢はついぞ叶うことはなかった。

恋の遍歴は20歳から始まる。伯父のつてで入社したグーピル商会ロンドン支店に勤めていた頃、思いを寄せる女性がいた。だが、彼女は別の男と結婚してしまう。仕事が手につかないほど傷ついたゴッホは、パリ支店への転勤を命じられる。しかし、そこでも立ち直ることなく、ついに解雇されてしまう。テオの妻ヨハンナが書いた伝記では、相手は下宿先の娘とされている。

画商の道も閉ざされ、聖書に慰めを求めるようになると、悲しみを抱えた弱い女性を救いたいという使命感が恋愛感情になっていく。父の赴任先エッテンに帰省し、画家修業を始めてまもない28歳の頃、7歳上の従姉ケーが未亡人となり、父の牧師館に逗留した。彼女を慰めるうちに恋に落ちたゴッホは、8歳になるケーの息子の父親になると申し出る。

しかし、夫を失った悲しみの癒えないケーは求愛を拒絶し、アムステルダムに帰郷する。ゴッホはその家まで行き、ケーの両親に懇願した。ランプの炎に手をかざし、「その間だけでも会わせてください」と。それを知ったゴッホの父母とも口論になってしまう。

ハーグに移り住んだゴッホの次の相手はクリスティンまたはシーンと呼ばれる娼婦で、父親のわからない子どもを妊娠し、5歳の娘も抱えていた。ゴッホは彼女たちと同棲し、テオにさらに送金を求めるようになる。またもや父母に結婚を反対されたゴッホは、世間や教会が蔑視する対象へと愛情を傾けていく。

ゴッホはシーンに売春をやめさせ、絵のモデルをさせるなど、画家の妻として相互扶助の関係性をつくろうとした。しかし娼婦としてしか稼ぐ術を知らないシーンは、同じ道へ戻る。もとより家族を養えないゴッホは、シーンたちと別れた。



『右腕に子どもを抱くシーン』

1882年　ハーグ　鉛筆、水彩、紙
40.5×24㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

シーンと送った共同生活は1年あまり。出会った頃に彼女が身ごもっていた、父親のわからない息子も無事に生まれ、ゴッホは父親代わりを務めた。白いおくるみの質感と、あどけない赤ん坊をあやす母子像を描きながら、貧しくも束の間の幸せを感じていた。

『悲しみ』

1882年　ハーグ　鉛筆、ペン、インク
44.5×27㎝
ニューアートギャラリー ウォールソール　ウォールソール

娼婦シーンをモデルに挑んだ素描画は、周囲の反対を押し切り、ハーグで同棲する少し前に描かれた。やせ細った妊婦の裸体が硬質な線で描かれている。感動が伝わる出来に満足してリトグラフも制作した。「Sorrow」という文字や足元に植物が描き込まれているのは、このオリジナルのみ。





従姉のケー・フォス・ストリッケルと息子の肖像写真。もの静かだったというケーの肖像画は残っていない。ゴッホは画家修業を始めたばかりで、ケーに避けられたこともあってか、彼女を描くチャンスに恵まれなかったのだろうか。

『カフェ・ド・タンブランのアゴスティーナ・セガトーリ』

1887年　パリ　油彩、カンヴァス
55.5×47㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

パリ、モンマルトルのクリシー通りにかつてあったカフェ・ド・タンブランの女主人。イタリア系で、コローのモデルをしていたこともある。虚ろな目と、タンバリンの形をしたテーブルの上の煙草と酒が、退廃を表す。赤い帽子と緑の服で、補色効果を狙っている。





『白い頭巾の農婦の顔』

1885年　ニューネン
油彩、カンヴァス　44×36㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

ニューネンでは農民たちに近づくため、テオからの仕送りでモデル料を支払い肖像画をたくさん描いた。頭巾のしわやリネンの質感に注意を払いながら、自然と一体となった生活を送る彼女たちの尊厳を真正面から捉えた経験は、『じゃがいもを食べる人々』にも発展。

ゴッホは父が移り住んだニューネンに身を寄せ、骨折した母を介抱するうち、父母との関係を修復する。また、農民を描く中で、《農民の娘の方が僕の見るところでは淑女より美しい》（弟テオへの手紙、1885年）と感じていた。ゴッホは10歳上のマルホットから好かれ、恋仲に。しかし双方の家族から反対され、マルホットは自殺未遂事件を起こす。また、別の娘が妊娠した際には疑いをかけられ、村の娘たちがゴッホの絵のモデルになることを禁じられてしまった。

村を追われたゴッホはパリで色彩表現を開花させる。モンマルトルの「カフェ・ド・タンブラン」の女主人、13歳年上のアゴスティーナ・セガトーリとは情を交わす仲になったともいわれる。カフェでは、ロートレックやベルナールらと絵画の展示も行った。アルルでは当初、ジヌー夫人の経営するカフェに下宿。こうしたカフェは堕落の場所だとも思いながら、都会の中心から外れた女たちは人間の本質を知っていると、彼は一目置いていたのだ。

アルルでは、郵便局員ルーラン、その妻と子どもたちの肖像画を描いている。ルーラン夫妻は「耳切り事件」の後も変わらぬ友情を示した。ゴッホは感謝と憧れと祝福を込めて、家族というものを描いていたに違いない。

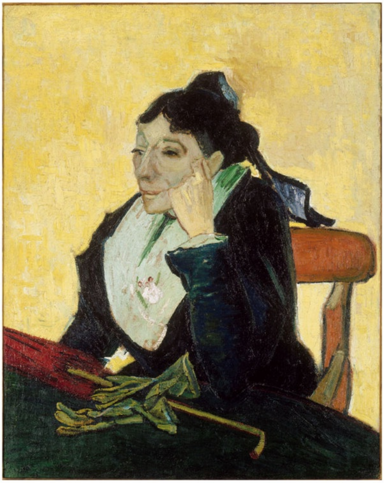
オーヴェール＝シュル＝オワーズでは、医師ガシェの娘マルグリットに恋をしたがガシェに反対され、失恋したという説もある。マルグリットは当時19歳だが真相はどうだろう。生涯独身を通し、ゴッホ兄弟の墓に献花を欠かさなかったという。

『ピアノを弾く マルグリット・ガシェ』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　102.6×50cm
バーゼル市立美術館　バーゼル

オーヴェール=シュル=オワーズの医師ガシェは、印象派のコレクターでもあった。彼の19歳になる娘マルグリットの肖像画を、ゴッホは長短異なるタッチで描き、彼女に贈っている。色彩の調和を音楽にたとえたゴッホの象徴的な一枚。死の前月の、幸福な時間だ。





『アルルの女、 手袋と傘のあるジヌー夫人』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　92.3×73.5cm
オルセー美術館　パリ

『夜のカフェ』という作品に描かれたカフェを経営していたジヌー夫人。ゴーギャンとともに描いており、通常は人物を正面から描くゴッホが横から描いたのは、ゴーギャンが夫人の目の前に座ったためか。テーブルの上で本を開いている、黄と紫のコントラストが強い別バージョンもある。



『子守女 （オーギュスティーヌ・ルーラン）』

1889年　アルル
油彩、カンヴァス　92×73cm
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

アルルの街でゴッホに親切だった郵便局員ルーラン。その夫人がゆりかごの紐を持つ肖像がこれだ。耳切り事件の前に着手し、のちに完成させた。観る者に慰めを与える絵画として、タッチや服の色、背景の壁紙の花柄などを変えて、繰り返し描いている。現存作品は5点。

父の存在は、彼を生涯縛り続けたのか？

父と宗教



『聖書のある静物』
1885年　ニューネン
油彩、カンヴァス、65.7×78.5㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

牧師である父テオドルスが急死したのちに描かれた作品。大きな聖書はゴッホの父が愛用していたもので、旧約聖書「イザヤ書53章」のページが開かれている。灯の消えた蝋燭は父の死および生の儚さを象徴し、手前のゾラの本『生きる歓び』は、フィンセント自身を象徴している。

大きな聖書は「父」、そばにある小さな書物は「息子」。『聖書のある静物』は、父に憧れ聖職者になろうとしたフィンセント・ファン・ゴッホが、なぜ画家になったのかを解くカギとなる。

父テオドルスは、家業を継いで牧師になった。カトリックが大半を占めるフロート・ズンデルトで少数派のプロテスタント、オランダ改革派の教会に着任したのは1849年。この村で結婚し、53年3月30日に生まれたのが、フィンセントである。

父への憧れと諍い、生と死を見つめ直して。

教会に行くたびフィンセントは、自分と同じ名前の墓を目にしていた。彼が生まれる1年前の同日に、第一子で同名の兄が死産していたのだ。自己の存在を確立しなければという思いと長男としての重圧を背負い、両親や友だちともうまくコミュニケーションがとれない。母と同様に植物が好きな彼は、ひとりでよく散歩していたという。絵を描くことも好きで、11歳の頃、農家の家と納屋の素描を父の誕生日に贈ったこともあった。

一族は、牧師や海軍高官、画商が連なる中産階級だった。まずは画商修業に出たが、自分がいいと思わない絵を売る気持ちになれず、伯父たちを非難して辞めさせられてしまう。

その後、書店員や教員をしながら聖書に救いを求めたフィンセントは、父のような聖職者になりたいと思い立つ。父は偉大なる模範だったのだ。

ベルギーの炭鉱地帯ボリナージュの教会で、伝道師としての仮免許を得た

『炭鉱の女たち』

1881年　ブリュッセル　鉛筆、インク、水彩、紙　43×60㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

ボリナージュ滞在時ではなく、のちに記憶をもとに描いたデッサンだが、袋を持つコツなど、よく観察している。石炭袋を頭に載せ、腰をかがめて運ぶ坑内員の妻たち。遠景に教会、木の幹にはキリストの磔刑像が見える。貧しい労働者への共感を示す、宗教的な絵画。





父の生涯で最後の職場となったニューネンの教会。小さいながらどっしりとした存在感がある。ゴッホは1883年から約2年帰省し、現存作品の4分1を占める作品を制作した。教会と一本道は、ゴッホ作品によく登場するモチーフ。



『ニューネンの教会の会衆』

1884～85年　ニューネン　油彩、カンヴァス　41.3×32.1㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

ゴッホの父が、牧師として勤めていたプロテスタント教会。立ち木と落ち葉が折り重なる道を美しい色合いで、粘りのある力強いタッチで描いている。教会から出てきた人々の、のどかな風景。オランダ時代にも、色彩に関心を寄せていたことがわかる。

のは79年。坑内員たちの劣悪な環境に我が身を投じることが「救済」になると思っていた。坑道にも下りていき、炭鉱爆発で医者も見放した瀕死の男を看病して、回復させる。給金も坑内員たちにあげてしまい、身なりもボロボロ。だが教会からは、伝道師の威厳を損なうとして罷免されてしまう。

そんな教会の権威主義に失望したフィンセントは、芸術家への転身を心に決め父の赴任先のエッテンに帰省。しかし、前述したケーやシーンとのことで両親との溝は深まる。父が以前、息子を精神科の病院に入れようとしたことも、しこりになっていた。聖職者としての「良識」にも失望していた。

それでも無一文になれば、息子は帰り父は受け入れる。父の赴任先のニューネンに帰っていた85年3月26日、父が急逝。その2日前、「あの子が曲がりなりにもなにかで成功してくれればいいのだが」と父は書き残していた。

フィンセントは実家と距離を置くことになり、『聖書のある静物』を描く。父愛用の聖書のかたわらにある小説は、エミール・ゾラの自然主義文学。古い宗教の「死」と新しい「生」。フィンセントは聖書ではなく、同時代の文学になぞらえ、人間が感じるままの人生をどう描くかを考え始める。また、死者である父と、生者である自分とを対峙させることで、自分は何者なのか、それを知るには、まず自分を描かなければならないことに気づいたのではないだろうか。自分を肯定し解放しなければ、他者を救うこともできない。それが、やがて形になる自画像の連作へとつながっていく。



「じゃがいも」に執着した、その理由とは。

じゃがいも

1885年の春、《馬鈴薯の皿の周りを囲んだ農家の人たちの構図をやり始めるつもりだ》（弟テオへの手紙、1885年※）と、ファン・ゴッホは手紙に書く。画家になる決意をしてから約5年。その間、畑やそこで働く人々を必死で描いてきた彼は、その集大成ともいえる『じゃがいもを食べる人々』を描こうと奮闘していた。

ランプの灯のもとにテーブルを囲む人々。カップを差し出す男性をよそにコーヒーを注ぐ女性。中央の人物は背を向け、左側の男女はじゃがいもに手を伸ばす。皿の上のじゃがいもからは湯気が立ち上る。一見、薄暗く貧しい食卓だが厳かな雰囲気が漂う。

生の象徴＝じゃがいも、理想の生き方を描く。

ゴッホは手紙にこの絵のことを熱っぽく綴る。《ぼくは、ランプの光のもとで馬鈴薯を食べているこれらの人たちが、いま皿に伸ばしているその手で土を掘ったのだということを強調しようと努めたのだ》（弟テオへの手紙、1885年※）と。仕事を終え夕食にありつく疲れ切った人々。彼らは畑仕事をしたその「手」で、じゃがいもを食べるのだ。ゴッホは続ける。《だから、この絵は〈手の労働〉を語っているのであり、いかに彼らが正直に自分たちの糧を稼いだかを語っているのだ》（弟テオへの手紙、1885年※）

早朝から過酷な農作業に従事する彼らは、じゃがいもを得るために働く。売るにしても自分たちで食べるにしても、「食べる＝生きる」ために。ゴッホにとってそれは「正直に自分たちの



『じゃがいもを食べる人々』

1885年　ニューネン
油彩、カンヴァス
82×114㎝
ファン・ゴッホ美術館
（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

農民画家を目指したゴッホ初期の代表的作品。制作に先駆け、ゴッホは近郊の農家に通い、農民たちの肖像を50点以上描いた。昼の光の中か夜の灯火のもとか、状況の設定と構図の研究を繰り返し、人物の表情や手の角度など細部にもこだわったゴッホ渾身の大作。



『黄色い鉢に入ったじゃがいものある静物』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　39×47㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

パリに移ったゴッホは、印象派などの最先端の絵画に触れ、自らの色調を劇的に変化させていく。アルルで描いたこの絵は、黄色の鉢に青い影が施され、底抜けに明るい印象だ。塗り重ねられた細かなタッチがじゃがいもの歪んだ形や表皮、窪みを巧みに表している。



『じゃがいもの入った籠のある静物』

1885年　ニューネン
油彩、カンヴァス　45×60.5㎝
ファン・ゴッホ美術館
（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

『じゃがいもを食べる人々』を描いた後、村の牧師は農民たちにゴッホの絵のモデルにならないよう勧告。モデルを失った彼は、農村の風景と静物画を描くほかなかった。暗い色調の中で質感もリアルに描かれたじゃがいも。ゴッホは黄土色の色調を研究すべく、この絵を描いた。

糧を稼いだ」ということ。働くことは「正直に生きる」ことの表れなのだ。労働の目的かつ成果であるじゃがいもは、「生の象徴」として描かれている。

現在のオランダでじゃがいもの生産量は年間600万トン以上。16世紀にヨーロッパにもたらされたじゃがいもは18世紀に盛んに栽培されるようになり、19世紀にはオランダの主食となる（『ジャガイモの世界史』中央公論新社）。ゴッホが暮らしたニューネンでも多くの農家が栽培を手がけていた。

この頃ゴッホは父親を亡くしたばかりで、残された母や妹とは折り合いが悪く、問題ばかり起こしていた。けれどもこの絵と手紙にも見られるように、ゴッホの心は常に「いかに生きるか」という根本的な人間のあり方に向けられていた。そんな彼の人間性は極端な言動に覆い隠され、容易には理解されない。この絵も画家の友人に酷評される。気落ちしたゴッホはいくつか静物画として描くことはあっても、こんな風に自らの想いを込めて再びじゃがいもを描くことはなかった。

名誉や自己顕示とは隔てられた、大地に根ざす堅実な農民たちの生。ゴッホはオランダ人にとって最も基本的な食料であるじゃがいもを通じ、生きる糧を得るという尊い行為、それを食すという自然な営みを描こうとした。それは彼が理想とする「生き方」の縮図であり、つまりは自身にとって、画家としてどう生き「いかに描くか」という決意表明でもあった。農民たちの生き方を画家として実践したいと願ったゴッホは、生涯じゃがいもと土の香りを忘れることはなかった。

●58ページに引用した※の手紙のみ『ファン・ゴッホ書簡全集』（二見史郎訳、みすず書房）より抜粋。

安野光雅が見る、ゴッホの風景。

風景



画家であり絵本作家である安野光雅さんは、若い頃からファン・ゴッホの絵を見つめてきた。海外旅行が自由化された1960年代初頭にはヨーロッパに行き、ゴッホ終焉の地オーヴェール=シュル=オワーズを訪ねている。

「ゴッホという人は、ともかく絵を描くのが好きでたまらない人だったと思う。描かずにはおれない——彼の絵からはそんな心情を感じます」

そう語る安野さん自身、幼い頃から現在まで、絵を描かない日はないという人生を歩んできた。それだけにゴッホの気持ちがわかるという。

実際の風景を前に、自分の描きたい絵を描く。

「画家になる決心をしてまもない頃に描いた畑の風景（62ページ中央参照）は、表現は硬いですが畑を見つめ、必死に描く様子が伝わってきますね」

紙に刻むように塗り重ねたインク。神の恩恵である大地、つまり畑と、そこで働く人の姿を描き出すことに、この頃のゴッホは熱中した。初期の素描には目の前に広がる風景を忠実に写そうとする実直な眼差しが見て取れる。

安野さんは1968年に初の絵本『ふしぎなえ』を発表。以来、絵本作家として、日本国内だけでなく海外からも高く評価されてきた。

一方、画家としては長年、風景画を描いている。1888年にパリからアルルに移ったゴッホが自らの画風に目覚めるように描いた『収穫』は、同じく風景を描いてきた安野さんには、どのように見えるのか。

「なんの変哲もない平坦な畑を、目に見えるようにそのまま描き出すのは、思いのほか難しいのです」

目に見えるように描くということはつまり、「写実的」に描くということ。35歳の時にゴッホが描いたこの絵には、青空のもと黄金色の小麦畑が広がっている。ゴッホはアルルの村の外れのラ・クロー平原に何度となく通い、実際の風景を前にこの絵を描いている。

「画家は風景を見ながら自分の〝描きたい風景〟を描くんです。つまりそれは、写真のように見たものを写し取るのではなく、自分らしい絵に、自分自身の手で仕上げていく作業なのです」

その後、アルルからサン=レミ=ド=プロヴァンスに移り、療養院の自分の部屋から、やはり麦畑をモチーフに描いた『囲まれた麦畑と日の出』（62ページ参照）はどうか。

「これはよりいっそうゴッホの思いが前に出ています。自分が風景を見て感じた印象、自分の思いが画面にあふれています。まるく輝く太陽が描かれていますが、太陽を見た通りに描けば実際こんなに大きくはなりません。やはりここでも、ゴッホは自分の描きたいと思う絵を、彼流に描いています」

ゴッホは画家仲間のエミール・ベルナールに手紙でこう吐露している。《いつも必ず現場で直に仕事をしながら、ぼくはデッサンのなかの本質的なものを摑もうと努力する》（ベルナールへの手紙、1888年※）。ときに想像力を働かせて描くこともあったが、基本的には風景やモデルなど、常に対象を前に絵を描こうとしたゴッホは、自分はリアリストであることを強く自覚していた。安野さんは続ける。

「ゴッホはほとんど無自覚のうちに、写実を超えたんだと思う。確たる自分の要素、自分の視点をもち、様式に縛られず、人にどう思われるかも気にせず、自分の信じる道を進んだ。その結果、彼の絵は写実から自然に自分らしい個性を携えた、いわば抽象へと向かったのだと思います」

終焉の地で描いた『雨雲のあるオーヴェールの麦畑』（62ページ参照）については、「こんな、なにもない畑の絵は、僕は描けないですね。これは風景画というよりも、色とタッチでつくった彼の絵に見えます」と言う。

まさに、この絵には風車や教会、働く人など主題となりうる対象がなく、空と雲、畑だけが描かれている。かといって、正確に風景の描写がされているわけでもない。確かに、色とタッチで構成された「絵」だ。

「画家の視点はそれぞれです。ゴッホが描いた『アルルの病院の中庭』（63ページ参照）、僕はあそこに実際に行ってみて、同じ場所に立ってみましたが、とてもここで絵は描けないと思いました。ここを描こうという発想ももたないし、描けと言われても困ってしまいます。それぐらい、僕にとっては絵にしにくい場所」



ちょうど夏の収穫を終えたばかりのアルル近郊の麦畑。ゴッホはこの周辺で絵を描いたとされる。この地方ならではの強い季節風、ミストラルに悩まされながらも毎日のように外に出て、風景画を描いた。



©安野光雅美術館

Mitsumasa Anno
画家

●1926年、島根県津和野町生まれ。画家、絵本作家であり、エッセイスト、装丁家としても幅広く活躍。「旅の絵本」など世界的な人気を誇るシリーズをはじめ著作は約300冊。2012年、文化功労者に選出された。



『収穫』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　73.4×91.8㎝
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム

●「ゴッホとゴーギャン展」に出品(103ページ参照)

6月、アルルの小麦畑は収穫を迎える。黄金色に輝く畑を描こうとゴッホは毎日のように足を運んだ。青い空のもとに広がる畑、彼方にはアルピーヌ山脈が描かれる。無数に重ねられる細長い筆致と鮮やかな色彩。ゴッホは己の画風をアルルの地で爆発的に開花させた。



『囲まれた麦畑と日の出』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　71×90.5㎝
個人蔵

ゴッホが入院していたサン=レミの療養院の裏には、塀に囲まれた麦畑があった。付添人がいなければ外で絵を描くことが許されなかったため、ゴッホは自室の窓越しにこの畑をたびたび描く。季節は冬。平らな畑を大きな太陽が照らす本作はどこか神秘的でもある。



『雨雲のあるオーヴェールの麦畑』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　73×92㎝
カーネギー美術館　ピッツバーグ

オーヴェールには広大な麦畑があり、ゴッホは約2カ月の間に畑の絵を10点以上描いた。弟テオにこの絵のスケッチを送っていることからも、明確なプランがあって描いた絵と思われる。雲に見られる大きなタッチ、素早い筆致は、この時期の作品の特徴のひとつ。



『ロースダイネン近郊の砂丘の馬鈴薯畑』

1883年　ハーグ　インク、水彩、簀の目紙　27.5×42㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

畑やそこで働く人の姿を描きたいという想いに、ゴッホの絵描きとしての人生は貫かれていた。30歳の時、ハーグで画家を目指していたゴッホは、娼婦シーンとの恋愛の真っただ中。そこで初心に戻るべくロースダイネンに小旅行し、畑を見つけ、感激とともにこの絵を描いた。

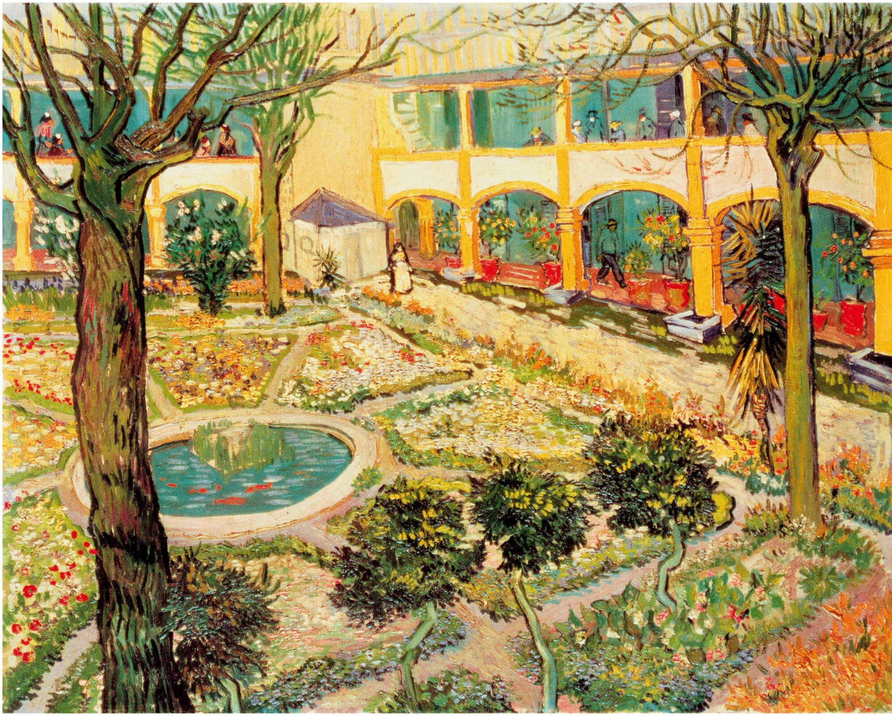
耳切り事件の後、ここに入院したゴッホはどうしても絵を描きたくなり、病院内をモチーフにした。

「私とゴッホだけを比べても、絵として描こうと思うものが違う。それは当然のことかもしれません。私にとって困難なものも、ゴッホはやすやすと描いています。ただ、その逆もありで、彼にとっては絵にならないものを私が描いているということもあるでしょう。靴を描いた絵がありますが、これなんかは本当に特別な絵です。家の中で描くものを探しているうちに、靴まで描いてしまったのではないかと思います。そして椅子、木の根、病院というふうに、ともかくゴッホはなにかを描いていたい、絵を描くことが本当に好きだったんだと思います」

描いて描いていくうちに、つかんだ独自の画風。

絵描きを目指した当初から取り組んできた畑の風景。思い入れを込めて、見た通りに絵に写そうと初期の作品では必死に描いている。その後、印象派の画家たちからの影響もあって、明るい色彩を存分に使いながら再び畑を描いた。描いて描いていくうちに、ゴッホは自分の画風に到達する。

彼はごく自然に風景の写実描写から離れて、自身の表現に進んでいった。それは、アルル、サン＝レミで熟成され、オーヴェールで抽象画の領域に近づいていく。色彩とタッチ。画家自身、意識することはなかったかもしれないが、モダニストとしてのゴッホの先駆性は、牧歌的な畑の風景のなかに、既に宿っていたのだ。



『アルルの病院の中庭』

1889年　アルル
油彩、カンヴァス　73×92cm
オスカル・ラインハルト美術館
ヴィンタートゥール

ゴーギャンとの確執が引き金となった耳切り事件の後、ゴッホはアルルの病院に収容される。この絵は、1889年春に再入院した時に描いたもの。妹への手紙に、「花と春の緑にあふれた絵だ」と書き送っている。病院という限られた空間の中で、ゴッホは絵のモチーフを懸命に探し求めたのだろう。



アルルの病院の中庭は、現在「エスパス・ファン・ゴッホ」という文化施設になり見学が可能。ゴッホの油絵とスケッチ、妹への手紙に記した花の名前などをもとに、当時の様子を再現する。

●60ページに引用した※の手紙のみ『ファン・ゴッホ書簡全集』(二見史郎訳、みすず書房)より抜粋。

独特のポーズに、にじませた感情とは。

人物のポーズ

種を播く



『夕陽と種播く人』

1888年　アルル　油彩、
カンヴァス　64×80.5㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

ミレーの画題から自らの表現をついにつかむ。まばゆいばかりの夕陽。空と大地が黄、青、オレンジ、赤、緑、紫の短い筆跡の集積でつながり、見る者の網膜と感情を捉える。種を播いている人は、当初は青い上着に白いズボンだったが、本作では全身が青っぽい。



『籠を持つ種まく人』

1881年　エッテン　黒チョーク、
茶色と灰色の淡彩、不透明水彩、白の不透明水彩による
ハイライト、簀の目紙　62×47.2㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

種を播く農民を描いた初期の素描。ミレーらの農民画に影響を受けて木炭画を教本で学ぶ。イギリスの挿絵入り雑誌の影響もあるのか、イラストレーション的でもある。「種まく人のポーズをした人を描いているようだ」と友人作家に言われるも、上達する自信を持っていた。

頭を抱える



『頭を抱えた老人』

1882年　ハーグ
鉛筆、黒クレヨン、淡彩、
不透明水彩、水彩画用紙
31.9×33.8㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

ハーグ時代にリトグラフを模写した作品。のちに描かれた『疲れ果てて（永遠の入口）』に展開されていく。絶望に打ちひしがれやすいゴッホの実体験が、強い感情表現に結晶化したよう。レンブラントを思わせるドラマティックな明暗表現。

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

ファン・ゴッホの信仰心と芸術の道を最初に結びつけたのは、ジャン＝フランソワ・ミレーの農民画だ。近代化する19世紀、発展する都市ではなく農村に価値を見出したミレーは心の「父」であり「師」であった。画家になる決心をしたゴッホはミレーの作品の模写など、ほぼ独学でデッサンを始め、農民や労働者は生涯のモチーフとなる。

ただし、坑内員や農民に寄り添う聖職者になろうとしてきたゴッホは、都会人の郷愁を誘うために農村をロマンティックに描く当時の流行には反発した。現実に根ざした労働の姿を捉えたい。重労働によって歪み、折れ曲がった身体を鑿で刻まれたかのような彫刻的な画風で、彼らの尊厳を描こうとした。模写を始めた当時の硬かった描写も、しだいにのびやかになっていく。

播く、掘る、頭を抱える、循環する人生と自然。

サン＝レミ＝ド＝プロヴァンスの療養院に自主入院した1889〜90年、ゴッホはミレーの模写を21点制作する。モデルがいないので、《模写をモチーフとして目の前に置いてポーズさせる。それらを色彩で即興制作する》（弟テオへの手紙、1889年）という方法をとった。もとがモノクロ版画のため、色彩には想像力が発揮される。それをゴッホは、ある作曲家が他の音楽家の曲をアドリブ交じりで演奏するようなものと見なした。ただの空想の産物ではなく、観察してきた経験が実を結ぶ。模写は、技術的なトレーニングになるだけでなく心の慰めになっていた。かつて彼は、こう綴った。

掘る



『掘る農婦』

1885年　ニューネン　油彩、カンヴァス　42×32㎝
バーバー美術館、バーミンガム大学　バーミンガム

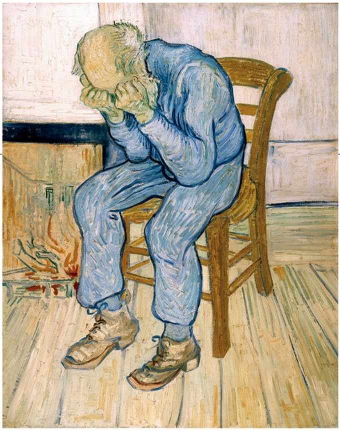
ニューネンでは村の農民を精力的に描いた。低くかがんだ姿勢は、現実の重労働を見た者でないと描けないものだろう。鋭いデッサン力と絵具の厚塗り、鑿で刻んだようなタッチの一つひとつが、彫刻のような人体のずっしりとした量感をつくりあげている。



『切り株を掘り起こす２人の男』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　90.5×75.6㎝
デトロイト美術館　デトロイト

この頃、アルルでは描かれなかった「掘る男」、すなわち「楽園追放」のイメージが再び表れる。背景にアルピーユ山らしきシルエットが見える本作は、春にサン＝レミで描かれた。ミレーの『土を掘り起こす男たち』の模写を、油彩画に描き直したと推察される。



『疲れ果てて（永遠の入口）』

1890年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス
81×65㎝
クレラー＝ミュラー美術館
オッテルロー

サン＝レミでの療養生活の最後に描かれた作品。「昔の思い出が雪崩のように蘇ってきた」とゴッホ。背後では暖炉が燃えるなか、粗末な椅子に腰掛け、悲嘆にくれる老人。迫り来る死の予感とともに、人生を振り返っているのか。

《僕は無気力になると、いつでもミレーの『掘る人』やドゥ・グルーの『貧民席』を見る》（弟テオへの手紙、1882年）

人物のポーズには、聖書の登場人物としての宗教画的な意味合いが込められている。「種播く人」は「神の言葉をまく人」を象徴しているのだ。

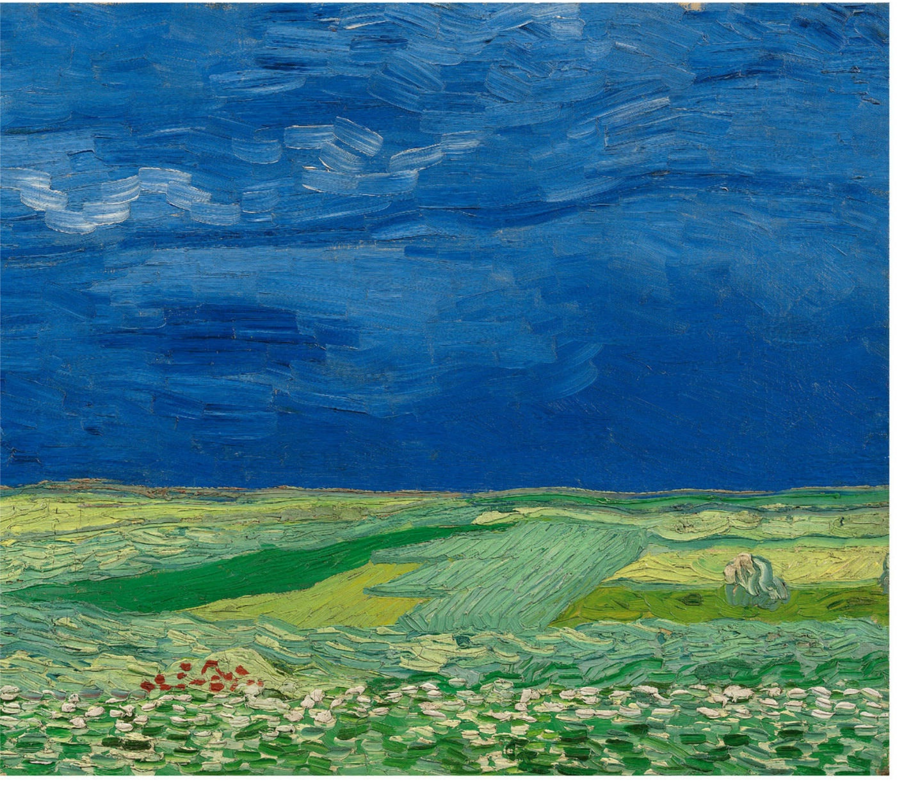
また、「掘る人」は繰り返し登場する。ハーグ時代、モデルを使って「掘る人」を描いており、見なくても描けるくらいになっていた。それは、楽園追放のモチーフである。『創世記』でアダムとイヴが禁断の木の実を食べて楽園追放になる際、アダムに課せられた「土を耕すという労働の場面を意味する。そこには、「あなたは顔に汗してパンを食べ……」（第3章19節）という聖書の言葉が重ねられている。

ゴッホ自身、何度追放されたことか。ボリナージュやニューネンの教会、耳切り事件では住民からの嘆願書でアルルから追い出される。サン＝レミの病院で描いた『疲れ果てて（永遠の入口）』は、『失楽園』を思わせる。悲しむ老人は、『夕陽と種播く人』と同じ青い服を着ている。それは意気揚々としていた若者の晩年、あるいは「種播く人」がまた生まれてくる未来の暗示にも思えてくる。

ゴッホにとって、デッサンすることとは「種播き」であり、油彩で描くことは「収穫」であった。かつては暗褐色で描いていた、大地にへばりついて働く人々の姿を、明るい色彩と力強いタッチで描き直していく。自然の一部となって働く身体が、小麦色の永遠なる光に包まれる。

青・黄・緑がみなぎる、画家のパレット

色彩



雲が漂う青い空と黄緑色の大地。手前にはじゃがいもの白い花が咲き、その先には麦畑が広がる。細長いカンヴァスに描かれるオーヴェール＝シュル＝オワーズの空と畑の風景。『荒れ模様の空の麦畑』を前に、我々はなにを感じるだろうか。

じゃがいもの花に交じって赤い絵の具がわずかに塗られている。畑の中に自生するポピーの花。右下には腰を曲げて畑仕事をする人の姿も——こんな風に詳細を見ていくこともできるが、幅1mのカンヴァスを満たす青・黄・緑という色そのものに私たちは惹きつけられていないだろうか？　空模様も畑の様子もはっきりしないにもかかわらず、広がる空とゴッホ自身がいう「海のように大きな」大地の力が、色彩を通して画面からあふれ出している。

色彩に対する勘を信じて、深い精神性を表現する。

絵を描き始めた当初、ゴッホはひたすら素描に励み、1881年に親戚筋の画家モーヴのもとで色彩表現に初めて取り組む。そしてすぐに《テオ、色調と色彩とは実に重大なことなのだ。それに対する感覚を習得できない人間はけっして生命をつかむことはできない》（弟テオへの手紙、1881年※）と、絵における色の重要性を熱く綴る。

オランダ時代は『じゃがいもを食べる人々』（58〜59ページ参照）に見られる暗い色調に、自分が見て感じたもの、リアリティを練り込むように絵を描いた。そしてパリで印象派、新印象派から刺激を受け、色調は明るみを帯び、アルル、サン＝レミ＝ド＝プロヴァン



『荒れ模様の空の麦畑』

1890年
オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　50.4×101.3㎝
ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
アムステルダム

オーヴェールの町なかから坂道を上ると、麦畑が広がる。そこで描いた本作について、《黄色、緑の微妙な色彩をもった広袤たる麦畑の絵に完全に没頭しています》(母、妹への手紙、1890年※)と記すゴッホは、その約2週間後に命を絶つが、色彩はなおも清々しく輝く。

ス、オーヴェールでもその傾向は基本的に変わらない。ただ、アルル時代にこんな回想をしている。《ぼくはときどきなぜ灰色の色調のオランダ流のパレットを一途に守らなかったのか（略）残念に思うことがある》(弟テオへの手紙、1889年※)。ゴッホにとって暗い色調は明るいそれに劣るものではなかった。ともすると貧しい灰色の色調は未熟な過去に映るかもしれない。しかし宣教師を目指した時もそうだったように、彼はいかなる場合も全身全霊で目の前の仕事、使命に向かう。かつての重苦しい色調も、ゴッホにとっては唯一無二、自らのリアリティを託すかけがえのない表現手段だった。

一方で印象派など当時の前衛芸術に刺激され、彼自身がモダニストとしての先駆性を発揮したことも確かだ。《色彩をみごとに配置するだけで詩情を語ることができる》（妹への手紙、1888年)。こう吐露するゴッホは、色彩を通じて感覚や感情を表そうとしたマティスなど、フォーヴィスムや表現主義の画家たちに多大な影響を与えることになる。

黄色く輝くひまわり、鮮やかな青空など、アルル以降に表れる黄色と青の組み合わせは、ゴッホ最大の魅力でもある。サン＝レミで描いたミレーの模写に見られる青と黄色のみの世界は、限られた色調で深い精神性を表現できることを証明してもいる。《ぼくに色彩に対する一種の勘のあること（略）それはたしかだ》(弟テオへの手紙、1882年※)。30歳を前にこう明言したゴッホは、色彩がもつ可能性をいまに至る未来まで拓いたのだ。



ファン・ゴッホ美術館に展示されている、ゴッホが使ったパレットと絵具（オルセー美術館蔵）。大胆に搾られた絵具を勢いよく筆に取った跡が残る。原色をそのまま用いることはめったになかったゴッホは、パレットの上で絵具を混ぜながら自分が思う色を探った。



『花瓶の12輪の向日葵』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　91×72㎝
ノイエ・ピナコテーク　ミュンヘン

花瓶にいけたひまわりをゴッホは1888年の8月から描き始めた。この絵は最初に描かれた3点のうちの1点。画家は背景を「さまざまな青」で彩ることを考える。そして本作と、やや緑がかった青、そしてより鮮明な青を背景に、それぞれ構図にも変化をつけて3作品を描いた。



『星月夜（糸杉と村）』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　73.7×92.1㎝
ニューヨーク近代美術館　ニューヨーク

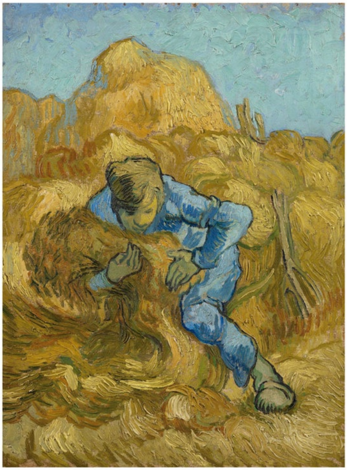
渦巻く夜空に瞬く星々、右上には煌々と輝く三日月の姿。星と月の輝きは黄色、うねりうごめく夜空は深い青と白、明るい黄色を混ぜ合わせながら細長い筆致で描かれる。光と闇を織りなす色づかいは神秘的だ。天に伸びる糸杉や教会の尖塔はゴッホの心情を表すのか。



『花瓶の14輪の向日葵』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　92.1×73㎝
ナショナルギャラリー　ロンドン

アルルで夏を迎えたゴッホは、ひまわりの絵を描き始める。そして、秋にやってくるゴーギャンの部屋をひまわりの絵で飾ろうと思い立つ。背景も花瓶も花も黄色を基調に描く、いわば荒ワザに挑戦したのである。「この花のトーンは誰にでもだせるものではない」と、ゴッホは手紙で自負している。



『麦を束ねる人（ミレーによる）』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　44.5×33.1㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

サン＝レミでゴッホは、ミレーの版画『野良仕事』の模写をする。モノクロの図版を見ながら「ぼく自身の解釈」に基づいて塗られた色は、黄色と青が主。黄色から黄土色の色調を用いて、豊穣な麦の様子を表現した。青い服を着た人物との、色彩のコントラストが鮮やか。



『花咲く巴旦杏の枝』

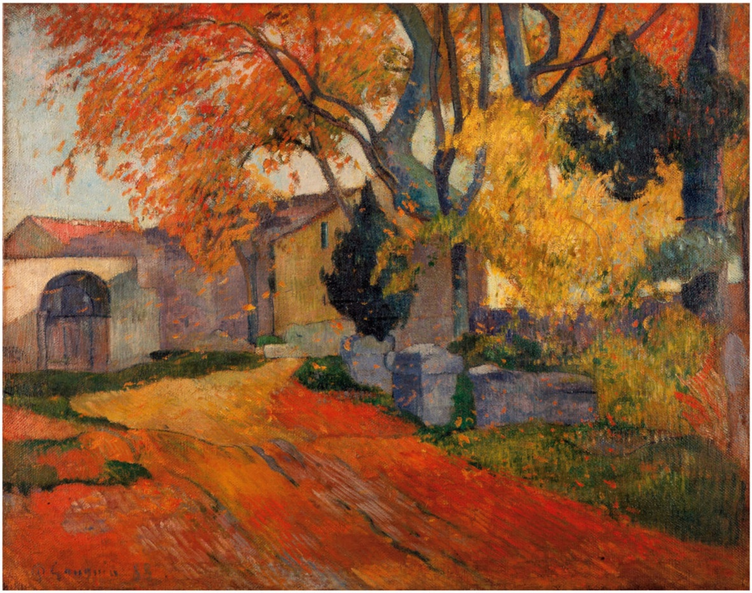
1890年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　73.5×92㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム

真っ青な空を背景に、力強く枝を伸ばすアーモンド。遠く彼方に広がる空は、少し緑がかった青と白が混ざり合う微妙な調子をもって描かれている。白い花が可憐に咲くこの絵には、祝祭的な雰囲気が漂う。ゴッホはこの絵を、生まれたばかりの甥のために描いた。

●66〜67ページに引用した※の手紙のみ『ファン・ゴッホ書簡全集』（二見史郎訳、みすず書房）より抜粋。

影響を与え合ったふたりの、特異なる才能。

ゴッホとゴーギャン





アリスカンは古代につくられた墓地の跡。ゴーギャンが写生した場所には、石棺と木々があり、絵に近い印象がある。奥にあるのは、いまは使われていない、サン=トラノ教会。

ポール・ゴーギャン

『アリスカンの並木路、アルル』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　72.5×91.5㎝

東郷青児記念　損保ジャパン日本興亜美術館　東京

●「ゴッホとゴーギャン展」に出品（東京展のみ、103ページ参照）

中央、木の根元に描かれているのは古代の石棺。現在の様子と見比べると、ゴーギャンが事実に即して描写しようとした意識が伝わってくる。自身の想像を重視したゴーギャンだが、彼のほうもゴッホになんらかの影響を受けて、この絵を描いたのかもしれない。

ファン・ゴッホの人間像とその創作に迫るために、欠くことのできない人物がいる。ゴッホと親交のあった画家ポール・ゴーギャンの存在だ。

1888年2月、パリを離れて南仏のアルルへと向かったゴッホは、この地に画家仲間を集めた共同アトリエをつくろうと思い立つ。互いに刺激し合い兄弟のように助け合って暮らす、そんなユートピアの実現を夢見たのだ。

そこで彼はゴーギャンに、真っ先に誘いの手紙を書いた。一方のゴーギャンは、最初は気乗りがしなかったようだが、経済的に困窮していたため、弟テオの送金によって生活費が保証されるという実利的な条件に心を動かされた。アルルへ行く決心をゴーギャンが固めたことを知り、ゴッホは心底喜んだ。ベッドや椅子を購入し、部屋の装飾のために『向日葵』の連作を描くなど、新生活に大きな期待を寄せた。

ゴーギャンに影響を受け、新たなる表現に挑戦。

この年の10月にゴーギャンはアルルへ赴き、共同生活がスタートした。ふたりは連れ立って写生に出かけることもあった。アリスカンという古代ローマの遺跡を描く際には、背中合わせにイーゼルを並べたとされる。そうして完成したゴッホの『アリスカンの落ち葉』には、ゴーギャンの影響が感じられる。ゴーギャンは当時、輪郭線を用い大胆に画面を構成する彼らしい表現を確立しつつあった。ゴッホの絵にも輪郭線があり、赤い道と青い木々の対比が活かされ、ゴーギャンの考えを自分なりに表現した跡がうかがえる。



『アリスカンの落ち葉』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　73×92cm
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

ゴッホはアリスカンの風景を4点描き、そのうちの2点はゴーギャンがアルルに到着してすぐに購入した目の粗いジュート地をカンヴァスにして描かれた。ほかのゴッホの作品よりタッチは抑えられ、赤い道と青い木々の色面の対比が印象的な仕上がりになっている。



アリスカンでゴッホが写生をした場所。参道の両側に置かれた石棺と、道行く人々を並木の奥から描いている。ゴッホが制作した季節は、秋。道には、落ち葉がたくさんあったのだろう。

また、ゴーギャンの考えをきっかけに、ゴッホは制作スタイルも変えようと試みた。もともとふたりの絵画に対する考えは大きく異なっていた。対象を見ないと描けないゴッホ。対して、自然をあまり素直に描きすぎてはならないと考え自分の想像力を重視したゴーギャン。《ゴーガンにいわれてわかったが、ぼくはわが意に反して――彼もそうだが――いまや変貌しつつある。ぼくは想像で描き始めている》（弟テオへの手紙、1888年※）とゴッホは語り、写生に頼らず自身のイメージをもとにした作品にも取り組んだ。

ゴッホのこうした変化から、ゴーギャンの存在がよほど大きなものだったことが伝わる。では、彼はゴーギャンをどのように見つめていたのか。それを知る手がかりとなる作品がある。『ゴッホの椅子』には白木の籐の椅子が描かれている。このなんの飾りもない質素な椅子に比べて『ゴーギャンの椅子』には肘掛けがあり、座面には布地が張られている。共同アトリエ構想でゴーギャンにリーダーとなってほしいと願っていたゴッホが、この高級な



ゴッホとゴーギャンがともに写生をした場所で、当時のままアルルに残るのは、ここアリスカンだけ。これは全景を写した写真。この写真の位置から、ゴッホが紅葉するポプラ並木を描いた油絵もある。

椅子を進んで彼に提供したのだろう。
こうした椅子のつくりの違いとともに、もうひとつ対比的な表現がある。ゴッホの椅子は昼の光、ゴーギャンの椅子は夜の光で描かれていることだ。まるで、屋外の明るい光の中で写生をするゴッホと、頭の中のイメージを優先するゴーギャンの制作スタイルが、暗示されているかのよう。ゴッホはゴーギャンの考えに影響を受けたものの、結局は対象を見て、そこから湧き上がる感情をもとに描くというアプローチを変えるには至らなかった。
表現に対する考えの違いに加え、尊敬する画家についてもふたりは意見が合わず、口論が絶えなかった。やがてゴッホは不眠や夢遊病のような行動を起こすようになり、共同生活は2カ月で空中分解寸前となった。
そして、クリスマスイブの前日、あの有名な「耳切り事件」が起こった。ゴーギャンの回想によると、夜、路上でゴッホはゴーギャンにカミソリで斬りかかろうとしたが果たせず、数時間



『ゴーギャンの椅子』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　90.5×72.7㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）アムステルダム

●「ゴッホとゴーギャン展」に出品（103ページ参照）

椅子を画面いっぱいに描くことで、ゴーギャンという存在を象徴的に表した作品。座面に描かれた蝋燭と、壁に描かれたガス灯の光から、この絵が夜のシーンだということがわかるだろう。座面上の蝋燭の灯火に、ゴッホはどんな思いを込めたのだろうか。



ポール・ゴーギャン

『ひまわりを描くゴッホ』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　73×91㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）アムステルダム

アルルでゴーギャンが描いた、ゴッホの肖像画。この絵が描かれたのは、初冬。ひまわりは既に枯れていた時期だが、ゴッホを象徴するアイテムとして、ゴーギャンはあえてこの花を選んだ。頭の中で絵を構築して描いていたことがうかがえる一枚である。

後に自分の左耳を切り落とし、馴染みの娼婦にそれを届けたという。耳切り事件の翌日、ゴーギャンはアルルを去った。ゴッホがふたつの椅子の絵に着手したのは、事件が起こる少し前。既にこの時、共同生活が終わりに近づいていることをゴッホは察していた。椅子だけを描くことで、彼が「ここにいない」ことを表したのかもしれない。ゴッホにとってゴーギャンはリーダーであり、友人であり、そしてライバルでもあるという、ひと言では尽くせない存在だったのだろう。

耳切り事件というショッキングな出来事が起こり、共同生活はふたりの心に暗い影を落としたが、制作という観点からすれば実りは多かった。ゴーギャンは、のちの回想で「有益な膨大な量の仕事をした。そのうちの何かは実を結んでいるのだ」と語る。またゴッホも、その代表作となった『向日葵』の連作を生み出すほか、数多くの風景画を描き、その表現がさらなる深まりを見せた時期となった。



『ゴッホの椅子』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス
93×73.5cm
ナショナルギャラリー　ロンドン

籐で編まれた座面には、ゴッホが愛用していたパイプと紙に包まれた煙草の葉が描かれている。このパイプを死の象徴とする説や、逆に、煙草は自殺予防の薬になるとゴッホは考えていたことから生への意識が感じられるという説など、さまざまな解釈がある。



『自画像
（ポール・ゴーガンに捧ぐ）』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　59.5×48.3cm
フォッグ美術館、ハーバード大学　ケンブリッジ

共同生活前に、ゴーギャンと絵の交換をするために制作された自画像。浮世絵を通じて日本に強い憧れを抱いたゴッホは、自身を日本の僧侶に見立てた。ゴーギャンとの共同生活を待ち焦がれていたゴッホは、この時、自らの理想像を描き出そうとしたのではないか。

●71ページに引用した※の手紙のみ『ファン・ゴッホ書簡全集』（二見史郎訳、みすず書房）より抜粋。



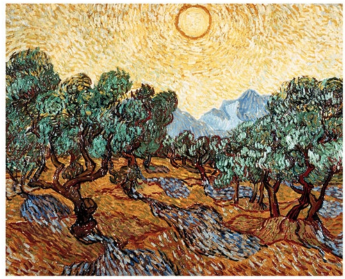
『オリーヴ園で働く人々』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　73×92cm
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

たびたび絵の主題としてきた、畑で労働する人々の姿が描かれた一枚。この絵が描かれたのは冬。ゴッホは12月になっても屋外での制作を続けていたようだが、ときにはこれまで描いたオリーブの習作をもとにしつつ、記憶を頼りに室内で制作することもあった。



ゴッホが描いたオリーブの木が立つサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスの地を訪ねると、強烈な太陽の下で、白っぽく輝くオリーブの葉を目の当たりにできる。ゴッホは太陽に向かい合うように立ち、逆光のライティングの作品を数多く描いた。



『黄色い空と
太陽のあるオリーヴ園』

1889年　サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス　73.7×92.7cm
ミネアポリス美術館　ミネアポリス

ゴッホは手紙で、オリーブの色について「銀灰緑色」と言い表した。本作は、まさに葉が緑味を帯びた銀色をしていることをうかがわせる。この色は「オランダの柳」と似ている、とゴッホ。オリーブを描きながら、故郷に想いを馳せることもあったようだ。

オリーブと糸杉、ふたつの木が語ること。

オリーブ
&糸杉

アルルで耳切り事件を起こした後、ファン・ゴッホはサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスで療養生活を始めた。しだいに体調が回復してくると屋外での制作に乗り出し、2種類の木を集中して描くようになった。いずれも身近なところに生えていたオリーブと糸杉だ。

オリーブは、彼が入院した療養院を取り囲むように畑がつくられており、手紙の中でもしばしば語られた。《オリーブ畑は実に特色が豊かだ。何かとそれを捉えようと懸命になっている。あるところは銀色、あるところはもっと青く……》（弟テオへの手紙、1889年※）。オリーブの葉に、銀色や青に加え、緑、青銅色、黄色、ピンク、紫など多彩な色を見出している。

オリーブの品種には、葉の裏側が緑みを帯び銀色になっているものがある。この銀色の明るい面に太陽の光や空の色が反射する時、さまざまな色調が生まれる。ゴッホのオリーブの連作には、空をブルー、葉を緑灰色で描いたり、レモンイエローに明るいグリーンを組み合わせたりと、ひとつとして同じ色はない。空と葉の対比とその効果について、彼は実験を繰り返した。

オリーブに鮮やかな色彩を見たゴッホだったが、糸杉の捉え方は対照的だ。「最も興味深い黒の調子のひとつ」であり、「高く陰うつ」なものと語る。その背景には、糸杉がヨーロッパで古くから死の象徴とされ、墓地のいたるところに植えられていることが関係している。また、アルルで描いた『向日葵』の連作に代わるものと糸杉を捉えていたことから、研究者の中には、太陽を表し「生」の象徴であるひまわりから「死」の象徴である糸杉へと関心が移ったと指摘するケースも多い。

確かに、黒々とした炎のように描かれた糸杉は、翌年訪れる彼の死を予感させる。だが一方でこの木を賛美し、なんとか描き表そうとしたポジティブな面があったことにも注目したい。《線といい比例といい美しく、まるでエジプトのオダリスクのようだ》（弟テオへの手紙、1889年※）と語ったゴッホは、糸杉を描くためには長い間、自然の中にいなければならないと考え、この地方特有の突風、ミストラルに悩まされながらもイーゼルの脚を土に埋めて制作を続けた。

愛情をもって見る、そうすれば正しく描ける。

この地でオリーブと糸杉を見つめ続けたゴッホは、画家を志した初期から、自然を崇高で神秘的なものと捉えていた。そして、愛情をもって見れば、よりよく正しく描けると信じていた。また、自然を「解明する必要があるもの」と考えており、人々が理解できる形に解きほぐして見せたいという信念をもっていた。

こうした彼の信念は、現代の私たちにも共感を誘うものだ。ゴッホが描いた場所に立ったならば、強烈な太陽の下で輝くオリーブの葉と、うねりながら上へ上へと伸びていく糸杉の形に、彼が描いた色や形と通じるものを発見するだろう。自然を誇張はするが、そこから決して離れず、その真理を追求しようとしたゴッホ。そんな彼の眼差しを、描かれた木々からは確かに感じることができるはずだ。





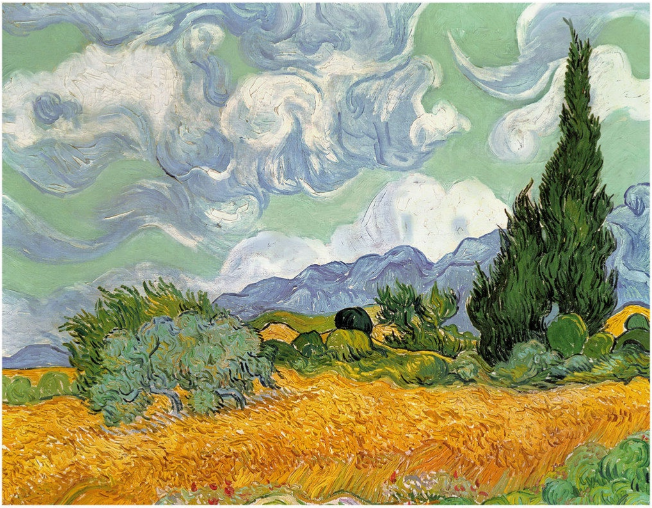
サン=レミの木々の中で、天へと真っすぐにそびえる糸杉はひと際、存在感がある。《ぼくが見ているように描いた人がないのが不思議に思える》(弟テオへの手紙、1889年※)とゴッホは語り、数多くの糸杉を描いている。

『星空の下の糸杉の道』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ　油彩、カンヴァス
92×73cm　クレラー=ミュラー美術館　オッテルロー

糸杉の右には細い三日月、左には巨大な星がある。この巨大な星を太陽と捉え、月と太陽が同時に登場するキリスト教の場面を表したという説もある。真相はわからないが、若き日に宗教家を目指したゴッホが、自然の中に神の存在を見ていたと考える研究者は多い。

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?



『糸杉のある麦畑』

1889年
サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス
72.1×90.9cm
ナショナルギャラリー　ロンドン

この地でゴッホのタッチは、さらに激しくなり、独特のうねるような形が現れてくる。ことに糸杉と空には、このうねりが顕著。ゴッホの精神がさらに不安定になったことが要因と指摘されることもあるが、自然の生命力を彼なりに解釈した表現とも考えられる。

●74〜75ページに引用した※の手紙のみ『ファン・ゴッホ書簡全集』(二見史郎訳、みすず書房)より抜粋。

晩年の彼を奮い立たせた、創作の源とは。

オーヴェール=シュル=オワーズ

1890年5月20日火曜日、ファン・ゴッホは、パリから北に約30㎞の町、オーヴェール=シュル=オワーズに到着する。3月に誕生日を迎えた彼は、37歳になっていた。自ら選んだサン=レミ=ド=プロヴァンスでの療養生活にすっかり疲弊したゴッホは、弟テオに「北仏に帰る必要がある」と、繰り返し手紙で吐露していた。兄のためにふさわしい場所を探すテオに、画家のピサロがガシェという医師のいるオーヴェールを薦めてくれた。医師が近くにいれば、万が一、発作を起こしても安心だ。しかも、パリとオーヴェールは鉄道で約1時間強。必要な時にいつでも会うことができる。かくしてゴッホは、この町に移ってきた。

《オーヴェールはすごく美しい。少なくなりつつはあるがたくさんの古い茅葺家がとりわけ美しい》（弟テオへの手紙、1890年※）と、到着早々、ゴッホは手紙に綴る。そしてすぐさま絵の制作に取りかかる。日中、戸外で古い家並みや大きな木々などを続けざまに描き、夜は部屋に戻って、相変わらず家族や友人に手紙を書いて過ごした。

畑や森、庭、花……、猛烈に制作に打ち込む。

主治医となったガシェの家に、ゴッホは頻繁に通った。医師はエッチングの道具を持っていたのでゴッホもさっそく挑戦する。さらに家の庭、ガシェと娘のマルグリットの肖像も描き（78〜79ページ参照）、町では『オーヴェールの教会』（81ページ参照）や『ドービニーの庭』（左上参照）などの名作を次々に描く。起伏のある地形、豊かな緑と広大な農耕地は、画家を惹きつけた。制作意欲はいつになく旺盛になり、ここに暮らした約70日の間に、80点近い油絵を描いている。サン=レミ時代に比べ、肖像画にも多数取り組んだ。モデルにも恵まれ、マルグリットなど3人の女性、そして子どもなど、10点以上の肖像を描いている。

ガシェに食事や誕生会などに招かれ、ゴッホの日々は天涯孤独というわけではなかった。《ぼくが仕事をしていると、ここの人たちは（略）ぼくのところにやってくるんだ》（弟テオへの手紙、1890年※）。この一文には、ここで自分が芸術家として見られているという自負がにじむ。オーヴェールでのゴッホは絵の題材に困ることもなく、生活環境も悪くなかったのではないか。

6月8日の日曜日、テオが妻と幼い息子を連れて訪ねてくる。そしてガシェの家で昼食をともにした。《日曜日はぼくにとってはとても楽しい思い出の一日だった》（弟テオへの手紙、1890年※）と、自分と同じ名をもつ甥を抱き、いつになく幸福なひとときを送る。しかし実際、5月にオーヴェールに到着して以来、画家の心は不安に包まれていた。結婚し家族をもった弟の負担になっているという思いがつきまとった。そしてテオも、勤め先の画廊から不当な扱いをされ独立を考え悶々としていた。兄弟は互いに深い悩みを胸の底に抱え込んでいた。

7月27日、ゴッホは自らに銃口を向



『ドービニーの庭』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ　油彩、カンヴァス　50×102.5㎝

バーゼル市立美術館　バーゼル

バルビゾン派の画家ドービニーは、かつてオーヴェールに暮らしていた。花咲く美しい庭をもつこの家を見たゴッホは、絵に描きたくなったのだろう。「力の入った絵にしよう」と決意を固める。この絵は、キッチン布巾のような布に描かれている。



『烏のいる麦畑』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ　油彩、カンヴァス　50.5×103㎝

ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）アムステルダム

《これはいまにも嵐が来そうな空の下の広麦たる麦畑で、ぼくは思い切って悲しみや極度の孤独を表現してみようとした》（弟テオへの手紙、1890年※）とゴッホは綴っているが、その画面は圧倒的な存在感を放つ。色彩と筆触の強さ、勢いは、見る者の魂を激しく揺さぶる。

『木の根と幹』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス
50.3×100.1㎝
ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
アムステルダム

『烏のいる麦畑』を描いた畑の西側には、深い森が広がっている。斜面には根を丸出しにした木々が、いまでもところどころに植わっている。細長い筆致を塗り重ね、うねるような根の形状をゴッホは力強く描き出した。ファン・ゴッホ美術館は、本作をゴッホの絶筆としている。





『ジキタリスをもつ医師ガシェの肖像』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　68×57cm
オルセー美術館　パリ

「憂鬱さを強調してガシェさんの肖像を描いた」と、ゴッホは妹ウィルに説明している。そしてさらに、人々に感銘を与える肖像画を描きたいという気持ちを吐露している。画家は、この医師に対していくばくかの好意と、理解し難いなにかを感じていたのである。





『麦藁帽子をかぶった若い農婦、麦畑に座る』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　92×73cm
個人蔵

ゴッホはこの農家の女性の肖像を、この絵と白いワンピース姿のものと2点描いている。背景には麦の穂と数本の赤いポピーの花。彼女の赤く染めた頬と実直な眼差しは、5年ほど前にニューネンでゴッホが盛んに描いた農民たちの表情を思い出させる。

提供：Bridgeman Images／アフロ

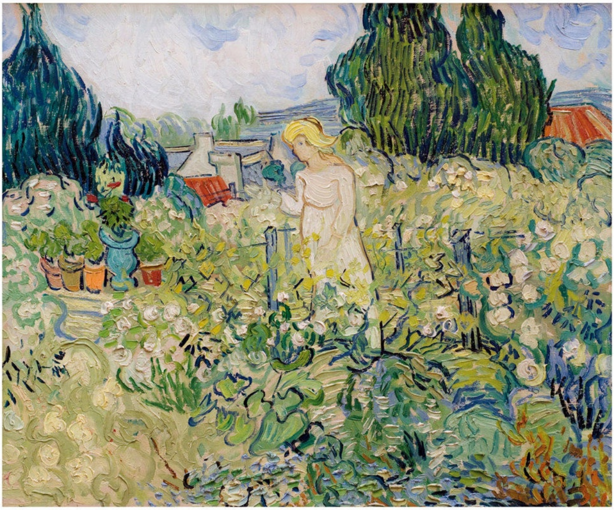
け、その翌々日、帰らぬ人となった。彼がなぜ拳銃を所有し自殺したのかはわかっていない。テオの重荷であることを憂いてというのが定説だが、発作が起き絶望したのか、マルグリットに失恋したのか、他人に撃たれたのか。私たちには知り得ない「なにか」がその時起きてしまったことだけは確かだ。《ぼくは自分の（絵の）腕が落ちないように努めている》《情熱をもつものは（略）現代の肖像画だ》《いつかきみの肖像画をきっとぼくは描きたい》（各、弟、妹、妹への手紙、1890年）。ゴッホがオーヴェールで綴ったこうした言葉を見ると、彼は決してまっすぐ死に向かっていたわけではないことがわかる。

絶筆とされる『木の根と幹』（77ページ参照）はなんとも不思議な絵だ。土に絡みつく異様な形の根に、ゴッホはなぜ惹かれたのか。木の根元はオランダ時代から描いてきたものでもある。自分の道を確認するように、ゴッホは同じモチーフを繰り返し描いたのか。《とまれぼくの絵に対してぼくは命をかけ、ぼくの理性はそのために半ば壊れてしまった》（弟テオへの手紙、1890年）。ゴッホは自分のすべてをかけて描き、生きることに迷いはなかった。だからだろう、どんな絶望の中にあっても彼の描いたカンヴァスは光り輝いている。《成功しなくてもぼくは自分が手がけたこの仕事は受けつがれ続けられてゆくだろうと信じている》（弟テオへの手紙、1889年）。死の間際に彼がそんなことを思い出したかはわからないが、この言葉通り、その後、多くの人が彼の絵に心震わせ、後に続いていくことになる。

『庭に立つガシェ嬢』

**1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ　油彩、カンヴァス
46×55.5㎝**
オルセー美術館　パリ

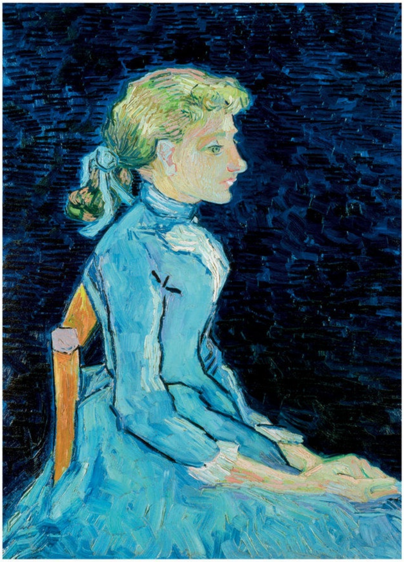
オーヴェールの高台に立つガシェの家には見晴らしのいい庭があった。薔薇の咲き乱れる庭先でゴッホはこの絵を描く。背後には糸杉、その後景にはイル=ド=フランスの風景が広がる。テオたちがオーヴェールを訪れた際、ガシェ家とともにゴッホらはこの庭で昼食をとった。



『アドリーヌ・ラヴーの肖像』

**1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　73.7×54.7㎝**
個人蔵

ラヴー亭の娘アドリーヌの肖像を、ゴッホは3点描いた。彼女は髪をリボンで結い、めったに着ないドレス姿でポーズをとった。深い青色の背景にドレスの水色と胸元、袖口の白が映える。彼女の回想によると、ゴッホは始終パイプを吸いながら仕事に没頭していた。





『オレンジをもつ子供』

**1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　50×51㎝**
ヴィラ・フローラ ヴィンタートゥール　ヴィンタートゥール

花咲くタンポポを背景に描かれたのは、建具屋を営むルヴェールの息子ラウール。肖像を描く時、ゴッホは描かれる人物の本質を表そうとした。当時4歳のラウールは、絵の中で頬を赤く染め愛らしく微笑む。優しく見つめ描いた、ゴッホの温かな眼差しを感じさせる。

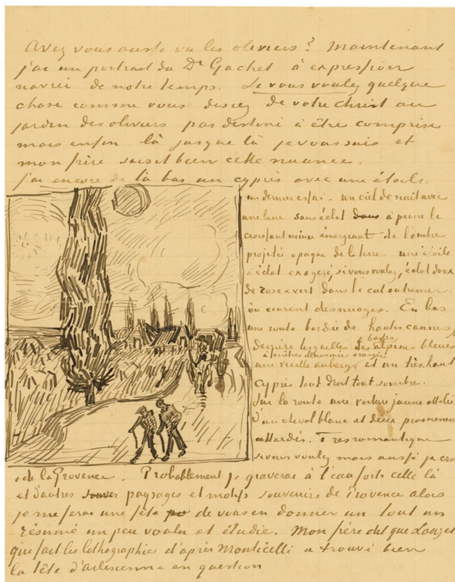

Le jardin de Daubigny
avant plan d'herbe verte & rose
à gauche un buisson vert & lilas et une souche de plantes
à feuillages blanchâtre. Au milieu un parterre
de roses. à droite une claie un mur et au dessus
du mur un noisetier à feuillage violet.
Puis une haie de lilas une rangée de tilleuls arrondis
jaunes. La maison elle même dans le fond rose
à toit de tuiles bleuâtres. Un banc et 3 chaises une figure
noire à chapeau jaune et sur l'avant plan un chat noir
Ciel vert pâle.
Auvers 23 juillet 90
2
651 B

フィンセントから弟テオへの手紙

オーヴェール=シュル=オワーズ
1890年7月23日
ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
アムステルダム

ゴッホはいままで通りこの地でも、日中に描いた絵のことを弟テオや妹ウィルへの手紙に書き綴っている。この日の手紙は、4枚のスケッチを含む合計7枚の大作。熱中して描いた『ドービニーの庭』をはじめ、絵のプランについて詳細にわたって説明している。


町のシンボル、ノートルダム教会は、12〜13世紀頃に建てられた。教会の手前にあるゴッホが白い点で表した小さな白い花は、春から夏に咲く。画家が描いた頃の土の道は、いまでは舗装されている。


Avez vous aussi vu les oliviers? Maintenant
j'ai un portrait du Dr Gachet à expression
navrée de notre temps. Si vous voulez quelque
chose comme vous disiez de votre christ au
jardin des oliviers pas destiné à être compris
mais enfin là jusque là je vous suis et
mon frère saisit bien cette nuance.
J'ai encore de là bas un cyprès avec une étoile
un dernier essai - un ciel de nuit avec
une lune sans éclat ~~dans~~ à peine le
croissant mince émergeant de l'ombre
projetée opaque de la terre - une étoile
à éclat exagéré, si vous voulez, éclat doux
de rose & vert dans le ciel outremer
où courent des nuages. En bas
une route bordée de hautes cannes jaunes
derrière lesquelles des basses alpines bleues
à fenêtres illuminées orangé
une vieille auberge et un très haut
cyprès tout droit tout sombre.
Sur la route une voiture jaune attelée
d'un cheval blanc et deux promeneurs
attardés. Très romantique
si vous voulez mais aussi je crois
de la Provence. Probablement je graverai à l'eau forte celle là
et d'autres ~~souve~~ paysages et motifs souvenirs de Provence alors
je me ferai une fête ~~pa~~ de vous en donner un tout un
résumé un peu voulu et étudié. Mon frère dit que Lauzet
qui fait les lithographies d'après Monticelli a trouvé bien
la tête d'Arlésienne en question

フィンセントからゴーギャンへの手紙

オーヴェール=シュル=オワーズ
1890年6月17日　ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム

オーヴェールでゴッホはゴーギャンに手紙を書くが、仕上げずに未完成のままだった。アルルでともに制作したことや自分がいま描いている絵について、ていねいに綴る文面には、この先も仲間と協調しながら絵描きとして生きていきたいという想いがにじんでいる。



『オーヴェールの教会』

1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　94×74㎝
オルセー美術館　パリ

筆跡の残る暗い空はゆらめき、不穏な趣だが、ゴッホによると、「澄みとおったコバルトの空」である。建物を描く波打つ筆目は、教会の存在感を際立たせ、深い色調と筆致の強い画面には、ゴッホの強烈な眼差しと、この絵にかける想いがみなぎっている。

●76ページに引用した※の手紙のみ『ファン・ゴッホ書簡全集』(二見史郎訳、みすず書房)より抜粋。

いまなお議論を呼ぶ、4つの謎を推理する。

ファン・ゴッホをめぐっては、未解決の謎が多くある。その代表的な4つについて、ゴッホに関する著作も多い千足伸行さんに解説していただいた。

文・千足伸行

●広島県立美術館館長、成城大学名誉教授。ヨーロッパ近代、特に世紀末美術を専門とし、現在、上野の森美術館で開催中の『デトロイト美術館展』など多くの展覧会を監修。近著に『ゴッホを旅する』（論創社、2015年）。



1886年の作である『水盤の芍薬と薔薇』（50ページ参照）の右隅にも、「Vincent」というサインが。署名入りの作品は、実はそう多くは遺されていない。



故郷ズンデルトで父の勤めた教会裏に、フィンセントの兄の墓がある。長男が死産した1年後、同じ日に生まれた次男に、両親は長男と同じ名を付けたのだった。



父テオドルス。厳格な父とフィンセントは何度も衝突した。生まれながらに死者（=兄）の名を背負い、自らと同じ名の墓を目にすることを、次男はどう感じていただろうか。

MYSTERY 1

？ なぜ、作品の署名に苗字「ゴッホ」を使わなかったのか。

日本でのファン・ゴッホの呼び方はいくつかあるが、今では「ゴッホ」の部分は一定している。オランダ本国では「フィンセント・ファン・ホッホ」である。しかし、現地読みにこだわって今さら「ホッホ」というわけにもゆかない。ところで、ゴッホという立派な名前があるにもかかわらず、彼の作品で署名のあるものはすべて「フィンセント（Vincent）」と署名され、「ゴッホ」はない。

なぜ苗字を使わなかったかについては、ふたつの説がある。ひとつは、ゴッホが尊敬してやまなかった祖国の大画家レンブラント・ファン・レインが常にレンブラントと署名したので、これに倣ったというもの。ただし、オランダ時代はともかく後半のフランス時代の5年間について言えば、家族名より私的なフィンセントよりゴッホを使った方が社会的な認知度を上げるには賢明だったはずである。

もうひとつの説は、「ホッホ」というオランダ語特有の発音がフランス人にはできないが、ファーストネームなら問題ないからというもの。そもそも「Vincent」はキリスト教の聖人で、フランス人にも馴染み深い名であり、読み方、呼び方もフランス流に「ヴァンサン」で通せるという利点はある。ただしそれだけでは、そうした問題のないオランダ時代にすでにゴッホがなぜ「Vincent」と署名したかの説明がつかない。

細部を省略して言えば、この問題はゴッホと父との葛藤、折り合いの悪さに行きつく。ゴッホにとって聖職者の父は偽善的、独善的で、ゴッホ自身の言葉によれば、「心が狭く、氷のように冷たい性格」であった。

極めつきは、ゴッホが30歳の頃に弟のテオに宛てた次の手紙である。

≪君もまた“ファン・ゴッホ”か？　僕は君をいつも“テオ”と見てきた。僕は性格的に家族の他のメンバーとは違っており、本質的に“ファン・ゴッホ”ではないのだ≫（書簡345a）。

ファン・ゴッホではなく常にフィンセントと署名した背景には、父との深刻な葛藤、その挙げ句の果てに「ゴッホ家」との断絶があったのである。

MYSTERY 2

？アルルに来て、なぜ「日本のように美しい」と感じたのか。

ゴッホがパリからアルルにやって来たのは1888年の2月20日。パリから約720㎞、16時間の汽車の旅であった。以後、ゴッホはこの町に翌年の5月8日まで、日数にして444日滞在する。この間に彼はおよそ200点の油彩と、100点以上のデッサン・水彩、それに200通あまりの、どれも決して短いとは言えない手紙を書いている。驚異的、爆発的なエネルギーというほかないが、ゴッホがパリに嫌気がさし、早晩そこを去ろうとしていたのは事実として、なぜアルルか？については諸説ある。

ゴッホは早くから「南仏の共同アトリエ」を作りたいとの思いを抱いていたが、アルルを選んだ理由については、南仏（アルビ）生まれのロートレック、あるいは若い頃にアルルを訪れたことのあるドガが勧めたからとも、ゴッホが高く評価していた画家モンティセリがマルセイユの出身だったことから、その手前のアルルに一時滞在のつもりが、ここが気に入り、長期滞在になったとの説もある。ただし、ゴッホが南仏に向かった時点でモンティセリはすでに物故していた。

いずれにしてもゴッホはアルル時代に5点の大型の『花瓶の向日葵』シリーズ（68〜69ページ参照）をはじめ『夜のカフェテラス』（97ページ参照）、『ローヌ河の星月夜』（32ページ参照）など、ゴッホと言えば誰もが思い出す傑作を次から次へと生み出している。アルルでゴッホは初めて真の「ゴッホ」になったとも言えるが、実際にアルルに住んでみて、ゴッホがそこに見たのは「南仏の日本」であった。

≪この国（＝アルル）は大気が澄んでいることと、色彩が明るいという意味で、僕には日本のように美しい。風景の中の川や流れは日本の版画そっくりに、美しいエメラルド色、あるいは深みのある青の輝きを見せている≫（画家エミール・ベルナールへの手紙、書簡B2）

日本はかねてからゴッホにとっての憧れの地であったが、言うまでもなく彼が日本の土を踏むことはなかった。ゴッホに限らず、この頃は日本ブーム、日本趣味、いわゆるジャポニスム全盛の時代で、実際に日本にやって来た欧米の画家も少なくないが、ゴッホは日本に来ることなく、アルルは「日本のように美しい」と言い切っている。日本についての「美しき誤解」とも言えるが、日本は美しい国と信じきっていたからこそその言葉とも言えよう。

それと同時に、この手紙にもあるように、ゴッホはアルルの「明るい色彩」に日本の浮世絵版画の澄んだ色彩を重ね合わせていた。また、長崎を舞台としたピエール・ロティの小説『お菊さん』も理想郷・桃源郷としての日本へのゴッホの憧れをかき立て、この本で知った「mousme（ムスメ）」という言葉を早速、アルルで描いた若い女性の肖像タイトルに使っている。有名な坊主頭の自画像にしても、『お菊さん』の挿絵に触発された可能性は高い。

提供：千足伸行



フェリシアン・ミルバッハの手による、ピエール・ロティ作の小説『お菊さん』のための挿絵（1888年）。頭を丸めた僧侶が登場している。ゴッホは国内外の話題の文学作品をよく読んでいた。



『自画像（ポール・ゴーガンに捧ぐ）』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　59.5×48.3㎝
フォッグ美術館、ハーバード大学
ケンブリッジ

「坊主の像として構想した」「日本風に目を少し釣り上げた」と、弟テオへの手紙にはある。ゴーギャンの自画像と交換するつもりだった作品。

『ムスメ』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス　74×60㎝
ナショナル・ギャラリー　ワシントンD.C.

弟テオへの手紙の中で、ゴッホは「ムスメ」とは日本の12〜14歳の少女を指す言葉であり、この作品の場合はプロヴァンスの娘のことだと書いている。



MYSTERY 3

なぜアルルで突然、耳を切るという行為に出たのか。



『包帯をした自画像』

1889年　アルル　油彩、カンヴァス　60×49cm

コートールド・ギャラリー　ロンドン

森村泰昌さんが扮した自画像(46ページ参照)とは別のバージョン。背景に、日本の版画らしきものが彩りを添えている。この事件が、ゴーギャンとの間に決定的な亀裂を生むこととなった。

　ゴッホの生涯で最もショッキングな事件と言えば、アルルでの耳切り事件であろう。1888年の12月23日の夜、ゴーギャンはふたりが暮らしていた「黄色い家」からひとり散歩に出た。近くのラマルティーヌ広場を横切ろうとしていると、背後に聞き慣れた足音が迫ってくるのが聞こえ、振り返ると、そこにはカミソリを手にし、ゴーギャンに襲いかかろうとするゴッホがいた。

　ゴーギャンが厳しい目つきでゴッホを睨み返すと、ゴッホはすごすごと「黄色い家」に帰っていった。身の危険を感じたゴーギャンは「黄色い家」には帰らず、市内のホテルに部屋を取った。

　ひとり帰宅したゴッホは、おそらくゴーギャンに斬りつけようとした同じカミソリで、左耳を切り落とした。床や階段に飛散した大量の血の痕は1階のアトリエにも、2階の自分の部屋にも見られたが、その後ゴッホは血まみれの耳を洗い流し、おそらく日頃から購読していた地元の新聞紙（ゴーギャンによると「封筒」だが）にくるみ、彼の自画像にもあるように、バスク帽を目深にかぶって再び外に出た。行き先はアルルに6軒あった娼家のひとつで、ドアマンにこれは自分の形見だと言い添えて、ラシェルという馴染みの娼婦に渡すよう依頼した（受け取ったのはラシェルではなかったという説も出ている）。

　この事件には現場の目撃証人がいないうえ、ゴッホ自身も自分のしたことの記憶がほとんどないと言っているので、曖昧な点が多いが、少なくとも言えるのは、それまで潜在的なものだったゴッホの「狂気」が顕在化したことである。アルルで画家としての天才を遺憾なく発揮したゴッホは同時に狂気の発作にも襲われ、以後、アルル→サン=レミ=ド=プロヴァンス→オーヴェール=シュル=オワーズと続く画家ゴッホの炎の17カ月は、狂気との闘いの17カ月でもあった。

　ゴッホがなぜ耳切りという極端な自傷行為におよんだかについては諸説あるが、一説によると、ゴッホは（多くの医師が認めるように）てんかんであり、てんかんの患者は舌を噛み切ろうとするなど、自傷行為への傾向があり、ゴッホの場合、それが耳に向かったという。当時（1888年）、イギリスのみならず世界を震撼させていた連続殺人鬼「切り裂きジャック」や、フランスの殺人鬼でゴッホ、ゴーギャンも関心を寄せていたプラドが、しばしば被害者（大半は娼婦）の耳を切り取ったことの「影響」を指摘する声もある。

　自省の念が嵩じた挙げ句の果ての自己懲罰的な自傷行為という見方も可能であろうが、いずれにしても「決定打」はいまだに出てない。なお、ゴッホが切り取ったのは耳全体ではなく耳朶とするのが一般的であったが、ゴッホの主治医であったレーが1930年、ゴッホを主人公にした小説『Lust for Life』を執筆中の作家アーヴィング・ストーンの問い合わせに対して送った手紙にカルテをもとにした患部の「図解」があり、それによると耳全体が切り落とされている（この手紙の存在は近年、明らかにされ、85ページに紹介したファン・ゴッホ美術館の特別展で公開された）。ゴーギャンもこの点については、ゴッホは「耳の付け根から切り落とした」と断言している。

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?



『黄色い家（ゴッホの家）』

1888年　アルル

油彩、カンヴァス　72×91.5cm

ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)

アムステルダム

ゴーギャンと共同生活を送った「黄色い家」。実際に外壁が黄色かったのではなく、アルルの強い陽光で黄色く見えたとされる。空の抜けるような青さや絵に占める面積の多さは、これから始まるふたりの共同生活への期待、未来への希望のあらわれを映したものといわれている。

『医師フェリックス・レーの肖像』

1889年　アルル　油彩、カンヴァス　64×53cm

プーシキン美術館　モスクワ　※ファン・ゴッホ美術館特別展『狂気の淵で』より

ゴッホは世話になったお礼に主治医にこの肖像画を描いて渡したが、レーの家族は気に入らなかったらしく、長い間の所在不明を経て、鶏小屋の屋根をふさぐのに使われていたところを発見された。

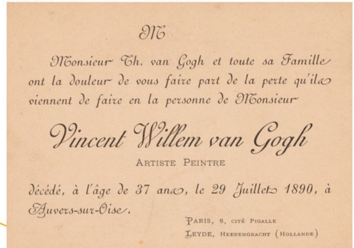


PHOTO: Jan-Kees Steenman © 2016 SEEITYOURSELF



今年の7/15〜9/25には、アムステルダムのファン・ゴッホ美術館で『狂気の淵で：ファン・ゴッホと病』と題した特別展が開催された。彼の最後の18カ月に着目し、病が創作におよぼした影響を考察する内容だった。

©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



M

Monsieur Th. van Gogh et toute sa Famille ont la douleur de vous faire part de la perte qu'ils viennent de faire en la personne de Monsieur

Vincent Willem van Gogh

ARTISTE PEINTRE

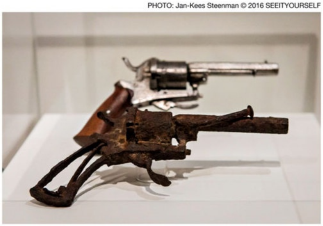
décédé, à l'âge de 37 ans, le 29 Juillet 1890, à Auvers-sur-Oise.

PARIS, 8, CITÉ PIGALLE

LEYDE, HEERENGRACHT (HOLLANDE)

以下はすべてファン・ゴッホ美術館の特別展『狂気の淵で』の展示物。フィンセントの死と葬儀を知らせるために弟テオが親族や知人に送ったカード。参列者は少なかったといわれる。

PHOTO: Jan-Kees Steenman © 2016 SEEITYOURSELF



ゴッホが胸を撃ったとされる場所の近くで、1960年に「発見」されたという口径7㎜の拳銃。個人蔵。しかしなぜ死後70年も経ってから？ 本当にゴッホの「自殺」と関連が？ なぜいま公開？ 謎は尽きない。



オーヴェールでゴッホと親しかった医師ガシェが、いまわの際にある画家をスケッチしたもの。ガシェは絵心があり、「ポール・ファン・リッセル」という名前で、アマチュアではあったがエッチングや絵を遺している。

©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

MYSTERY 4

胸を撃った最期は、本当に「自殺」だったのか。

1890年の7月27日の午後、あるいは夕刻、いつものようにオーヴェールの野で制作していたゴッホは携行していた拳銃を取り出し、自らの胸部を射った。一瞬気を失ったが、意識が戻ると脇腹を押さえながら、下宿先であるオーベルジュ・ラヴーに戻り、2階の自分の部屋のベッドに身を横たえた。ゴッホが「緊急事態」であることに最初に気づいたのは宿の主人のラヴーで、すぐにゴッホの主治医だったガシェと、地元の医師マズレーが呼び寄せられ、弟テオもパリから駆けつけたが、1日置いた7月29日の深夜1時半、ゴッホは37年の生涯を閉じた。

以上が自殺についての骨子であるが、この問題についての論議は今日、ますますヒートアップしている。第一に自殺の原因、理由はなんだったのか？

そもそもキリスト教徒にとって自殺は、人間の生殺与奪の権を握る神に対する冒涜行為、あるいは犯罪行為に近いものであった。旧約聖書のモーセの「十戒」にある、「汝ら、殺すなかれ」にしても、「（自分自身も含め）殺すなかれ」と読むべきであった。敬虔なクリスチャンだったゴッホには神の意志に背いてまで自殺する理由があったのか？

そのひとつとして挙げられるのが、弟テオとの関係である。いつまでも「売れない」兄を助けるため、大手の画商の社員だったテオが月々仕送りをしていたことは良く知られている。しかし、テオは1889年にオランダ女性と結婚し、翌年には男児が生まれている。いずれも、ゴッホにとってもめでたい話には違いないが、これ以後、テオの軸足が兄よりも妻と子に移ってゆくのは致し方ないことであった。ゴッホにとって「命綱」とも言うべきテオを失うことが、自殺の一因であった可能性はあるが、ゴッホに遺書があるわけでもなく、自殺の直前の手紙にもこれを示唆するような文言は見えない。

ゴッホが自殺に使ったとされる拳銃の謎もいまだ解明されていない。制作の際に邪魔をするカラスを追い払うために宿の主人のラヴーから借りたという説が一般的であるが、別人から借りたという説もある。「心の憂いと絶対的な孤独」を描いたという『荒れ模様の空の麦畑』（66ページ参照）、『烏のいる麦畑』（77ページ参照）の2点は、しばしば言われるようにゴッホの「遺作」、最後の作品ではないが、死を間近に控えたゴッホの心象風景にはふさわしいものであり、彼の描かれた「遺書」のようにも見えるのである。

近年、そもそもこれは自殺でなく、ゴッホも知っていた地元の名士のドラ息子のガンマニアがふざけて射った流れ弾に当たったとの説も出されるなど、真相は依然、藪の中である。理由はどうあれ、ゴッホが37歳で世を去ったことは事実。彼の最後の言葉とされるのは、「悲しみはいつまでも続く」と、「僕はこんな風に死にたかったのだ」であった。

●82〜83ページに引用した手紙はすべて著者訳。

特異な人生を彩った、キーパーソンたち。

一族はもちろん、名だたる画家や女性たち、絵のモデルになった人々まで。どのような交流関係が、この希有な画家を生み出したのだろうか。

影響を与えた画家


©Scala, Florence/amanaimages

レンブラント・ファン・レイン
1606 〜 69年

バロック期を代表するオランダの画家のひとり。若き日のフィンセントは、レンブラントをはじめとするオランダ黄金時代の画家に傾倒し大きな影響を受けた。作品の模写も試みた。

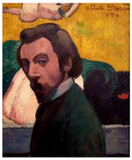
パリの友人

アンリ・トゥルーズ＝ロートレック
1864 〜 1901年


©Roger-Viollet/amanaimages

貴族の生まれ。フィンセントとはパリのコルモン画塾で親交を結んだ。一緒に印象派展を見に行き強い感銘を受けたという。南仏へ行くことを薦めた人物。

エミール・ベルナール
1868 〜 1941年


©Getty Images

ポスト印象派の画家。フィンセントとともに日本の浮世絵に影響を受ける。のちにフィンセントとの書簡を公表、「ゴッホ神話」の確立に寄与した。

カミーユ・ピサロ
1830 〜 1903年


©Musée d'Orsay, Paris, France / Bridgeman Images/amanaimages

「印象派の父」と呼ばれる。その息子リュシアンも画家で、フィンセントと弟テオは親子ともども交流をもった。医師ガシェを紹介したのもピサロだった。

夫婦

母


写真：akg-images／アフロ

アンナ・コルネリア・カルベントゥス
1819 〜 1907年

ハーグの王室御用達の製本師の娘。フィンセントとテオのほか息子ふたりと3人の娘をもうけた。

アントン・モーヴ
1838 〜 88年

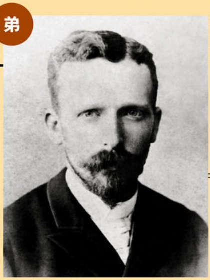

©Haags Gemeentemuseum, The Hague, Netherlands / Bridgeman Images/amanaimages

姉は「マウフェ」とも。フィンセントの従姉妹の夫で、画家を志した最初期に絵を教えた。モーヴに捧げた作品もあり、強く敬愛していた。

絵を教える

兄弟

弟


©The Granger Collection/amanaimages

テオドルス・ファン・ゴッホ
1857 〜 91年

画商。家族と確執のあったフィンセントの唯一ともいえる理解者で、経済的にも支援した。兄の死後は徐々に衰弱し、後を追うように34歳で息を引き取った。兄との膨大な手紙のやり取りからその強い絆がうかがえる。

夫婦


写真：akg-images／アフロ

ヨハンナ・ファン・ゴッホ＝ボンゲル
1862 〜 1925年

夫テオの死後、フィンセントの作品を管理し名声を世に広めた人物。残された膨大な手紙を保管・整理し、書簡集として発表したのも彼女だった。

共同生活


©Albert Harlingue/Roger-Viollet/amanaimages

ポール・ゴーギャン
1848 〜 1903年

ポスト印象派を代表する画家。アルルに画家たちを呼び寄せて芸術家共同体をつくろうとしていたフィンセントと一時的に共同生活を送るが、2カ月で仲違い。フィンセントの耳切り事件以後、再び会うことはなかった。

息子


©Persconferentie over bouw van het Rijksmuseum Van Gogh te Amsterdam. Ir.V.W.van Gogh. Fotograaf:Kroon, Ron/ Anefo. Nationaal Archief / Fotocollectie Anefo / licentie CC-BY

フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ
1890 〜 1978年

フィンセントの甥にあたり、ファン・ゴッホ美術館の設立に尽力するなど、今日のゴッホ人気に貢献したひとり。膨大な手紙を関係者から集め、編集や出版を手がけた。

アドルフ・モンティセリ
1824 ～ 86年

フランス・マルセイユ出身の画家。生々しく分厚い筆遣いを前面に出すフィンセントの作風は、モンティセリの影響ともいわれる。一時期はポール・セザンヌとともに風景を描いていた。



©Ville de Marseille, Dist. RMN-Grand Palais / Jean Bernard/AMF /amanaimages

ジャン＝フランソワ・ミレー
1814 ～ 75年

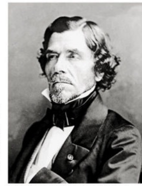
風景や農民の風俗を描いたバルビゾン派の代表格。フィンセントは最初期からミレー作品の模写を続け、影響を色濃く受けた。なかでも『種まく人』に倣った作品がいくつも残っている。



©RMN-Grand Palais (Musée d'Orsay) / Patrice Schmidt/AMF /amanaimages

ウジェーヌ・ドラクロワ
1798 ～ 1863年

フランスの19世紀ロマン主義を代表する画家。フィンセントはドラクロワ作品に早くから魅せられ、参考にした作品を多く描いている。色彩や手法において特に強い影響を受けている。



©Félix Nadar / Pictures from History / Bridgeman Images/amanaimages

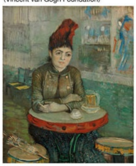
女たち

『お腕に子どもを抱くシーン』1883年 クレラー=ミュラー美術館 オッテルロー ©Kröller-Müller Museum, Otterlo



娼婦 シーン 生没年不詳

『カフェ・ド・タンブランのアゴスティーナ・セガトーリ』1887年 パリ ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団） アムステルダム ©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



アゴスティーナ・セガトーリ
生没年不詳

©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



ケー・フォス・ストリッケル
生没年不詳

フィンセントは恋にも不器用さが表れる。28歳の頃、子持ちで未亡人の従姉に恋をし求愛するが、頑なに断られる。翌年には同じく子持ちの娼婦シーンに出会い、家族の反対を押し切って同棲生活を経験するも破局。33歳、パリではカフェの女主人セガトーリと近しい関係になったともいわれる。

父

テオドルス・ファン・ゴッホ
1822 ～ 85年

オランダ改革派教会の牧師（プロテスタント）。フィンセントは宣教師の活動に励んだ時期もあり、その人生において父の影響は色濃かった。問題の多い息子を案じ、晩年まで心労を重ねていた。

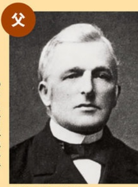
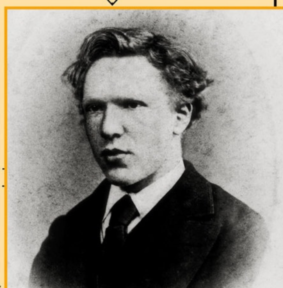


写真:akg-images/アフロ

息子



写真：AISA／アフロ

フィンセント・ファン・ゴッホ
1853 ～ 90年

絵のモデル

写真:akg-images/アフロ



ポール・ガシェ
1828 ～ 1909年

晩年を過ごしたオーヴェール=シュル=オワーズで、フィンセントの主治医を務めた。彼の肖像画は、1990年、約125億円という当時の世界最高額で落札された。

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?



『タンギー爺さん』1887-88年 Niarchosコレクション© World History Archive/ Photoshot/amanaimages

ジュリアン・タンギー
1825 ～ 94年

パリの絵具商。フィンセントは私利私欲に走らない彼の生き方に魅せられ、3作の肖像画を描いた。



『ジョゼフ・ルーランの肖像』1889年 クレラー=ミュラー美術館 オッテルロー ©Kröller-Müller Museum, Otterlo

●『ゴッホとゴーギャン展』に出品（103ページ参照）

ジョゼフ・ルーラン
1841 ～ 1903年

アルル時代にしばしば絵のモデルになった郵便局員。彼の家族とも交流があり、作品に描いた。

評価した画家



©The Granger Collection/ amanaimages

クロード・モネ
1840 ～ 1926年



© Christie's Images / Bridgeman Images/amanaimages

アンリ・マティス
1869 ～ 1954年

フィンセントの晩年に開かれた展覧会では、モネから高い評価を受けたという。1901年にはパリの画廊で60点以上のゴッホ作品が展示。マティスらに影響を与えた。

かくして、ファン・ゴッホは「巨匠」となった。

生前はほぼ評価される機会に恵まれなかったファン・ゴッホ。死後に加速した「神話化」の動きが、彼を巨匠へと押し上げるまでを追う。

今年6月、あるニュースが美術界で話題を呼んだ。ファン・ゴッホのスケッチブックが新たに発見され、そこに描かれていた絵が画集としてフランスの出版社から年内に出版されるというのだ(日本でも刊行予定あり)。

死後120年あまり経ってなお、話題の尽きないゴッホ。付いて回るのは「炎の画家」「自殺した悲劇の人」という表現だ。なぜ、このようなイメージが定着したのだろうか。

「いくつか理由があります。『神話化』の神輿をかついだ人々がいたこと、贋作スキャンダルなどの存在です」と話すのは、ゴッホに関する研究で知られる美術史家の木下長宏さん。

「炎」のイメージは、日本で生まれたもの?

そもそも、神話化されやすい要素には事欠かない生涯だった。周囲の無理解、耳切り事件、謎の死、狂気……。

その「無理解」のレッテルの中で、生前に1人だけ熱烈な賛辞を捧げた批評家がフランスのアルベール・オーリエである。「孤立者たち」と題した論文の中でオーリエが用いた「常軌を逸した恐るべき天才」「美しき理想郷に全身全霊を捧げる者」という表現は、ゴッホ神話の方向性を導くものとなった。

展覧会の開催により高まる評価とともに、作品の値段も上がる。1890

「ゴッホ神話」がつくられた背景とは?

初めての評価――1890年

アルベール・オーリエ、ゴッホ礼賛の評論を発表。

1890年1月、文芸誌『メルキュール・ド・フランス』に「孤立者たち」と題する論文が載った。筆者は当時24歳のアルベール・オーリエ。そこには熱に浮かされたような修辞が並ぶ――ファン・ゴッホの作品を見て最初に残る印象が「火災となった光だ、熱病に沸き立った生なのだ」といった具合に。

画家当人もこの論文には当惑した。木下さんはこう指摘する。「オーリエにとっての現代美術のありよう、理想をゴッホに勝手に託した面もあると思います」。ともあれ、これが「孤立者」のイメージが生まれた瞬間だった。

©Bibliothèque nationale de France





左奥:アルベール・オーリエ。左:『メルキュール・ド・フランス』掲載の論文「孤立者たち」。当惑はしたものの、画家はオーリエに礼状を出した。



『赤い葡萄畑』
1888年　アルル
油彩、カンヴァス
75×93㎝
プーシキン美術館　モスクワ

ブリュッセルの『20人展』に出品。同展出品者のアンリ・ド・グルーがゴッホと一緒の展示を拒み、ロートレックから決闘を申し込まれるという騒ぎも起きた。

© Alinari Archives, Florence/ AMF /amanaimages

ベルギーの『20人展』で、初めて作品が売れる。

定説によればゴッホの生前に売れた唯一の作品、『赤い葡萄畑』。1890年1月、ブリュッセルで開催された『20人展』に出品されたものだ。買い手は、かつてゴッホが肖像画を描いた画家ウジェーヌ・ボックの姉アンナで、値段は400フランだった。

生前に売れた絵は1点だけ、高い評価はされなかったという点が、ゴッホ神話の悲劇的側面の強調によく使われる。だが、フランスの芸術社会学者ナタリー・エニックは著書『ゴッホはなぜゴッホになったか』の中で、大衆の無理解はともかく、当時の絵の「定型」とは明らかに異質なゴッホの絵画が批評家に認められるまでに時間を要したのは無理もないと述べている。

©Van Gogh Museum, Amsterdam(Vincent van Gogh Foundation)



上左:1905年にアムステルダム市立美術館で開催された回顧展のカタログ。上右:1901年、ベルネーム=ジューヌ画廊での展覧会のカタログ。

死後に相次ぐ展覧会の開催――1901年～

ヨーロッパ各地で、作品が人目に触れる。

ゴッホの死から11年後の1901年、初の大規模な展覧会がパリのベルネーム=ジューヌ画廊で開催された。オーリエの論文が世に出た後、小規模な展覧会が開かれたり、ゴーギャンの回想録が出版されたりと、少しずつ評価が高まる中での出来事だった。

同展を見て影響を受けたマティス、ピカソ、ドラン、ヴラマンクらはやがて「野獣派(フォーヴィスム)」の形成に至る。05年にはアムステルダム市立美術館で大規模な回顧展が開催。作品の貸し出しや売却などを取り仕切ったのは、義妹のヨーだった。

贋作スキャンダル──1908年～

あまりにも完成度の高い、贋作の登場が一大事件に。

作品の評価が高まる一方で贋作も登場する。1897年、ジュディット・ジェラールはゴッホ作品の収集家であるエミール・シェフネッケルのもとでゴッホの『自画像（ポール・ゴーガンに捧ぐ）』（本誌表紙参照）を目にし、模写をした。その14年後、彼女は自分の模写が何者かによって手を加えられ、ゴッホの作品としてパリの画廊に飾られているのを目撃する。それが右の絵だ。半世紀後、彼女の証言でこの作品は贋作と判定され、いまは行方もわからないという。

そして1928年、決定的なスキャンダルが起こる。ベルリンの画商オットー・ヴァッカーがカッシーラー画廊に持ち込んだ33点が、その後の鑑定で贋作と判明したのだ。それらは権威ある専門家陣により真筆と鑑定されていたこともあり、美術界を揺るがす大問題に発展。ヴァッカーは有罪判決を受けた。本件とは別に、医師ガシェ親子やヨーの再婚相手で画家のホスハルクが贋作にかかわったという疑惑も残っている。



ジェラールが1897年に模写し、その後、ひとたびはゴッホの作品とされていた自画像。意図的に贋作制作を企んだというより、熱心に模写した作品を利用されたものらしいが……。

画像提供：木下長宏、撮影：青野豊

書簡という第1級資料の公開──1893年～

友人ベルナールと義妹ヨーが果たした役割。

「ゴッホ神話の確立に、友人ベルナールと義妹ヨーが果たした役どころは大きいです」と、木下さんは言う。まずは1893年、画家エミール・ベルナールが自分宛てのゴッホの手紙を雑誌に公開。1911年に本として刊行する。一方、義妹ヨーは14年に全3巻の『ファン・ゴッホ書簡集』を上梓。ただし、家族にとって都合の悪い箇所は削ったり伏せ字にしてしまった。それらが修正され、新たな全集が刊行されたのは没後100年の1990年のことだ。

819通にものぼる手紙は、画家の心の内を垣間見せてくれる。ただ、公表されることなど考えもせず綴られた手紙がどんな「真実」を含むのか。そこは心にとめておきたい。



© AKG/PPS通信社

1886年、セーヌ河岸で話すベルナール（奥）と、こちらに背を向けて座るゴッホ。パリ時代に知り合ったベルナールとは長い付き合いだった。

フィクショナライズの進行──1934年～

小説化・映画化・漫画化で、画家は永遠の命を得る。

1934年、ゴッホの書簡をもとにアーヴィング・ストーンが小説『Lust for Life』を発表する。直訳すれば「生への渇望」といったタイトルだが、映画化された際、『炎の人ゴッホ』という邦題が付いた。監督はヴィンセント・ミネリ、主演はカーク・ダグラスである。

小説も映画もヒットしたのだが、そのせいもあり、ゴッホの絶筆は『烏の群れ飛ぶ麦畑』だという誤解や、画家は狂気の果てに人生に別れを告げたのだという固定概念が確立したともいえる。ミネリ版の前にもアラン・レネが、そして90年にはロバート・アルトマンがゴッホの映画を撮っている。また、黒澤明も『夢』でゴッホを登場させた。

近年でも、テオこそが兄を天才として世に送り出した稀代の演出家だったのではないかという着想から、穂積という漫画家が『さよならソルシエ』という作品を刊行。こうしてさまざまな分野のクリエイターを触発し続けることで、ゴッホは永遠の生命を得たかのようだ。



©Getty Images

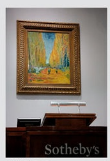
『炎の人ゴッホ』で主人公のゴッホを演じたカーク・ダグラス。彼はあまりにも役に入り込みすぎ、精神的に疲れ果てて、撮影終了後、日常に戻るのにたいへんな苦労を要したという。

オークションでの高額落札──1987年～

作品が次々と、高額落札価格ランキング入り。

1890年には400フランだったゴッホ作品。それが1970年代には100万ドル超えするものも出て、80年代、日本人には聞き覚えのあるニュースが駆け巡る。87年、クリスティーズのオークションで、安田火災海上（現・損保ジャパン日本興亜）が『花瓶の14輪の向日葵』を3,990万ドルで落札したのだ。

同じく87年には『アイリス』が5,390万ドルで落札。90年には『医師ガシェの肖像』が8,250万ドルで落札。現在でもオークションでの高額落札価格ランキングで12位という金額である。昨年には『アリスカンの並木道』が6,600万ドルで落札。ゴッホ神話は当分、色褪せることはなさそうだ。



©Getty Images



©Getty Images

左奥：2015年、ニューヨークのサザビーズで競売にかけられた『アリスカンの並木道』。左：1990年、日本人が落札した『医師ガシェの肖像』。

年、生前に売れた唯一の作とされる『赤い葡萄畑』は400フラン。それが10年後の1900年には『花瓶の立葵』に1、100フラン、32年には『静物』に36万1、000フランの値が付いた。作品の価値上昇と呼応して、贋作が登場する。1928年にベルリンの画商オットー・ヴァッカーの絡んだゴッホ作品33点が、のちに贋作と判明。ヴァッカーに有罪判決が下るという一大スキャンダルとなった。

ゴッホ神話は文筆家をも刺激する。アメリカの作家アーヴィング・ストーンは、1934年に小説『Lust for Life』を発表。それを原作とした映画が57年、『炎の人ゴッホ』という邦題のもと公開された。51年に発表された三好十郎の戯曲『炎の人　ゴッホ小伝』が劇団民藝により上演され大ヒットしたため、この邦題が付いたといわれる。

ストーンも資料としたのが、ゴッホの一連の書簡だ。弟テオ宛てのものはテオの死後、その妻ヨーが保管。1911年にまず、友人の画家エミール・ベルナールが自分宛ての書簡を刊行、続いて14年にヨーが書簡集全3巻を刊行。ゴッホ神話の喧伝に大きな役割を果たすこととなる。

こうして神話は膨れ上がり、「巨匠」への道が整備された。木下さんはこう語る。「さまざまな『説』や『事実』が渦巻きますが、自分なりの批評眼をもって絵そのものに向き合ってほしい。『事実』は書き換えられても、絵は変わりません。絵が語りかけたいことを直観で感じることです。直観を大事にしたからこそ、画家ファン・ゴッホが存在するのですから」

弟なくして、フィンセントは存在しなかった。

画家として暮らしが立たなかったゴッホ。生活費に画材代、酒、たばこ、すべてを支援したのは4つ下の弟テオだった。尋常ならざる兄弟の絆とは？

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

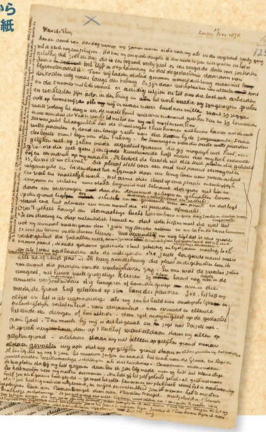


Theodorus van Gogh

長年ゴッホの自画像とされてきたが、2011年にファン・ゴッホ美術館が弟テオの肖像と発表。耳の形がテオに似て丸いことや、頬髭がないことが根拠だという。『テオ・ファン・ゴッホの肖像』1887年　ファン・ゴッホ美術館蔵



右の手紙にゴッホは、ブリュッセルの労働者街にある居酒屋「シャルボナージュ」を描いて同封した。手紙の中で、この頃からスケッチを始めたと、テオに告白している。描写は硬くたどたどしいが、素朴で実直だ。



フィンセントから弟テオへの手紙

ラーケン
1878年11月13、15、16日
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）アムステルダム

フィンセントは頻繁にテオに手紙を送った。弟と手紙でやり取りすることが心の支えとなっていた。ブリュッセルまで訪ねてきてくれたテオへ、お礼とともに、これから進む道について率直な想いが綴られている。

27歳の時、画家になる決心をしたファン・ゴッホ。収入のない彼を支えたのは4つ年下の弟テオだった。破天荒な兄に比べ穏やかで堅実なテオは、16歳から画廊に勤め、23歳頃から兄への送金を始める。兄は弟からの援助にためらいを覚え、送金分を絵で返すという協定を提案。弟は兄の絵の共同制作者で絵はふたりの財産ということだ。

兄は頻繁に弟に手紙を書く。共同制作者のテオと、なにもかも共有したかった。送られてくる絵と手紙のやり取りを通じて兄弟の絆は強くなっていく。画家になるべく孤独な闘いを続ける兄にとって弟は唯一の理解者だった。

爆走する天才の兄と、その才能を信じ続けた弟。

1886年、フィンセントはパリに弟を突然訪ね、ふたり暮らしが始まった。同居中、兄はエゴをむき出しにし、ふたりは頻繁に衝突。それでもテオは耐えた。《彼は信じられないくらいさまざまなことを知っていて、世の中を見通す頭脳も実に明晰だ》（テオから妹への手紙、1880年※）と、常に兄のいい面を見ようとした。実際、兄は語学力に富み政治や文化に対して明確な見解をもっていた。兄の支離滅裂な性格に辟易しながらも、深い教養を携え強い信念のもとに絵を描く彼を、テオは肯定するほかなかった。

フィンセントが南仏に旅立った後も、テオは兄の要望通りの金額を送り続ける。一向に絵が売れない中で、ふたりは苦しみながら信じる道を進んだ。まだ誰ひとり認める者はいなかったが、事実、兄はまぎれもない名画を



テオの死後、妻ヨーは義兄の絵の普及に奔走。のちに再婚し移り住んだアムステルダムの自宅にはゴッホの絵がかかっている。左から、テオの息子フィンセント、ヨー、再婚相手のホスハルク。1905年。



Vincent Willem van Gogh

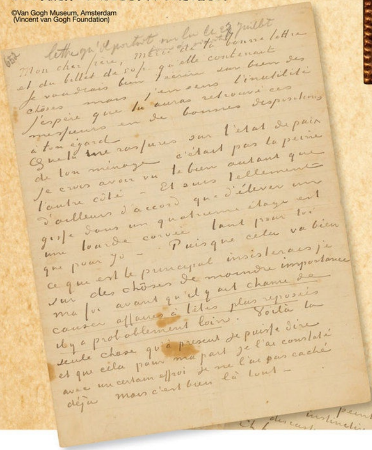
パリのテオのアパルトマンで描かれた。帽子からこぼれる髪と髭は赤っぽいオレンジ。兄弟の髪色はだいぶ違った。『自画像』1887年　ファン・ゴッホ美術館蔵

フィンセントから弟テオへの手紙

オーヴェール=シュル=オワーズ　1890年7月23日

ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム

兄から弟への最後の手紙。銃で自らを撃った際に、ゴッホはこの手紙を持っていた。下部に見られるシミは、血痕とされている。上部にテオの筆跡で、7月27日ゴッホがこの手紙を持っていたことを示すテオの走り書きが。



652
lettre qu'il portait sur lui le 27 juillet
Mon cher frère, Merci de ta bonne lettre
et du billet de 50 fr. qu'elle contenait
Je voudrais bien t'écrire sur bien des
chôses mais j'en sens l'inutilité
J'espère que tu auras retrouvé ces
messieurs en de bonnes dispositions
à ton égard
Quant à tes rassurances sur l'état de paix
de ton ménage c'était pas la peine
je crois avoir vu le bien autant que
l'autre côté - Et suis tellement
d'ailleurs d'accord que d'élever un
gosse dans un quatrième étage est
une lourde corvée tant pour toi
que pour Jo - Puisque cela va bien
ce qui est le principal insisterais je
sur des chôses de moindre importance
ma foi avant qu'il y ait chance de
causer affaires à têtes plus reposées
il y a probablement loin. Voilà la
seule chose qu'à présent je puisse dire
et que cela pour ma part je l'ai constaté
avec un certain effroi je ne l'ai pas caché
déjà mais c'est bien là tout -

フィンセントから弟テオへの手紙

エッテン　1881年9月中旬

ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
アムステルダム

手紙に添えられた作品『疲れ果てて』の説明スケッチ。前年の1880年に画家になることを決意してから、ゴッホは折々に描いている絵について、ときにスケッチを手紙に添え、制作のプロセスを弟と共有しようとした。



弟と魂を削りながら描いていたのだ。

89年、テオの結婚で事態は変わる。1対1だった兄弟のバランスは崩れ始めた。90年に甥も誕生し、これまでのように弟を頼れない。フィンセントは不安を抱く。さらにテオは、自分の画廊を持ちたいと考え資金面で悩んでいた。自分はテオの負担にしかなっていない——兄の心は波立った。

同年7月末、フィンセントは自ら命を絶つ。弟は兄に寄り添いその死を見届けた。突然の別れにテオは苦しむ。経済的負担、心理的重圧。兄の存在は重苦しいものだったに違いない。だが同時にフィンセントという世紀の天才、その並外れた才能を間近に見続けたテオは、心の底から兄を信じ敬いその作品に傾倒するようになっていた。あまりに純粋で不器用な兄を、弟は深く愛していた。《ああ、お母さん、彼はまさしくぼくだけの、たったひとりの兄さんだったのです!》(テオから母への手紙、1890年※)

動揺したテオは、手紙で母に悲痛を訴える。常にかたわらにあった兄の存在。離れていても毎日のように語りかけてくれた兄はもういない。せめてその作品を世に出そうと奔走する中、テオは長く患っていた梅毒を悪化させ、錯乱状態に陥る。闘病も虚しく翌年1月、兄の死からわずか半年後、心筋梗塞のため亡くなった。33歳だった。

人生のすべてを分かち合ったフィンセントとテオ。極度の依存関係の中にあっても、兄弟の愛は不滅だった。たぐいまれな兄弟の絆が生み出した芸術作品、それがファン・ゴッホの絵といえるだろう。

●90〜91ページに掲載した※の手紙は『テオ　もうひとりのゴッホ』(マリー=アンジェリック・オザンヌ、フレデリック・ド・ジョード著、伊勢英子、伊勢京子訳、平凡社)より抜粋。

テオのひ孫ウィレムが語る、一族の思い出。

偉大なる画家を輩出した一族の血筋はいまも残っている。ゴッホの弟テオのひ孫に、美術館を創設した祖父（＝テオの息子）や画家への想いを訊いた。



画家フィンセントと弟テオが両親と暮らしていた時に使われていたというダイニングチェア。一族の歴史を物語る、大切な記念の品だ。



4歳のウィレムと祖父。同じ名前のふたりはとても仲よし。祖父はウィレムが25歳の時に亡くなった。



『花咲く巴旦杏の枝』（69ページ参照）は、祖父が生まれた時にゴッホがお祝いに贈ったもの。ずっと祖父宅の書斎に飾られていた、ウィレム最愛の一枚である。



『下生えと木蔦』1889年、ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）蔵。ウィレムは、この絵の色鮮やかなディテールが気に入っている。

テオの息子は、伯父であり偉大な画家であった人物と同じ名前「フィンセント」を授かり、のちに伯父の絵画を集めたファン・ゴッホ美術館を創設する。この創設者の孫、つまりテオのひ孫に当たる人物がウィレムだ。

オランダには、長男に祖父と同じ名前を付ける古い習慣がある。そのため、美術館創設者の初孫であるウィレムのフルネームも、フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ。しかし、「一族は既にふたりの有名な〝フィンセント〟を輩出しているから」と、母親は彼の呼び名をウィレムと決めた。

よその美術館に貸す絵を、探す手伝いをしたことも。

そんな彼には、祖父とともに過ごしたたくさんの思い出がある。その多くの場面に、ゴッホの絵があった。

「祖父の書斎には、彼の誕生祝いにゴッホが贈った『花咲く巴旦杏の枝』が飾られていました。祖父宅に行くたびに、その鮮やかな色彩に心を奪われたものです。ゴッホの絵がずらーっと立てかけられた、大きなウォークインクローゼットのこともよく覚えています。子どもの頃、グッゲンハイム美術館やニューヨーク近代美術館に貸し出すための絵を探す手伝いもしました。『その絵じゃないよ』と言われて、重なり合う絵の隙間にスッと押し戻したりして。信じられないでしょう？（笑）」

16歳の夏のこと。ウィレムは、祖父とともにゴッホの足跡をたどった。南仏からオーヴェール＝シュル＝オワーズを回る道すがら、ゴッホがとても勤勉で研究熱心な画家であったこと、心の底をすべて打ち明けるように弟へ手紙を書き続けたこと、子どもの頃から同じベッドで寝るほど仲がよかった兄弟の間には強い信頼関係があったことなどを祖父から聞いた。旅の中で最も鮮明に印象に残っているのが、オーヴェールの風景だ。寄り添うように並ぶ兄弟の墓前に、祖父と一緒に立った時には「心が震えた」と振り返る。

そんな自分には、時折、時間外に美術館を見学する「ちょっとした特権」があるのだと、ウィレムは語る。

「ひとりでゆっくり観ていると、その日の心境にもよるのか、毎回違う絵の前で足が止まるんです。ゴッホは筆を走らせる長さや色彩の組み合わせなど無数の試行錯誤をしましたが、絵を観ると毎回異なるディテールを発見する。たとえば、『下生えと木蔦』の奥行きに鮮やかさを与えていたのは40か50個くらいのコバルトブルーの点描だったのか……とか。深い感情を表現しているので、観る人の心もちで受け取り方ががらりと変わるのです。多層的な魅力をもつ絵だからこそ実現する鑑賞の形なのでしょうね」



Vincent Willem van Gogh
フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ

1953年生まれ。テオのひ孫で、ファン・ゴッホ美術館創設者の孫。現在は同美術館のアンバサダーとして活躍。「常に前進と革新の精神で芸術活動を続けたゴッホが、現代の人々に愛されているのを見るのはとてもうれしい。多くの人々の心の中に、ゴッホのための居場所があるとも感じています。祖父はいつでも、自分が管理する膨大な作品群を『高価な名画コレクション』ではなく『世界の芸術遺産』だと言っていました。ゴッホと祖父の両者に通ずる“民主的な芸術観”を引き継ぐ仕事に携わることができて幸せです」

作品と向き合うなら、ファン・ゴッホ美術館へ。

作品のほか使った道具や家具の展示、技法の解説、意欲的なテーマの特別展まで企画が満載。ここは、訪れるたびに新たなゴッホに会える美術館だ。



本館0階（日本でいう1階）。「ファン・ゴッホと目と目を合わせて」と名付けられた展示空間。見に来たはずが巨大な自画像に見られている。

油彩画二百余点、素描約500点のほか書簡や調度品などを収めるゴッホ関連コレクションの殿堂が、アムステルダムのファン・ゴッホ美術館。世界各国からの来館者は年々増加しており、昨年はのべ190万人を記録した。

1973年、建築家ヘリット・リートフェルト設計による本館をオープン。98年には黒川紀章による別館ができ、特別展のスペースを拡張。そして昨年には、800㎡におよぶ美しいガラスのエントランスホールを増築し、来館者の動線を劇的に改善した。

「もっと知りたい」に、応える企画を次々と発信。

精神の病に苦しみ、若くして自殺したゴッホほど人々の好奇心をかき立てる芸術家はいない。その人生は映画やドラマになり多くの本も書かれた。「わかりやすいテーマ性やビビッドな作風と並び、太く短く駆け抜けるように生きたロックンロール的な生涯もまた、常に若い世代のファンを開拓し続ける要因のひとつです」と、ゴッホの研究者、クリス・ストルワイクは語る。

同館の学芸員ニンケ・バッカーは、近年のゴッホのファンについて「既に多くのことを知っていて、さらに知識を深めようとこの美術館を訪れる人も多いです」と分析する。そんなハードコアなファンの期待に応えるには、名画の常設展と並んで、折々の興味深い企画や特別展の開催が不可欠だ。これまでは見えなかった新しい脈絡を浮き彫りにするような、斬新な切り口のテーマが求められている。

たとえば本館2、3階の展示では、ゴッホの人間関係や制作プロセス、発想の源について、使っていた道具なども交えて説明。一方、最近の特別展では、精神を病んだムンクとゴッホを並べた『ムンクとゴッホ』展、85ページでも紹介した『狂気の淵で』展が好評を博した。10月25日からは、ゴッホが尊敬し影響を受けた画家ドービニーを軸に印象派との相関関係を読み解く『ドービニー、モネ、ファン・ゴッホ』展も始まる。あらゆる角度からゴッホを知ることができるのが、この美術館のいちばんの魅力だ。



Van Gogh Museum

●Museumplein 6, Amsterdam　☎+31・020・570・5200
ⓉVAN BAERLESTRAAT　㊓11/6までの月〜木、土、日：9時〜18時　11/7〜12/24の月〜木、土、日：9時〜17時　12/25〜2017/1/8：9時〜19時（月〜木、日、12/31）　9時〜21時（土）　2017/1/1：11時〜19時　すべての金曜：9時〜22時
※入館は閉館の30分前まで　不定休あり
㊕一般17ユーロ　www.vangoghmuseum.nl





美術館所蔵の『脱穀する人(ミレーを模して)』1889年。絵の右が、手本となったミレーの1881年の作品『納屋で脱穀する男』。模写のプロセスを詳しく説明。

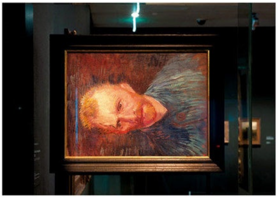


パリ時代、ゴッホは多様な色の糸束を使い、実際にパレットに絵具を出す前にあらかじめ色の調和を確認していた。



弟テオが兄からの書簡を保管していたキャビネット。テオの死後は妻ヨーが受け継ぎ、再婚後も大事に保管した。





上奥が『じゃがいもを食べる人々』の習作、1885年。上が、その裏に1887年に描かれた『自画像』。金の節約のため、ゴッホは1枚のカンヴァスの表裏に異なる絵を描くことがままあった。この美術館では、そういった作品を両面から見せる展示方法を工夫している。



2015年に増装されたエントランスホール。入場口は、従来の通り側から美術館広場側に移動した。事前にオンラインで入場券を購入しておくと便利。

視点はそれぞれ、「私の愛しきフィンセント」論。

いかように解釈できる点もまた、ファン・ゴッホの魅力だ。医師や女優、クリエイターなど各界のゴッホ好きに、好きな作品と、心惹かれるポイントを語ってもらった。

斎藤 環 Tamaki Saito 精神科医



●1961年、岩手県生まれ。専門は思春期・青年期の精神病理学、病跡学。美術・映画・漫画などカルチャー批評も行う。『アーティストは境界線上で踊る』(みすず書房)、『ひきこもり文化論』(ちくま学芸文庫)など著書多数。

独特の“うねり”は、てんかんの「アウラ体験」?

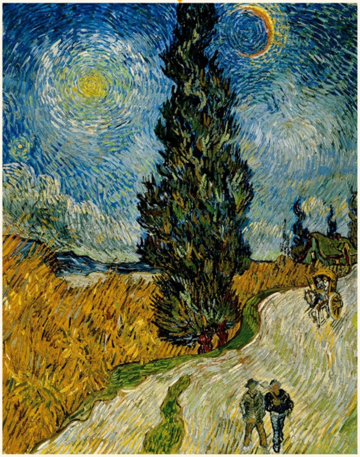
病跡学の分野では、さまざまな研究者がファン・ゴッホを精神医学的に解き明かそうとしているが、結論は出ていないのが現状だ。20世紀ドイツの精神科医で哲学者のカール・ヤスパースは統合失調症と解釈。てんかんとも長らくいわれ、鬱病説もあった。三大精神疾患のどれも可能性がある。多作性や過剰宗教性などから、側頭葉てんかんと関連付けたゲシュヴィント症候群だという説も。精神科医の斎藤環さんはこう語る。

「私は、耳切り事件や自殺の衝動性からみて、てんかんの亜型(特殊な病態)ではないかと思います。『星月夜』(左ページ参照)の美しくいびつな歪曲線は、てんかん発作の直前に現れる『アウラ』、一瞬の強烈な恍惚・幻視体験を描いているのではないでしょうか。糸杉のシリーズやサン=レミ=ド=プロヴァンスで描いた『自画像』にも顕著です。また、暗い情念だけでなく、『アルルのラングロワ橋』のような自然に明るさを求める向日性の二面性をもっています。統合失調症ではこの二面性は出てきにくい。鬱では静謐な、社会に適応的な作品が多いんです」

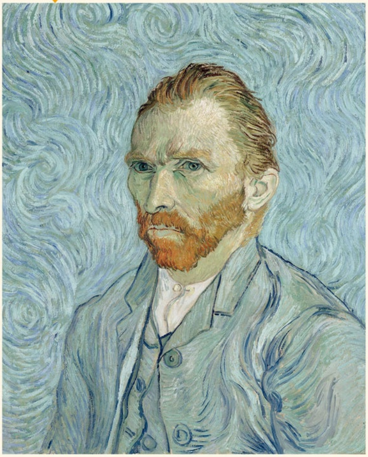
ゴッホは、家庭愛に恵まれない孤独な人生。母親が第一子の死産に整理がつけられなかったかもしれず、それが存在の否定につながったのかもしれない。生育環境が感情に影響をもたらすなど、さまざまな条件が重なったといえる。

「当時は治療法がないですから、入院は事実上の隔離。ゴッホ自身も自分は病んでいる自覚があったので、孤立感も強かったはず。絵を描くことが治療、救済になったと思います。絵画芸術はモノローグ。作品と作者の相互作用で、描けたものから次の筆が進むような絵画の生成過程が画面に表れます。独学で、美術史から脇道へそれて袋小路をつくっちゃったところがあり、アウトサイダーアートにも限りなく近い。ひとりでひとつのジャンルをつくり上げた凄さを感じますね」

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?



『星空の下の糸杉の道』
1890年 オーヴェール=シュル=オワーズ 油彩、カンヴァス 92×73㎝
クレラー=ミュラー美術館 オッテルロー



『自画像』
1889年 サン=レミ=ド=プロヴァンス 油彩、カンヴァス 65×54.5㎝
オルセー美術館 パリ



『夜のカフェテラス』

1888年　アルル　油彩、カンヴァス　81×65.5cm

クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー

©Kröller-Müller Museum, Otterlo

酒井若菜 Wakana Sakai 女優、作家



●1980年、栃木県生まれ。1995年にデビュー後、97年からはおもな活動の場を女優業に移し、多彩な演技力が評価される。2008年、小説『こぼれる』（春日出版）を執筆。近作にエッセイ『酒井若菜と8人の男たち』（キノブックス）。

フィンセントとテオを、姉との関係になぞらえて。

酒井若菜さんには3つ年上のお姉さんがいる。「とても独特」なお姉さんは以前、ひたすらに絵を描き続けていたという。お姉さんがとにかく心酔していた画家がゴッホ。両親ともに絵画に対する造詣はなかったが、いつからか実家には『夜のカフェテラス』が飾られるようになり、酒井さんはゴッホ作品の魅力を知る。しかし、そのポイントは絵ではなく、人間としてのゴッホとテオに移っていく。ときにお姉さんの支えとなっていた酒井さんは、お姉さんをゴッホ、自身をテオと照らし合わせる。

「絵を観て綺麗だなと思うんですが、ゴッホの絵がないと生きていけないというほどではないです。興味が深くなったのはテオの存在を知ってからで、彼と私自身が重なるんです。同時に陰の部分ばかりに焦点が当たっていたゴッホも、一概にそうとは言い切れないんじゃないかなと思うようになって。私が思い描くのはホンワカとした穏やかな人。テオを主人公にした漫画『さよならソルシエ』を読んだ時、その像と近く描かれていたのはうれしかった」

「あまり上手ではないんです」と、お姉さんの絵を評価しつつも「姉の感受性の高さにはまったく追いつくことができない」と酒井さん。絵描きのお姉さんに対して、酒井さんは自己表現の方法として文章を選んだ。「活字にのめり込んだのは、姉がやらない読書をしようと思ったから」。姉が絵、妹が文章。そこも少し、相反する性格をもつゴッホ兄弟に似ているのかもしれない。

鶴田真由 Mayu Tsuruta 女優



●神奈川県出身。1988年デビュー。96年に『きけ、わだつみの声』で日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。近年はドラマ『マルモのおきて』、映画『沈まぬ太陽』などに出演。著書に『ニッポン西遊記　古事記編』（幻冬舎）。

生と死の境界を超える、振れ幅の激しさがいい。

西洋美術史を専攻していた大学時代、ヨーロッパ研修旅行で訪れたオランダのファン・ゴッホ美術館で『烏のいる麦畑』に出合った鶴田真由さんは、その迫力の筆致を間近に浴びて、ゴッホを卒論テーマに選ぶことを決めたという。

「生と死の境界線をも超えていくような、振れ幅の激しさに魅了されたんです。卒論では、彼の抑制を利かせない極端な筆のタッチにフォーカスして掘り下げました。ほどよく穏やかには生きられない、不器用で孤独な性格が、ゴッホの力強さに行き着いたのだと思います。たとえば、ひまわりを描いた作品が生に向かう絵画なら、こちらは死に向かう絵画です。誰もが見てみたいと欲求を抱く生死の向こう側の領域まで、この時、既に行ってしまったのかも」

もう1点、ニューヨーク近代美術館で観た『星月夜』には、さらにギリギリの際まで到達したゴッホの宇宙観を感じた。「当時、アブサンなどの幻覚作用があったともいわれていますが、この作品でゴッホは宇宙のエネルギーとシンクロしているようにさえ思えます」と、鶴田さんはゴッホの生来の性質が彼をそこに押し進めたのではないかと考えている。

「私たち後世の人間は、作家の画歴と人生のすべてを遡って観られるから面白い。作品と手紙の中にひとりの人間としてのゴッホがダイレクトに反映されています。友人になるのは大変そうですが、遠目に見守りたいアーティストですね」



『星月夜（糸杉と村）』

1889年　サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス　油彩、カンヴァス　73.7×92.1cm

ニューヨーク近代美術館　ニューヨーク

©Getty Images



『烏のいる麦畑』

1890年　オーヴェール＝シュル＝オワーズ　油彩、カンヴァス　50.5×103cm

ファン・ゴッホ美術館（ファンセント・ファン・ゴッホ財団）アムステルダム

©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



『自画像
(ポール・ゴーガンに捧ぐ)』

1888年　アルル
油彩、カンヴァス
59.5×48.3㎝
フォッグ美術館、ハーバード大学
ケンブリッジ

森永邦彦
Kunihiko Morinaga
「アンリアレイジ」デザイナー



●2003年、A REAL-日常、UN REAL-非日常、AGE-時代を意味する「アンリアレイジ」を立ち上げる。色鮮やかで細かいパッチワーク、身体にとらわれない独創的な形、テクノロジーや新技術を用いた洋服を特徴とする。

コレクションの中で、画家への賛美を表現。

　森永邦彦さんが主宰するファッションブランド「アンリアレイジ」は2005年の春夏シーズンにおいてゴッホからインスピレーションを得た「きれひと讃歌」というコレクションを展開した。タイトルは、人間が獣のようになってしまう奇病をテーマにした、1970年代初頭の手塚治虫による漫画『きりひと讃歌』をもじったものだ。利き手ではない左手によって歪曲したパターンが引かれ、洋服を輪切りにするといった解体と再構築から生まれた作品は、森永さんのゴッホに対する賛美の表れだという。

「常人のクリエイターは、新たな創造を生み出すために自己を否定し、意図的に常軌から逸れた行為をする必要があります。『きれひと讃歌』を展開していた頃はそういった試みを行っていた時期なのですが、ゴッホは、見る者に違和感を覚えさせる独自の表現を自然に達成していると感じました。自分が逸脱していることをまったく認識していない、自らの世界の中だけで生き続けてきたゴッホには、強い憧れを抱いています」

　実家には『向日葵』のポスターが飾られ、57年に公開の映画『炎の人ゴッホ』を過去に観賞したこともあるなど、ゴッホにはもともと興味をもっていたという。しかし、熱心に学ぶようになったのは先のコレクションの折、「テーマに行き詰まっていた時」だそうだ。ゴッホという存在が、森永さんを創造の活路へと導いたといえるだろう。





「きれひと讃歌」でつくられたTシャツとセットアップ。真っぷたつに切断されたゴッホの自画像と1輪のひまわりを組み合わせた大胆なグラフィック、よれた縫い目によるいびつなフォルムが特徴。当時のコレクションのアイコン的存在といえるアイテムだ。



『灰色のフェルト帽の
自画像』

1887年　パリ　油彩
カンヴァス　44×3.5㎝
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)　アムステルダム

平井章一
Shoichi Hirai
京都国立近代美術館　情報資料室長・主任研究員



●1962年、京都府生まれ。兵庫県立近代美術館や国立新美術館などを経て2012年から現職。おもな展覧会に『「具体」―ニッポンの前衛18年の軌跡』(12年)、『あの時みんな熱かった!アンフォルメルと日本の美術』(16年)など。

再会した自画像に感じた、絵画の核心に迫る姿勢。

「中学時代、初めて足を運んだ美術展でゴッホの自画像に感銘を受け、その34年後、学芸員としてその絵に再会しました」と言う平井章一さんは、2010年に国立新美術館で開催された大規模展『没後120年 ゴッホ展 こうして私はゴッホになった』を担当。その時、再会した自画像には、暴漢に剃刀で切りつけられた事件の際の修復痕が、うっすらと残っていたという。

　神に仕える牧師の息子だったゴッホは、敬虔な農民や炭鉱労働者に共感し、独学でバルビゾン派を模写するなど、生真面目に先人たちの研究に打ち込んだ知性あふれる芸術家だった。

「オランダ時代の暗い画風が好きですね。特に素描は画面の隅々まで全力で描いた、いわゆる“ヘタウマ”な画風で、対象に肉薄して写し取ろうとする凄みがあります。日本では奇行や人物像ばかりが先行して紹介されますが、絵画の核心に位置する芸術家だと思います」

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?



『夕陽と種播く人』
1888年　アルル　油彩、カンヴァス　32×40㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）　アムステルダム

冨田 章
Akira Tomita
東京ステーションギャラリー 館長



●1958年生まれ。慶應義塾大学、成城大学大学院卒業。専門はフランス、ベルギー、日本の近代美術史。著書に、『ビアズリー怪奇幻想名品集』（東京美術）、『偽装された自画像』（祥伝社）などがある。

画家の知性が透ける、ふたつの絵の魅力。

冨田章さんは、画家ゴッホとともに知識人としてのゴッホを高く評価している。語学が堪能で読書を好み、絵画に関する知識や理論を手紙に書き続けてきた、そんなゴッホが学んできたもの、影響を受けてきたもの、そして人間性が凝縮し表れているのが『夕陽と種播く人』だという。アルル時代の初めに生まれた作品だ。
「発想源はミレーの作品ですが、それだけでなく彼は敬虔なキリスト教徒でもあったわけで、聖書の中の、種を播く人は神の言葉をまく人であるという比喩にも基づいています。人物の真後ろに描かれた太陽は光輪を表すという説があり、画面を縦断する木は浮世絵と尊敬するゴーギャンの『説教のあとの幻影』からの影響。以前より筆触が強くなり色彩も大きく変わった点を含め、その後に確立されたスタイルがクリアに見て取れる作品です」
既成概念を打ち破る絵画を残したゴッホの凄みは、インテリジェンスに裏打ちされていた。
「ゴッホはゴーギャンやベルナールに、日本の画家に倣って自画像の交換をしようともちかけ、自らを僧侶に見立てた絵を描きました。実際にはそんな習慣は日本にはなかった。なにかの挿話を誤解したようですが、その誤解のおかげでこの印象的な一枚が生まれたんですね」
ジャポニスムが盛んだった、当時のフランス。情報が限定的で誤った解釈もされていたようだが、それを貪欲に取り込んだのは彼の知的好奇心の表れだろう。

中村好文
Yoshifumi Nakamura　建築家・家具デザイナー



●1948年、千葉県生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業後、設計事務所に勤務。都立品川職業訓練所で家具製作を学んだのち、81年にレミングハウスを設立。『中村好文 普通の住宅、普通の別荘』（TOTO出版）ほか著書多数。

作品鑑賞がより楽しくなる、ウィットに富む手紙に注目。

「ゴッホは手紙が面白いので、高校時代に興味をもってから書簡集はほとんど読みました。彼の絵は、手紙と一緒に見るようにしています」。中村好文さんが好きだと挙げたのは『花咲く桃の木（マウフェの思い出）』。従兄の画家アントン・モーヴ（マウフェ）の死に際し、その未亡人に手紙とともに贈った絵だ。
「パリからアルルへやって来て、花盛りの南仏を目の当たりにして、彼の色彩は一気に花開いたんです。この絵は、まさにその表れ。それに、添えられた手紙の内容もいいんです。『死者を死せりと思うなかれ　生者あらんかぎり　死者は生きん　死者は生きん』。自分たちが生きている限り、モーヴは生き続けると言っていて。いい言葉だなあと」
ゴッホは手紙に絵を添えることもあった。中村さんは、文字の間に絵が挿し込まれるレイアウトも好きだという。
「僕も絵の周囲に文字を散らして書くことがあるから、無意識に影響を受けているのかも（笑）。蝉の挿絵が入った、弟のテオ宛ての手紙には、蝉の声を聞くと故郷のコオロギを思い出すけれど、そんなささやかな感動が人生の水先案内人となっていることを忘れないようにしよう、と書かれているんです。ゴッホが晩年を過ごしたオーヴェール=シュル=オワーズには墓参りに行ったことがあるんですが、夏の蝉時雨は本当にすごい。花盛りの頃にも行ってみたいですね」



『花咲く桃の木（マウフェの思い出）』
1888年　アルル　油彩、カンヴァス　73×59.5㎝
クレラー＝ミュラー美術館　オッテルロー



中村さんは、なんと手紙の文面をプリントしたTシャツを私的に作製。蝉は写真をスキャンした。



『サン・ポール療養院の後の山の風景』
1889年
サン=レミ=ド=プロヴァンス
油彩、カンヴァス
70.5×88.5cm
ニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館　コペンハーゲン

高橋明也
Akiya Takahashi
三菱一号館美術館 館長



●美術史家。東京藝術大学大学院で19世紀フランス美術を研究。オルセー美術館、国立西洋美術館を経て現職。近著に『美術館の舞台裏』（ちくま新書）。

描かれた自然の荒々しさが、見る人の心を揺さぶる。

高橋明也さんが挙げたのはサン=レミ=ド=プロヴァンス療養院の窓から見える景色を描いたもの。入院時に描かれたほかの絵に比べると筆致も色調も穏やかで、精神状態も落ち着いていたことをうかがわせる。

「『ローヌ河の星月夜』（32ページ参照）も好きですが、どちらも自然物だけが描かれ、自然の神々しさ、荒々しさが表現されています。旧石器時代の洞窟画やアジアの自然信仰にも通じるものを感じますね」

ゴッホの絵には素人のような荒っぽさ、アウトサイダーアートとでもいうべきところもあるという。

「そこには現代人の裸の衝動から出てくる根源的なものがあります。だからこそ技術的には稚拙でも、文化を超えて人の心を揺さぶるのでしょう。彼の生涯を知るとその思いは強まります。作品と人生がここまで一体化した作家は、そういません」

新畑泰秀
Yasuhide Shimbata
ブリヂストン美術館 学芸課長



●横浜美術館主任学芸員を経て、2010年より現職。『ゴッホ展 クレラー=ミュラー美術館所蔵』（1995年）、『カイユボット展―― 都市の印象派』（2013年）などを手がける。

画業に光明を見出した地の、風車の絵が伝えるもの。

パリのダンス場「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」を描いたこの絵は、まだ関係も良好だった芸術家仲間のたまり場のあるモンマルトルの丘の下にゴッホがテオと引っ越した頃の作品だ。「芸術的に大きな転換期を迎える前夜で、本格的に画業をスタートした思い入れのある場所。アルルの芸術家村構想を膨らませたのもこれから間もなくのことで、希望に満ちた雰囲気が感じられます」と、新畑泰秀さんは分析する。

「その後、癇癪がひどくなり孤立していきますが、彼自身は画家という生業に『俺はこれでいける』という光明を見出していたと思います。彼の人生は短く困難だったけれど必ずしも挫折ではない。本人は自らの芸術論と突出した表現を昇華させ、やりきったという達成感をもっていたはず。これだけ愛され、読み解かれた画家はいないでしょうね」



『モンマルトルの風車』
1886年　パリ
油彩、カンヴァス　46.5×38cm
石橋財団ブリヂストン美術館　東京

河原雅彦
Masahiko Kawahara　俳優、演出家、脚本家



●1992年に演劇やライブ活動を行う「HIGHLEG JESUS」を結成し、解散まで全作品の作・演出を手がける。『父帰る／屋上の狂人』の演出で第14回読売演劇大賞・優秀演出家賞、『万獣こわい』の演出で第22回読売演劇大賞・優秀作品賞を受賞。

愛に支えられた、生きざまに魅かれる。

ゴッホと弟のテオはおよそ18年間、手紙のやり取りをしていた。2人は兄弟愛を超えた共依存に近い関係にあったのではないかと、河原雅彦さんは推察する。

「先日、閉幕した『ミュージカル ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ』で演出を担当することになった際、ゴッホとテオの往復書簡などを読み、改めて勉強をしました。特に興味をそそったのは、彼らの関係性。理想の絵を描くためにお金をせがんだゴッホ。自らを切り詰め支援したテオ。みっともないとも取れるゴッホの行動をどうしてテオは受け止めたのか、初めはわからなかった。しかし、挫折を何度も味わい、絵という悦びを見つけ、怠けずに作品を描き続けた生きざまを知り、抱いていたイメージは大きく変わりました」

河原さんがお気に入りの作品は、パリで画材も扱う絵具商を営む店主が優しく微笑む姿を描いた『タンギー親父の肖像』だ。

「画材を安くしてもらったりと、ゴッホは彼にかなり支えられたと思うんです。ゴッホの死後、ゴッホの絵が欲しいと訪ねてきた客に、タンギー爺さんはそれまでのゴッホへの貸しの分を絵の値段にして売ったという話も、非常に素晴らしいエピソードですよね」

ゴッホはごく少人数からではあったが、深い愛を受けた。その愛は、彼しかもち得なかった才能と熱意への投資だったのだろう。



撮影：桜井隆幸

ゴッホの世界を舞台に投影する映像と、俳優陣の迫真の演技で構成された『ミュージカル ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ』のワンシーン。



『荒れ模様の空の麦畑』
1890年　オーヴェール=シュル=オワーズ
油彩、カンヴァス　50.4×101.3㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

Vincent van GOGH, WHO ARE YOU?

クラウス・アルブレヒト・シュレーダー

Klaus Albrecht Schröder
アルベルティーナ美術館 学芸員



●1955年、リンツ生まれ。ウィーン大学で美術史を学ぶ。88年から企画展覧会場クンストフォールムの指揮を執り、99年アルベルティーナ美術館の館長に就任、改装計画を指揮。2003年の再開館以来、大きな企画展を次々と成功させている。

素描家としての、描線の力にも注目を。

2008年、『ゴッホ〜スケッチされた絵画』を企画し、アルベルティーナ史上最多の来館者数達成に貢献したクラウス・アルブレヒト・シュレーダー館長。51点の油彩だけでなく、初期から晩年までの89作品でゴッホの素描の全貌に光を当てた展覧会は大きな話題を呼んだ。

「ゴッホというと独特の色彩感覚の画家として知られていますが、初期は素描家でした。線に注目してください。晩年の油絵には素描的な線が現れます。ゴッホは色彩と描線という要素を、強烈な表現力をもつ"色の線"に融合させたのです」

お気に入りの作品には、アルルの浜辺に停泊する漁船を描いた絵をセレクト。やわらかい筆致が残る空や海と好対照をなす釣り船のくっきりした輪郭線からは、穏やかな風景の中に息づく、人々の暮らしが感じられる。



『サント・マリ海岸の漁船』
1888年　アルル
油彩、カンヴァス
65×81.5㎝
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
アムステルダム
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

ニンケ・バッカー

Nienke Bakker
ファン・ゴッホ美術館 学芸員



●アムステルダムのファン・ゴッホ美術館のキュレーター。修復保存専門家でもあり同館所蔵のゴッホ絵画管理の責任者。書簡研究の権威でもある。10/21から同館で開催の特別展『ドービニー、モネ、ファン・ゴッホ』のキュレーションも手がけた。

ドービニーとの共通点が、横長の画角に見てとれる。

ファン・ゴッホ美術館のニンケ・バッカーが好きな作品は、『荒れ模様の空の麦畑』。「北の空を連想させる色調には、オランダへの望郷の念が込められていたかもしれません。横長の画角が絵に広がりを与え、風景に包み込まれるような感覚を覚えます」と評する。

この1対2の画角は、印象派に大きな影響を与えた、シャルル=フランソワ・ドービニーが好んで使ったもの。ゴッホが晩年を過ごした地、オーヴェール=シュル=オワーズで活躍した風景画家として知られる。

「ゴッホは画家になる前から、『親密な感情を描いた素晴らしい風景画』とドービニーを称賛していました。本作には横長の画角や描いた場所、深い感情を風景画で描くなど、ふたりの共通点がよく表れています」

故郷や尊敬する画家など、ゴッホの源流を思い起こさせる一枚だ。



『雨傘をさす女のいるアルルのラングロワ橋』
1888年　アルル　油彩、カンヴァス
49.5×64㎝
ヴァルラフ・リヒャルツ美術館　ケルン
©Wallraf-Richartz Museum, Cologne, Germany / De Agostini Picture Library / amanaimages

永野

Nagano　お笑い芸人



●1974年、宮崎県生まれ。1995年より芸人の活動を始める。シュールなネタがもち味で、根強いファンをもつ。2015年、テレビ番組の企画で、ラッセンの絵をとんねるずに62万円で無理やり購入させられた。

ラッセンからゴッホへ、この一枚で新ネタ完成!?

「ゴッホより〜普通に〜ラッセンが好き〜」というネタをもつ永野さん。ゴッホの印象を聞くと「怨念を感じるゴッホの絵より、親しみやすいラッセンが好き」「身内だったらイヤです」と散々だが、今年5月に『色彩の奇跡 印象派展』に招かれると一転。『雨傘をさす女のいるアルルのラングロワ橋』を前に、「ラッセンより〜普通に〜ゴッホが好き〜」と新ネタ（?）を放った。



『タンギー親父の肖像』
1887年　パリ
油彩、カンヴァス　92×75㎝
ロダン美術館　パリ
©Musée Rodin, Paris, France / Peter Willi / Bridgeman Images/amanaimages

そのタッチは、いまもクリエイターを触発する。

アートはもちろん、映画や腕時計にまで！　死後120年以上経ったいまも世界中がオマージュを捧げる、ファン・ゴッホ関連の最新ニュースを集めてみた。

6万6000枚！ 全編が油絵の長編アニメ

いまにも動き出しそうなファン・ゴッホの筆致。独特のタッチで描かれた、世界初、全編油絵の長編アニメーション映画の制作がポーランドで進んでいる。

本作“Loving Vincent”はゴッホの一生と、いまも謎が残る彼の死について探るサスペンスドラマだ。監督のドロタ・コビエラは800通以上にのぼるゴッホの書簡を読み、彼についての映画を撮りたいと思ったという。「私たちは、絵でしか対話することができない」というゴッホの言葉から、油絵によるアニメーションのアイデアが浮かんだ。

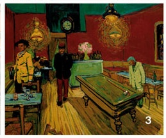
モチーフとなったのはゴッホの名作120点以上。動画にするために114人の画家によって6万フレーム以上もの油絵が描かれた。時代によって異なるさまざまなタッチを意図的に交錯させ、ゴッホの激しく短い生涯を綴る。日本での公開は来年の予定だ。



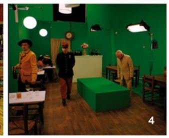
1



2



3



4

1.ゴッホの作品『モンマルトル』をもとにしたシーン。2.同じタッチで描けるように訓練を積んだ114人の画家によって、制作が進められた。3.4.120年以上を経たいまでも、絵を見ればその人物がいかなる性格だったのかが生き生きと伝わってくる。その絵に息を吹き込むために選ばれた俳優たちが、グリーンスクリーンの前で動く様子をアニメ化。背景と組み合わせる。



細部まで緻密に再現された究極の1本。¥27,108,000／ジャガー・ルクルト☎0120・79・1833

永遠に時を刻む、『ローヌ河の星月夜』

スイスの高級腕時計ブランド、ジャガー・ルクルトから、名作『ローヌ河の星月夜』が文字盤にあしらわれたモデルが登場した。

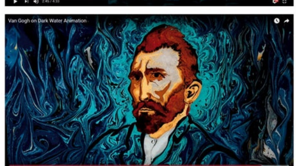
もとになったのは、ブランドのアイコニックなシリーズ「マスター」。そのモデルのひとつ「マスター・グランド・トラディション」にミニッツリピーターを取り入れ、自社製の自動巻きムーブメント「キャリバー942」を搭載。特殊な技術をもつエナメル職人が、細部にまでこだわって絵を再現した。繊細な機械式時計に自らの作品が描かれるとは、ゴッホは想像もしなかっただろう。

鮮やかなマーブリングで、独特のうねりを表現。

水面に絵の具を垂らして模様を描くマーブリングの手法で、見事にゴッホの名作を模写するアーティストが現れ話題になっている。

ガリップ・アイ（Garip Ay）は、母国トルコはもとよりアメリカやロシアなど世界でも展覧会を開く、1984年生まれの若き人気作家。幻想的な風景や肖像画を得意とするが、このたび発表したのはユーチューブでの映像作品。水面に絵具を垂らし、みるみるうちに見覚えのある名画が完成する様子をコマ送りで記録している。作品が完成するとすぐに水面をかき回して崩してしまう儚さがまたいい。





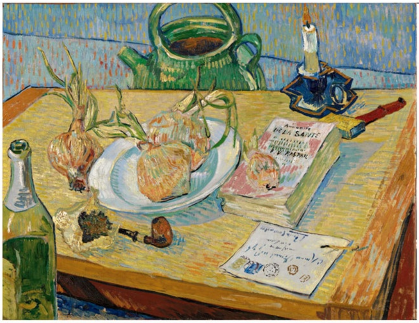
『星月夜』（左上）と『自画像』。背景のうねった模様を見事に再現。

ふたりの「G」に光を当てる展覧会、開催中。

互いの才能に憧れ、恐れ、ともに暮らし、結局は別離を選んだゴッホとゴーギャン。ふたりの関係性を追う展覧会で、作品から読み取れるものは?

Vincent van Gogh
フィンセント・ファン・ゴッホ

ゴッホがゴーギャンと出会ったのは1887年の11月〜12月頃。
やがて、アルルでともに暮らすことに強い熱意を燃やし始める。
南仏の陽光と共同生活への期待は、創作への強いエネルギーとなった。



『タマネギの皿のある静物』
1889年 油彩、カンヴァス 49.6×64.4cm
クレラー=ミュラー美術館 オッテルロー

耳切り事件を経て退院後、すぐに制作にかかった作品。描かれたものは画家と関連の深い日用品ばかりで、ある意味「自画像」とも見なし得る一枚。

©Kröller-Müller Museum, Otterlo



『自画像』
1887年 油彩、厚紙 32.8×24cm
クレラー=ミュラー美術館 オッテルロー

パリ滞在時の自画像。自画像は彼にとって新たな技法やひらめきの実験の記録でもあった。ここでは服や背景の寒色調と、顔まわりの赤っぽい色合いのコントラストを効かせている。

©Kröller-Müller Museum, Otterlo

Paul Gauguin
ポール・ゴーギャン

創作においてはゴッホは「現実」を、ゴーギャンは「想像」を追った。
一方で、日常生活ではゴーギャンは現実を見つめており、アルルに行ったのも、
金銭面での一時的な安定を求めたから、ともされる。果たして、その胸中は?



『自画像』
1885年 油彩、カンヴァス 65.2×54.3cm
キンベル美術館 テキサス

妻の実家のあるコペンハーゲンで描かれた、36歳の自画像。絵で生きることを妻やその家族に理解されず、肩身の狭い生活の中、それでも画家として生きるという決意を、強い眼差しにみなぎらせている。

©Kimbell Art Museum, Fort Worth, Texas



『ブドウの収穫、人間の悲惨』
1888年 油彩、ジュート 72.5×92cm
オードロップゴー美術館 コペンハーゲン ※日本初公開

アルルで描いた本作をゴッホは熱烈に賛美。ゴーギャンはアルルで見た収穫の光景に、記憶の中のブルターニュの女性像を加えた。

©Ordrupgaard, Copenhagen Photo: Anders Sune Berg

『ゴッホとゴーギャン展』

東京展:開催中〜12/18まで(愛知展は2017年1/3〜3/20開催)

強烈な個性の遭遇は、なにを残したか。ふたりの画業の初期から出会い、共同生活の日々、別れ、その後の人生と晩年にいたるまでの軌跡を5章に分けて追う企画。

東京都美術館
☎03・5777・8600(ハローダイヤル)
㊐9時30分〜17時30分(火〜木、土、日)
9時30分〜20時(金、10/22、11/2、11/3、11/5)
※入館は閉館の30分前まで ㊡月
㊑一般¥1,600 www.g-g2016.com

1888年の2カ月、アルルで共同生活を送ったフィンセント・ファン・ゴッホとポール・ゴーギャン。ふたりの関係に着目する日本初の企画『ゴッホとゴーギャン展』が開催中だ。

「ファン・ゴッホは日常の現実から作品を制作し、ゴーギャンは自由に想像を広げ創作した」と、本展の監修者である美術史家のシラール・ファン・ヒューフテンは言う。たとえば、『ブドウの収穫、人間の悲惨』(写真上)について、ゴーギャンは書簡にこう記した。《ブドウ園の風景はアルルで目にしたものだ。そこに、ブルターニュの女性を配した》。一方、ゴッホの『収穫』(61ページ参照)は、画家なりの解釈を経た上ではあるが、ほぼ現実の風景を踏まえて描いたもの。

会場には、ふたりと交流のあったロートレック、ベルナールらの作品も。偉才たちが対象物をどう捉えたのか、その視点の差異に注目したい。

ユーレイルパスで、ゴッホの足跡をたどる旅へ。

かつてファン・ゴッホが住み、作品を残したオランダやフランスへ。130年の時を超えた追憶の旅を、往時と同じく鉄道で楽しもう。

フィンセント・ファン・ゴッホは1886年、パリ北駅に降り立つ。弟テオへの前触れもなく、はやる思いにせき立てられて。当時の彼は、これがもう二度と祖国の土を踏まない旅路になろうとは予想もしなかっただろう。

当時の彼の心もちを想像しながら同じ鉄道旅行で陸続きのヨーロッパを回るなら、「ユーレイルパス」の利用がお薦めだ。日本で購入でき、旅の目的や日程に合わせてさまざまな種類があるが、今回は「フランス・ベネルクスパス」を選択。オランダとフランスにおける画家の足跡をたどる旅に出た。

パリでは弟と住んでいたモンマルトルを歩き、南仏では一面のひまわり畑や入院していた療養院へ。オランダでは生家跡にできた記念館や、作品を所蔵する美術館へ。彼が絵筆を握っただろう現場に立ち、画家の気分で、現代の旅人はスマホで風景を切り取る。

撮った「作品」を眺めつつ、鉄道に揺られて次の目的地へ。そんな時間も列車旅の醍醐味なのだ。

ユイキヨミ・写真
photographs by Kiyomi Yui
オランダ政府観光局・協力
cooperation by Netherlands Board of Tourism & Conventions (www.Holland.com/jp)
フランス観光開発機構・協力
cooperation by Atout France au Japon (http://jp.france.fr)
プロヴァンス地方観光局・協力
cooperation by Provence-Alpes-Côte d'Azur Tourisme Board (www.tourismepaca.fr)
ユーレイル・グループG.I.E.・協力
cooperation by Eurail Group G.I.E. (www.EurailGroup.org)

FRANCE
Arles
@アルル



#アルルの跳ね橋　ゴッホが描いた跳ね橋の名はラングロワ橋(101ページ参照)。いまは別の場所に復元されている。もとの橋はオランダ人技師が設計したそうで、ゴッホもニューネン時代にこのような橋を描いている。

FRANCE
Auvers-sur-Oise
@オーヴェール=シュル=オワーズ



#ファン・ゴッホの家─ラヴー亭　オーヴェール=シュル=オワーズでゴッホが滞在した宿が改装されて公開中。1階はレストランになっており、写真の「豚足の煮込み」など郷土料理を供する。www.maisondevangogh.fr

今回のルート：ズンデルト、ニューネン、オッテルローへは各最寄り駅のブレダ(アムステルダムからオランダ鉄道の特急インターシティで約1時間)、アイントホーフェン(同約1時間20分)、アペルドールン(同約1時間)からそれぞれクルマで。アルルへはパリから鉄道で約4時間、オーヴェール=シュル=オワーズへは同じく約1時間。サン=レミ=ド=プロヴァンスへはアルルからクルマで約40分。

ユーレイルの旅を終えた後も、お楽しみが待っている!



旅を終えたら、ユーレイルパスの旅程を書き込むトラベルダイアリーを郵送すると、ギフトがもらえる(写真の品とは限らない)。ダイアリーにはスケジュールを旅行者の手で書き加えるので、愛着が湧くこと間違いなし。



赤い超特急「タリス」。アムステルダム〜パリ間を最高時速300km、3時間18分でつなぐ。国内旅行ばりの気軽さ。

ユーレイルパスで、ヨーロッパを駆け巡る。

ユーレイルパスにはさまざまなタイプがあり、今回は隣接する3〜5カ国を回る「セレクトパス」の「フランス・ベネルクスパス」(5日間有効、357ユーロ)を選択した。ホテルや観光施設における料金の割引特典もある。アプリ「Rail planner」は旅人の強い味方だ。詳細はサイトで。www.eurailgroup.org





写真でつづる、旅の風景。

いまも多く残る、画家の見た風景。同じ場所に立って芸術家気分で眺める楽しみは格別だ。自分ならどんなアングルで切り取るか、作品を思い浮かべながら歩いてみよう。

フランス編

FRANCE
Paris
@パリ



#タンギー親父の店　パリ9区、かつてタンギー(101ページ参照)が画材店を営んでいた跡地に、浮世絵を扱うギャラリーがある。パリの史跡でもあるこの店で、かつて浮世絵を見て日本に憧れたゴッホに思いを馳せよう。

FRANCE
Paris
@パリ



#ル・ムーラン・ド・ラ・ギャレット　この風車が目印となっていたダンスホールを題材に、ゴッホは多くの絵を描いた。いまは雰囲気のよいレストランとして、多くの観光客を集めている。www.lemoulindelagalette.fr

FRANCE
Arles
@アルル



#ひまわり畑　6〜7月あたりにアルル周辺をクルマで走っていると、突然、鮮やかな黄色のカーペットに目を奪われる。一面のひまわり畑だ。人の背丈を軽く越す大群の中をひとりさまよえば少し心細い気分になってくる。

FRANCE
Arles
@アルル



#カフェ・ヴァン・ゴッグ　右の絵『夜のカフェテラス』のモデルとなった店が改装され、いまも営業中。店の照明や近所のアパルトマンから漏れる光は電灯になったが、映り込むさまは星のよう。ぶつかり合う青と黄の迫力!

もとの作品には、オランダで会えます。



1888年にアルルで描かれた『夜のカフェテラス』は、オランダのオッテルローにあるクレラー=ミュラー美術館蔵(右下参照)。CMなどでもお馴染みの絵だ。画家が興味を抱いたガス灯の光と星の光とが見事に対照をなす。

FRANCE
Saint-Rémy-de-Provence
@サン=レミ=ド=プロヴァンス



#サン=ポール・ド・モーゾール療養院　耳を切る事件を起こした後、ゴッホはここに収容された。庭には一面のラベンダー畑が広がって、プロヴァンスらしい香りに心がすっと落ち着く。www.saintpauldemausole.fr

オランダ編

NETHERLANDS
Zundert
@ズンデルト



#ファン・ゴッホ・ハウス　ズンデルトにあるゴッホの生家跡はいま、小さな記念館に。日本語の音声ガイドがあり、展示品に近づくと画家本人や家族に扮した役者による語りが流れる仕組みに。www.vangoghhuis.com

NETHERLANDS
Nuenen
@ニューネン



#『じゃがいもを食べる人々』の像　かの有名な作品(58ページ参照)の構図を模した像が、牧師であった父の赴任地でゴッホも実家に暮らしたニューネンの広場につくられた。人々に交じって、じゃがいもを食してみたい。

NETHERLANDS
Otterlo
@オッテルロー



#クレラー=ミュラー美術館　ゴッホの作品を多数、所蔵する美術館。なんと面積5500ヘクタールという広大なデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園の中にある。併設されている彫刻庭園も必見！　http://krollermuller.nl/jp

from Pen ONLINE

ペンオンラインの人気記事をコンパクトにお届け！

Feature
オンライン独自取材による特集

グッドデザイン賞の舞台裏を取材した、貴重な記事が公開中。

日本人の85%が知っているといわれる「グッドデザイン賞」だが、その内容を詳しく知る人は多くないはず。そこで、この賞の価値をひも解く特別企画の前編が公開中だ。審査会や選考会に取材班が潜入、各分野の専門家である審査委員たちが約3カ月にわたり議論を重ねる様子をレポートしている。

今年のグッドデザイン賞の応募数は過去最大規模の約3900点。これらはジャンル別にユニットに分けられ、リーダーを含めた4〜6人で審査を行う。「今年のGOODとは？」の論議から始まる1次審査を終えると、応募作品を実際に見て回る2次審査、その後、代表メンバーが集う「ベスト100」の審査と、金賞・特別賞の選考会が開かれる。広く社会と共有しつつ巻き込んでいく、グッドデザイン賞の現在がわかる記事だ。







上：2次審査の会場。東京ビッグサイトの2つのホールを使用して3日間にわたって審査を行う。右下：審査を前に挨拶する永井一史審査委員長（中）と柴田文江副委員長（左）。下：各ユニットで選んだ「ベスト100」候補をユニットリーダーが一つひとつ説明。

News
日々の最新情報は、ここでチェック

ファッショニスタも夢中に？あの英国ブランドが放つゲーム

イギリスのファッションブランド、「ポール・スミス」がスマートフォンやタブレットで遊べるモバイルゲームをリリース。シューティング要素もあるレトロな横スクロールアクションで、大人こそ楽しめる懐かしいテイストがウリだ。ゲーム内には、2016〜17年秋冬コレクションの服に使われているキャラクターがモチーフとして登場。簡単な操作で誰でも楽しめるので、まだプレイしていない人はぜひトライしてみて。


恐竜のキャラクターを操って進む「DINO JUMPER」。最終ステージのレベル3まで攻略できるか？

Feature
本誌では読めないオリジナル記事

レアなお宝がひっそり眠る、伝説のアメリカンショップ

わざわざ訪れる価値がある店をリポートする、人気企画の「デスティネーションショップ」。六本木にある「アウトポスト」の取材記事も、ディープな内容が反響を呼んだ。1973年に創業したこの店では、オーナーの小田切明夫さんが買い付けたアメリカ製のアウトドア用品や生活雑貨などを販売。古くて珍しい品物が所狭しと並び、博物館を訪れるような楽しさを感じられる。アメリカ好きにはたまらない一軒だ。


アメリカの田舎にあるショップをイメージしたそう。デッドストックの商品もあり、見ごたえがある。

News
旬な話題をキャッチし、毎日更新中

バイキング形式の京料理店が、食通たちの間で話題に。

今年の夏、京都市東山区五軒町にオープンした「丹」。京料理を代表する名店仕込みの料理と、空間の心地よさで話題を呼んでいる店だ。昼食は定食メニューを選択し、メイン料理以外はテーブルに並んだ大皿料理から取り分けるバイキング形式を採用。ご飯は丹後のコシヒカリ、お皿には京丹後の野菜をたっぷり使った料理が盛られ、店内にはセンスのよい調度品や季節の草花が飾られる。京都旅行の際は、ぜひ早めの予約を。


店長が自ら、辻村塊、鈴木玄太など若手の現代作家を中心に窯元を訪ねて選んだという器にも注目。

Topics
毎週登場する、お楽しみ連載モノ

日本のロゼの常識を覆す、繊細かつ複雑な味わいに注目。

フード＆ワインジャーナリストの鹿取みゆきさんがお薦めのワインを紹介する「日本ワインで乾杯！」。最新記事では、鹿取さんがそのふくよかさと厚みに驚いたという「グレイスロゼ 2015」をピックアップ。女性のつくり手による繊細かつ複雑な味わいで、バラやザクロ、シナモンのようなニュアンスが漂う香りが特徴だ。日本では、「ロゼ＝香りや味わいが甘い」というイメージが根強いが、そんな先入観を覆す一本だ。


山梨県にある老舗ワイナリー、グレイスワインの三澤彩奈さんがつくる「グレイスロゼ 2015」。

印象派よりも、情報派のあなたへ。

TIFFANY & CO. ティファニー

デュアルタイム搭載の、NYの名門が贈る限定版。



TIFFANY CT60

「ティファニー CT60」は、デビュー後またたく間に世界的ヒットとなった腕時計だ。ニューヨークの薫り漂うその逸品に〝アジア限定〟モデルが登場した。黒文字盤にスパイシーな赤を効かせ、ケースはローズゴールド。セクシーなルックスは、マンハッタンでも銀座でも、目を留めずにはいられない。

外見だけでなく、内部構造とのインターフェースもクールな出来だ。クロノグラフのような2つのプッシュボタンを装備するが、これがローカルタイムの時針を1時間ずつ前後させるセット用。リューズ操作のために時計を外す必要もなく、瞬時に渡航先の時刻に合わせられる。着陸準備のアナウンスで目覚めた愛用者にも優しい装置だ。9時位置に新搭載されたデイ&ナイト表示もローカルタイムとシンクロし、異国の時間へのアジャストをさらに容易にする。

そもそも「ティファニー CT60」のシリーズは、フランクリン・ルーズベルト大統領への誕生日プレゼントに選ばれたティファニーの腕時計にインスピレーションを得ている。大統領は1945年1月のバースディに贈られた腕時計を、翌月のヤルタ会談で着用。その年4月に急逝した歴史的大人物にとって、最後のお気に入りだ。歴史が綾なす伝説のオーラは「CT60」に蘇り、魅力的なリミテッド・エディションに至る。

放射状のソレイユ模様を施したダイヤルに、ゴールドパウダーで彩るアラビア数字インデックスのプードレ仕上げ。極上の質感をもつサーフェスが、美しく絶妙な光のフレアを返す。ポインター式のホームタイムやサブシダリー・ダイヤルのデイト表示と、細部の一つひとつも吟味された。海外に赴く際の腕時計は、かくあるべし。我らはあらゆる外国に行くたびに海を越える、海洋国家の民だ。その機会に絶好の腕時計がアジア限定なのは、ひとつの幸運な符合に見える。



ティファニー CT60

●自動巻き、18Kローズゴールド、ケース径40㎜、パワーリザーブ42時間、セカンドタイムゾーン・昼夜・日付表示、ブラックのソレイユ仕上げ文字盤、ゴールドのプードレ仕上げインデックス、アリゲーター革ストラップ、100m防水。¥2,376,000

岩崎 寛(STASH)・写真
photographs by Hiroshi Iwasaki
並木浩一・文
text by Koichi Namiki

●ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク ☎0120・488・712

pen
with New Attitude

白モノ家電コンシェルジュ

concierge 神原サリー Sally Kamihara　青野 豊・写真 photographs by Yutaka Aono

●新聞社勤務を経て「家電コンシェルジュ」として独立。豊富な知識と精極的な取材をもとに、独自の視点で情報を発信している。2016年、広尾に「家電アトリエ」を開設。テレビ出演や執筆、コンサルティングなど幅広く活躍中。

アマダナ ビアルゴ amadana BEERGO〈ビアサーバー〉

ビールをゆっくり注いで楽しむ、“美細”な泡と香り。



保冷機能も付いた本格ビアサーバー。この一台で、ビールの楽しみ方が変わるはずだ。￥32,400



高級感のあるレザー調のハンドルを、前に傾ければビールが、後ろに傾ければ、きめ細かな泡が抽出される。

深まりゆく秋にぴったりの酒がビールだと言ったら、驚くだろうか。いや、これからの季節にこそ、amadana（アマダナ）の本格ビアサーバーで注いだ極上の一杯が合うのだ。同社の代表、熊本浩志氏は開口一番、「ビールはノド越しで味わうものだって思っている人が多いでしょう？　とりあえずの1杯でノドの渇きを癒すものだってね。でも、食後にゆっくりと味わうビールがあってもいい。コーヒーやワインを楽しむようにゆっくりと味わうという飲み方があってもいいと気づかされたんですよ」と語る。そんな時に大切なのは「泡」。細やかでクリーミーな泡でビールの蓋をすることで、時間が経ってもずっと変わらないひと口が味わえる。それを手軽に叶えるのがビアルゴなのだ。

使い方は至極簡単。栓を開けたビールをセットして中蓋のチューブを容器に差し込み、上蓋を閉めるだけで準備完了。まずはグラスを斜めにして抽出口にセットする。手にしっくりと馴染む革巻きのハンドルを手前に傾け、静かに抽出しよう。計算された流速によって、香り立つビールが注がれる様子にきっと心躍る。この段階では泡立ちは見られないが、7割ほどを満たしたら、グラスを垂直に戻してハンドルをゆっくりと奥に押し込むと、1秒間に5万8000回という高出力超音波による“極美細”な泡でグラス内が満たされ、目にも美しい黄金比の1杯が完成する。グラスをトンと置いた時に、底から泡が浮き立つのを発見できたら、それはとても上手に注がれたビールの証し。中のガスが逃げないようにビールをグラスの内壁に沿わせるように注ぐことで、泡を再生しながら飲み終わるまで常に極上の口当たりを楽しめるのだ。

もともと、このビアルゴは、醸造家たちがつくったクラフトビールを再現すべく生まれた銘柄『マスターズドリーム』を、最もおいしく飲むためのビアサーバーとして開発された。そのため、ペルチェ式の冷却方式で適温をキープ。このビアルゴには、マスターズドリーム以外なら、味のしっかりとしたコクのあるタイプが合う。上面発酵のエールビールなどもお薦めだ。

ブラックのボディにリアルメタルが採用された風格のデザイン。醸造タンクからインスパイアされたという、美しいフォルムのビアサーバーは、カウンターやテーブルに置いてある、ただそれだけで心が満たされそうだ。ビールを飲むことよりも注ぐことに情熱を傾けたくなるという新しい体験。ふわふわの泡を唇で感じながら、ひと口ひと口を確かめるように飲みたくなるという味わい方。好きな音楽でも楽しみながら、この一杯をぜひ。

●＜BEERGO（ビアルゴ）＞お客様ダイヤル ☎0570-057-880

pen

with New Attitude

エンリコ・ベルナルド ソムリエ

従来のワインの常識を覆して、シルバーのグラスを生み出した。

27歳で、世界最優秀ソムリエに史上最年少で選ばれ、注目を集めたエンリコ・ベルナルド。パリのフォーシーズンズホテル ジョルジュサンクのレストランのシェフソムリエを務め、その後自身のワインレストランをオープンするなど、華麗なキャリアのもち主だ。

このほどフランスの高級銀器メーカー「ピュイフォルカ」と、テイスティンググラス「ソムリエ」コレクションを開発。シルバーはワインの味を変化させるため、グラスに用いるのはタブーとされてきた。それを解決したのが、ステムを排し、シルバーの台座に直接グラスを載せるというアイデアだ。

「ソムリエコンクールの準備期間、年に1万本のワインを試飲することを10年続けていました。その時、グラスの持ち方で味わいが異なることに気づいたのです。以来、グラスの底を持つ時と、ステムを持つ時の2度味わう訓練をしてきました。今回、ステムのないグラスという画期的なグラスを思いついた背景には、こうした経験があります」

ステムを持つよりグラス底部を持つほうが、傾ける角度が小さく、ワインが口の中にゆるやかに広がるため、甘みややわらかさを感じるという。こうして出来上がったのは、薄く繊細なガラスと光を反射させるどっしりとしたシルバーの台座がモダンなコントラストを生む、これまでにないグラス。テイスティングのデモンストレーションでは、美しくエレガントな所作に目を見張った。

「光の反射が美しいグラスなので、小規模なブティックレストランでロマンティックな食事を楽しむ時にぴったりです」

いまでも毎日10〜15本は試飲するというベルナルド。「プライベートではもっと。というのは冗談ですが、バカンスでクロアチアの友人を訪ねた時も、ランチとディナーに赤白2本ずつ空けました」。サービスのプロである一流のソムリエらしい、場を和ませる微笑が印象的だった。



Enrico Bernardo

1975年イタリア・ロンバルディア地方生まれ。2004年世界最優秀ソムリエコンクール優勝。フォーシーズンズホテル ジョルジュサンクのシェフソムリエを経てレストランを開店。ワインコンサルタントも務める。

photograph by Yasuyuki Emori(Bernardo), Kaku Ohtaki(Weinstock)　text by Chisa Sato(Bernardo), Kimiko Anzai(Weinstock)



Sylvia Weinstock

1930年生まれ。ニューヨーク在住。国際的にケーキ職人として活躍、顧客にはケネディ家も。3人の娘たちのウェディングケーキも手がけた。「今後はアジアに進出したい」と意欲的。"生涯現役"がモットー。

シルビア・ワインストック ケーキデザイナー

美しいアニバーサリーケーキで、人々の門出を祝福したい。

今年9月、「アンリ・シャルパンティエ」からアニバーサリーケーキの新しいブランド「アンリ＆シルビア」が誕生した。シュガーフラワーが印象的な、華やかで美しいケーキだ。デザイナーはニューヨークを拠点に活躍し、ハリウッドセレブや世界のロイヤルファミリーなど、多くの著名人のためのケーキを手がけてきたシルビア・ワインストック。アジアへの進出は初めてだという。

今年で86歳という彼女のキャリアのスタートは遅く、52歳で乳がんを患ったことが人生を見つめ直すきっかけとなった。「なにか一生をかけてできる仕事を」と得意だったデザートづくりを始めたところ、フードストアを営む友人が彼女の美しいケーキを気に入り、ショーウィンドーにディスプレイ。以後、その美しさとおいしさは口コミで広がっていった。そしてまた、別のケータリング会社に彼女が提供していたケーキが有名ホテルの担当者の目に留まり、ホテルでの販売へと発展した。華やかで存在感のあるケーキは話題となり、ロバート・デ・ニーロやジェニファー・ロペス、ラルフ・ローレンなど、セレブたちからの注文も殺到した。

「初めてケーキをオーダーしてくれたセレブはオノ・ヨーコだったわ。息子さんのバースデーケーキよ。嬉しかったわ」

そう言って笑う彼女からは、年齢を感じさせない軽やかなパワーが伝わってくる。いまでも仕事の速さには定評があり、5段ケーキのシュガーフラワーの飾りつけも1時間かからないという。

「アニバーサリーケーキは、私にとっての誇りなの。日本では、ケーキ入刀は新郎新婦の初めての共同作業と言われるでしょう？アメリカも同じ。ここから、彼らの新しい人生がスタートする。その瞬間を私のケーキが彩っているかと思うとワクワクするわ。私は、彼らの新しい人生、新しい生命の"種"を蒔いている。そう信じているの」

肉厚の傘と茎から、滋味豊かな旨味が滲む。

宇田川 淳・写真 photographs by Jun Udagawa　笠木恵司・文 text by Keiji Kasaki
廣松真理子・フードコーディネート food coordinate by Mariko Hiromatsu

長崎県・南島原産 肉厚生しいたけ



長崎県南島原産の「しあわせしいたけ」。傘の直径が8〜10㎝前後とジャンボサイズの生しいたけ。水分を抑える独自の栽培法で育成。収穫の際にも重ねることなく、一枚ずつをていねいにカゴに並べるという。

キノコは秋を彩る味覚のひとつであり、中でもしいたけは日本を代表する食材だ。その証拠に英語やフランス語に固有名詞はなく、「シイタケ・マッシュルーム」などと呼ばれる。

干した乾物が通年で出回っており、ダシ取りや煮物などでお馴染みの食材だけに、単体で主役を張れるとは思えなかったが、そんな先入観を気持ちよく裏切ってくれたのが長崎県南島原産の「しあわせしいたけ」だ。

アワビのような、繊細で特有の歯応え。

なにしろ傘が度外れて大きく、直径は8〜10㎝。厚みもボリューム感たっぷりで、重量は通常の2〜3倍に達するという。生しいたけの「旬」は9〜11月と春先と意外に短いので、こうしたジャンボしいたけに出会う機会も必然的に乏しいのかもしれない。

それを調理するレシピは「しいたけのステーキ」。あやかり的な偽名ではなく、まさにそう呼ぶにふさわしい重厚な仕上がりになっていた。今回は蒸し焼き段階でヱビスビールを加えてコクと風味を増しており、醤油とバターの焼けた香りが食欲を刺激する。

しなやかな弾力をもつ肉厚の身を噛みしめると、滋味豊かな旨味が口の中いっぱいに滲み出てくる。この食感はなにかに似ていると記憶をたぐってみて、アワビに似ていることに気付いた。まさにそう思わせる、キメ細かで密度の高い肉質の歯応えなのである。

この特別なステーキには、やはりキメ細かでまろやかなヱビスビールがよく似合う。今年の春にクオリティアップされて、コクがさらに進化。フルーティな香味バランスが向上したことで、鼻から抜けて広がるヱビス香もより華やかになった。秋の夜長の涼やかな気候を、ヱビスビールとともに満喫していただきたい。

お取り寄せ情報

長崎県南島原市のサンエスファームでは、農薬を使わず、雲仙山麓の綺麗な水で育てた肉厚の生しいたけ「しあわせしいたけ」を生産。鮮度・厚みや形状などを厳選。旨味が凝縮され、傘もプリプリで弾力がある。15枚を1セットとして冷蔵で配送。時期によって商品が限られることもあるので、詳細はお問い合わせを。九州ムラコレ市場 http://qmura.jp/ichiba/sanesufarm/

しいたけのステーキ

材料（2人分）

しいたけ／6個
オリーブオイル／大さじ1
バター／約10g　塩・コショウ／適量
醤油／大さじ1/2
ヱビスビール／大さじ2
パセリ／適量　レモン／適量
トレビス／適量　クレソン／適量

つくり方

1 しいたけは石づきを取り、軸に十文字の切り込みを入れ、傘に格子の切り込みを入れておく。
2 フライパンにオリーブオイルを熱して、しいたけの傘のほうから焼いていく。
3 裏に汗をかいてきたら、返してヱビスビールを加え蒸し焼く。
4 バター、醤油を少し焦がすようにして全体をからませて、塩・コショウで味を調える。
5 器に盛り付けて、パセリのみじん切りをかけ、トレヴィスとクレソンを添え、レモンを搾っていただく。

ソニー 4Kブラビア

テレビの壁掛けという、新たな空間設計。

空間づくりにおいて壁面を有効活用できると、より自由度が高まる。壁掛けに適したソニーの4Kブラビアなら、思い描いていた理想の住空間を創出できるだろう。

星 武志・写真 photographs by Takeshi Hoshi 高野智宏・文 text by Tomohiro Takano 窪川勝哉・スタイリング styling by Katsuya Kubokawa



リビングルーム×「X9300D」65V型

厚さ約37㎜の4Kブラビア「X9300D」なら、壁掛けスタイルにすることで65インチの大型モデルでも、すっきりとした空間演出が可能に。大型のフロアライトやグリーンの配置も思いのままだ。55V、65V型をラインアップ。オープン価格。

erbaのソファ「オーロラ」￥878,000／IDC OTSUKA ☎03・5530・5555 COMPLEX UNIVERSAL FURNITURE SUPPLYのコーヒーテーブル「CATHEDRAL LOW TABLE」￥165,000／コンプレックス ☎03・3760・0111 フロスのフロアライト「Spun Light F」￥270,000／日本フロス ☎03・3582・1468 違い棚上段のキャンドルホルダーゴールド「TEA LIGHT」￥20,520／フリッツ・ハンセン青山本店 ☎03・3400・3107 同じくキャンドルホルダー「Up and downキャンドルスタンド」（小）￥5,900、（大）￥6,900／ともにBoConcept南青山店 ☎03・5770・6565

住まいを考える上で、限られたスペースを有効活用し、デザイン性と居心地のよさを追求することは永遠のテーマといえるだろう。部屋の印象を決めるインテリアとして、サイズ的にも大きな比重を占めるのがソファやテーブル、照明などの家具だが、それに加えて大型化が進むテレビは、AVラックを含めるとその存在感が空間に圧迫感をもたらしかねない。

そこで提案したいのが、テレビの壁掛けスタイル——。空間のデザイン性を向上させるとともに、スペースの有効活用を図り、テレビを住空間に溶け込ませるという考え方だ。

空間に合わせて設計する、2つの壁掛けスタイル

リビングルームのような空間で、壁掛けスタイルとしてもお薦めしたいテレビといえば、ソニーの最新4Kブラビア「X9300D」がその筆頭。55、65インチの大画面にして厚さ約37㎜と非常に薄型なのが特長だ。

また一般的な壁掛けテレビの場合、本体と壁掛け金具双方の厚みによる奥行きが圧迫感を与えてしまうものだが、この「X9300D」は別売りの専用壁掛けユニットを用いて、壁から



ベッドルーム×「X8300D」43V型

ブラックのほかに、ブラス（真鍮）の色みを加えたウォームシルバーの2モデルを展開する4Kブラビア「X8300D」。温もりを感じさせるカラーリングが、寝室など穏やかな色調のプライベート空間をスタイリッシュかつ優しく彩る。43V、49V型をラインアップ。オープン価格。

フリッツ・ハンセンのラウンジチェア「スワン」¥1,010,880、サイドテーブル「リトルフレンドサイドテーブル」¥164,160、ベッドいちばん上のスロー「THROW」¥69,120／すべてフリッツ・ハンセン青山本店 ☎03・3400・3107　アートパネル「Canyon」¥45,900／BoConcept南青山店 ☎03・5770・6565



テレビ前面まで奥行きのない壁掛けスタイルを実現すべく設計された、先進のコンセプトモデルなのだ。

薄型ボディと極細のベゼル、そしてこだわりの高画質がもたらすのは、かつてない映像への没入感。壁と一体化し余裕ある空間を創出しつつ、極上の映像美を描き出す、リビングにおけるテレビの理想形といえるだろう。

また空間を創出したい場所は、リビングだけにとどまらない。ベッドがスペースの大半を占める寝室など、プライベート空間でも壁掛けは有効に働く。

ただし空間に合わせたサイズ感で、壁掛けに適したテレビを選ぶことが重要になる。4Kブラビア「X8300D」も壁掛けに適した最新モデル。ベッドルームでの使用にちょうどいい43、49インチがラインアップされており、フレームもブラックとウォームシルバーの2色から選ぶことができる。

特にブラス（真鍮）の色みを加えたことにより、温かみのある色に仕上げられたウォームシルバーは、オフホワイトや木目調との高い調和を実現。実際に壁掛けにしてみると、ウォームシルバーのフレームがオフホワイト系の壁に溶け込み、まるで浮き出ているかのような臨場感あふれる映像を楽しむことができる。壁紙やインテリアに合わせてフレームカラーを選べるのも、視覚的な効果で空間のゆとりを演出することにつながるのだ。

限りあるスペースを有効活用し、いかに快適で理想的な空間づくりを行うか——。テレビの壁掛けスタイルは、そのひとつの現実的な解決方法といえるのではないだろうか。

●問い合わせ先／ソニー 買い物相談窓口 ☎0120・777・886　www.sony.jp/bravia

世界への道を照らす、伝承の道具たち。

大河内 禎・写真 photographs by Tadashi Okochi　高野智宏・文 text by Tomohiro Takano

ウィンドサーフィン競技でシドニー五輪の強化選手にも選ばれた廣瀬雄一さん。しかし、若いうちから修業を始めることをよしとする職人の世界。「先代からの薦めもあり、大学4年で引退し家業を継ぎました」と振り返る。

生家は1918年創業と約1世紀の歴史をもつ、江戸小紋専門の「廣瀬染工場」。染師となり16年。現在は、四代目として現場を取り仕切る。

武士の裃に施された極細の文様をルーツとする江戸小紋。制作する生地の多くは着物用だが、一方でモダンなストールブランドの展開や欧米での展示会への積極的な出展など、江戸小紋の新たな可能性を模索し続けている。

「江戸小紋は染師と型紙職人双方の技術があってこそ成り立つもの。一流の型紙職人は、一寸（3・03㎝）四方に800もの孔を正確無比な配列で彫る技術をもちます。そんな達人でも仕事がないという現状が悔しいですね」

産業の縮小化とともに廣瀬さんを悩ませるのが、染師特有の職業病だ。「作業はほぼ中腰のため、すべての職人が腰を悪くする。私も昨年、3カ月間仕事ができず辛い思いをしました」

そんな、失意の廣瀬さんを救ったのが型紙をはじめとする、初代から代々受け継がれてきた道具たちだった。「先達たちもあらゆる苦境を乗り越え、伝統と技術を守り続けてきた。そんな先達の想いを宿すこの道具たちが、私を奮い立たせてくれるのです」

目指すは「自らが染めた生地が、一流ブランドのオートクチュールに使用されること」と廣瀬さん。ウィンドサーフィンでは断念した世界への夢を叶えるべく、若き染師の挑戦は続く。



江戸時代のものを含む約4000点の伊勢型紙をはじめ、敷板に糊を塗る金繋や生地に糊を載せるヘラなど、初代から受け継がれてきた大切な道具たち。セブンスターも、挑戦を止めない男の人生の傍らにいる心強い相棒であり続ける。

セブンスター タール14mg ニコチン1.2mg

想像力を纏わせる、バーバリーの魔法。

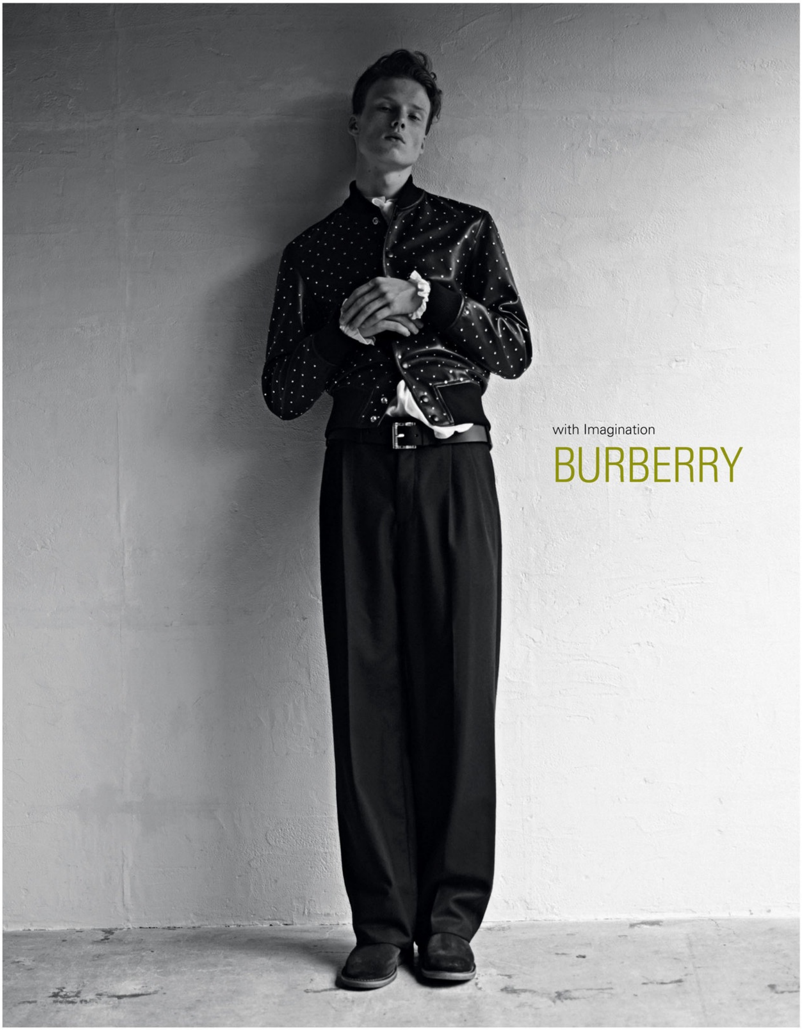
女性作家ヴァージニア・ウルフによる、ジェンダーや年代をテーマにした小説にヒントを得た今季のバーバリー。ジェンダーレスな、優しい紳士像が完成した。

福原祐二(eight peace)・写真
photographs by Yuji Fukuhara
小野田 史・スタイリング
styling by Hitoshi Onoda
馬場拓也(SEPT)・ヘア
hair by Takuya Baba



定番のスウェットは、デコラティブに遊べ。

同素材の帯が両腕と腰回りを絞るようにデザインされた、ユニークなスウェットシャツ。腕にはさらにスタッズが施されている。中世ヨーロッパを思わせるデコラティブなディテールを、カジュアルに落とし込んでノーブルに。スウェット¥92,880、シャツ¥92,880、5ポケットデニムパンツ¥73,440(すべて予定価格)／すべてバーバリー(バーバリー・ジャパン)

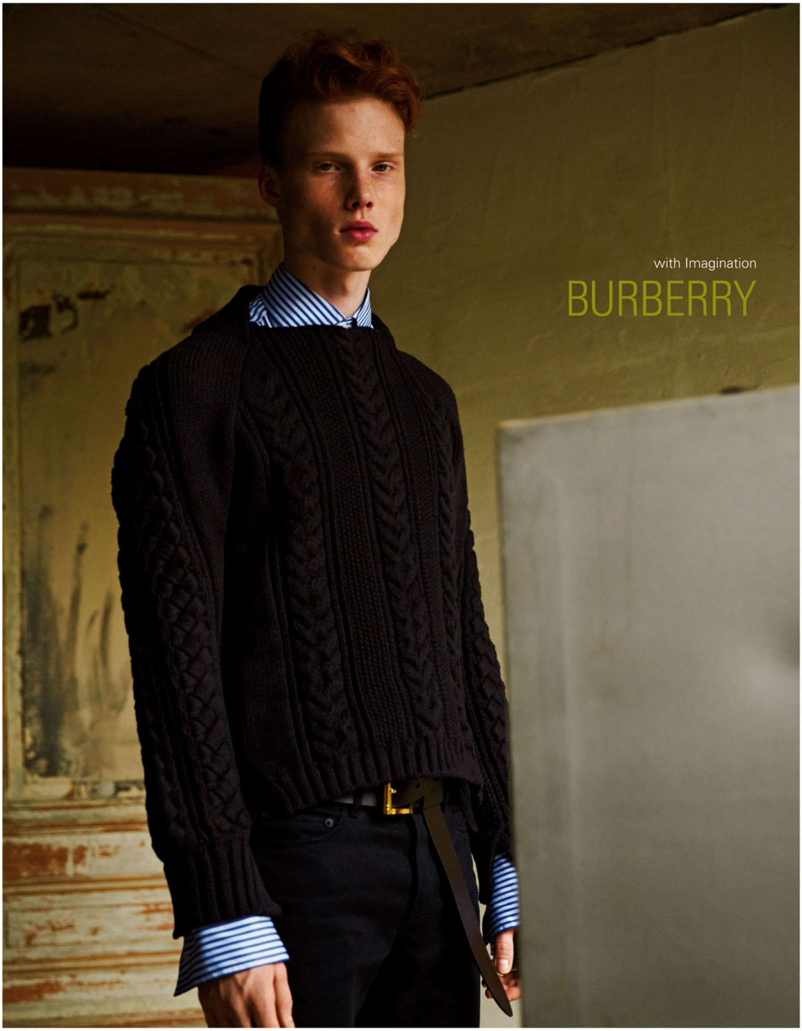


with Imagination

BURBERRY

ハードな味つけが効いた、水玉ライクなブルゾン

一見、水玉のかわいらしいブルゾンに見えるが、実はスタッズがドット状にあしらわれた、ハードな味わいのレザーブルゾン。首元や裾からはフリルをのぞかせ、パンツはワイドというバランスも絶妙だ。レザーブルゾン¥496,800、プルオーバーシャツ¥73,440、パンツ¥108,000、ベルト¥39,960、サイドゴアブーツ¥77,760（すべて予定価格）／すべてバーバリー（バーバリー・ジャパン）



with Imagination

BURBERRY

ディテールに潜む仕掛けが、モードな感性を呼び覚ます。

フィッシャーマンセーターを思わせる肉厚なケーブルニット。加えてボートネックや網目模様は、ほかでは見ないユニークなつくりだ。定番のアイテムをさりげなくモードに昇華させ、独自の世界をつくりあげている。ニットセーター¥183,600、シャツ¥64,800、5ポケットデニムパンツ¥73,440、ベルト¥39,960（すべて予定価格）／すべてバーバリー（バーバリー・ジャパン）



やわらかに纏う、紳士のベルベット

目の詰まった上質なベルベットが醸す、重厚な質感。それだけで色気のあるコーディネートが完成するジャケットを、コットンガーゼの軽い質感が対照的なフリルのシャツと合わせ、優しくやわらかな、現代の紳士像を描く。6ボタンブレザージャケット¥183,600、プルオーバーシャツ¥73,440（すべて予定価格）／すべてバーバリー（バーバリー・ジャパン）

●バーバリー・ジャパン
☎0066·33·812819



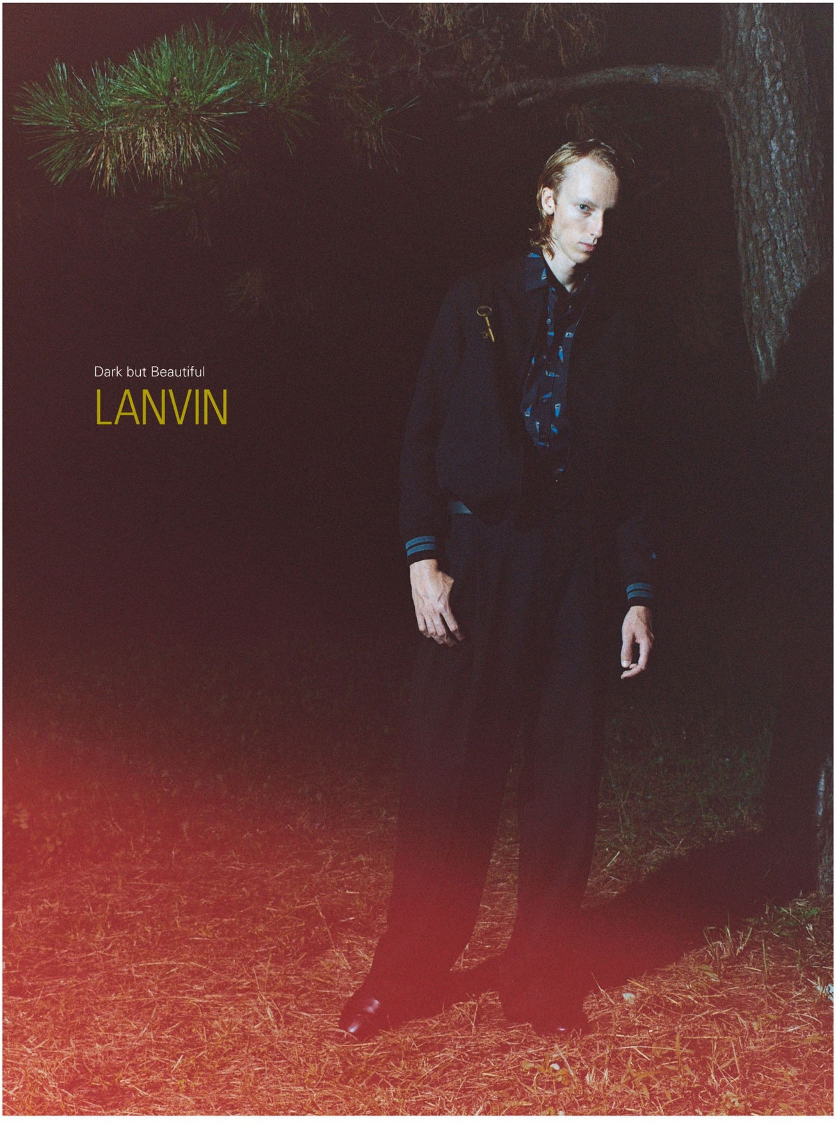
存在感は十分、風格漂う味出しミリタリー

スモーキーグレーのコートはミリタリーをベースにしており、ヴィンテージ加工を施した素材使いの妙が光る一着。ワイドフォルムの襟と、中にリュクスなファーをあしらった重厚感あるデザインが秀逸。個性を感じる柄シャツも同色で合わせて、スタイルに統一感を。コート¥1,966,680、シャツ¥116,640／ともにランバン(ランバン ジャパン)



ダウンコートを、モード/ストリートにこなす。

ビッグシルエットが際立つキルティングのダウンコートは、肩と脇にシルエット調整を可能にするアジャスターをセット。トップとボトムはモードなブラックを基調にし、インナーはリメイク風のジージャンを合わせてマスキュリンなスタイルに。コート￥492,480、ジャケット￥142,560、パンツ￥124,200／すべてランバン(ランバン ジャパン)


Dark but Beautiful
LANVIN



追憶のしじまに探す、
男のエレガンス

高貴さと品格を感じるベルテッドのロングコートは、中をシャツ×ニットのレイヤードで仕立てて、少しルーズな着こなしに。ロングコートのシルエットは、ボリュームのあるフォルムとなっており、その美しき生地のドレープ感を満喫したい。コート¥660,960、シャツ¥138,240、中に着たニット¥152,280／すべてランバン（ランバン ジャパン）

闇に包まれた黒を、アンバランスに遊ぶ。

右ページ：カジュアルなブルゾンもノーカラーでタイトなシルエットを選べば、大人仕様に早変わり。タック入りのワイドなボトムを合わせて、アンバランスなセットアップスタイルに。色柄で遊べるシャツをインナーに添えて。ブルゾン¥320,760、シャツ¥71,280、パンツ¥133,920、ベルト¥74,520、靴¥95,040／すべてランバン（ランバン ジャパン）

●ランバン ジャパン ☎03-4500-6172

感覚と精神を呼び覚ます、エルメスのオブジェ

エルメスのホームコレクションに「エキリーブル・ドゥ・エルメス（エルメスの均衡）」が新登場。卓越した職人技で異素材を絶妙に組み合わせた、ピュアなフォルムのオブジェに注目してほしい。

宇田川 淳・写真
photographs by Jun Udagawa

メープル材のフレームにブラウンのレザーコードを編み込んだオブジェ。綿密に計算され描かれたデッサンと、製作に欠かせない卓越した職人の技が潜んでいる。異素材を組み合わせることで誕生する、感覚と精神を呼び覚ます“ミニマルなかたち”が美しい。「トロン編みバスケット」（H33×径28㎝）￥990,360／エルメス（エルメスジャポン）



Brand Selection

HERMÈS



馬具工房から始まったエルメスというメゾンを象徴するアイテム、乗馬の鞍をモチーフにしたオブジェ。素材は堅牢なメープル材とトリヨンアッシュ（レザー）。フレームとレザーパーツはともにワンピース仕様なので、組み立て方もいたってシンプルだ。「マガジンラック」（H55×W31×L55㎝）￥2,829,600／エルメス（エルメスジャポン）



1

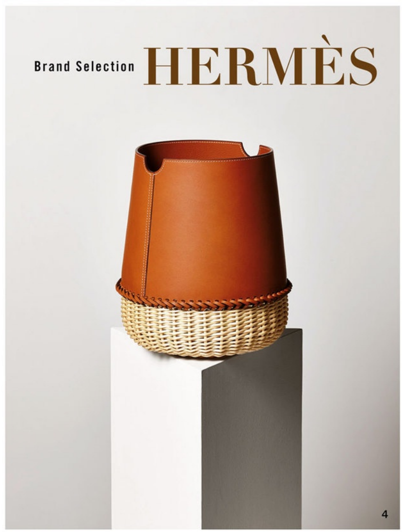


2



3

Brand Selection HERMÈS



4

1.「エルメスの均衡」を象徴するオブジェ。素材は真鍮とトリヨンアッシュ。「ルーペ」(H15×W7×L24㎝)¥238,680　2.正20面体は、古代ギリシャ時代から“プラトンの立体”の名で知られる5つの多面体のひとつ。素材はトリヨンアッシュ。「ペーパーウェイト 20面体」(H15㎝)¥707,400　3.何重にも重ねたレザーを削り出し形づくられる、高度な職人技を用いている。素材はヴァッシュ・ハンター(レザー)とブナ材。「コマ」(H8×径7㎝)。各¥129,600　4.異素材同士の調和と遊び心が生み出すピュアなフォルム。素材はトリヨンアッシュと柳細工。「バスケット」(H30×径25㎝)¥530,280／すべてエルメス(エルメスジャポン)

Photos: Carole Bellaïche



2人のディレクターが語る、ホームコレクションの美学。

アレクシィ・ファブリ
ALEXIS FABRY
アーティスティック・ディレクター

●1970年パリ生まれ。2003年、グラフィックデザイナーのオリヴィエ・アントレオッティとともに写真、文学、デザイン分野の出版社設立。コンスタンティン・グルチッチ、ジャスパー・モリソンなどと協働。14年11月から現職に。

シャルロット・マコー・ペレルマン
CHARLOTTE Macaux PERELMAN
アーティスティック・ディレクター

●1971年パリ生まれ。フィリップ・スタルクのもとでキャリアをスタート。2000年よりデイヴィッド・ロックウェルのアソシエートに。14年11月、エルメス ホームコレクションなどのアーティスティック・ディレクターに就任。

馬具づくりから始まったエルメスのクリエイションにおいて、いま最も飛躍を感じさせるのが、ホームコレクション。指揮を執るのは2人のアーティスティック・ディレクターだ。

ひとりは、建築家・デザイナーのシャルロット・マコー・ペレルマン。もうひとりは、展覧会のキュレーションで名を馳せるアレクシィ・ファブリ。2014年、同時にアーティスティック・ディレクターに就任した2人のコラボレーションが、エルメスのモノづくりに新たな物語を書き加えることに。

シャルロットが説明してくれた。

「私とアレクシィの間に明確な役割分担はないの。お互いが意見を出し合い、異なる視点があり、最後は一致する」

対してアレクシィは「アーティスティック・ディレクターというのは編集者のようなものです」と語る。

エルメスには、ホームコレクションを手がけるデザインチームがいるし、外部のデザイナーに依頼することもある。「要はデザインを正しい場所に収めることが大切なんだ」とアレクシィ。

「まずデザイナーを決める。そして対話を重ね、デザイナーとのコラボを円滑に進めるのが我々の仕事」

ホームコレクションの新作の中でも、今回紹介しているオブジェの数々は、エルメスならではの上質さとユニークさが同居するものばかり。

アレクシィは控えめながらも言葉に自信を込めた。

「どれも見た目は非常にシンプル。だけど手の込んだつくりは、職人技の結晶です。まさにエルメスらしいといえるのではないでしょうか」

●エルメスジャポン ☎03·3569·3300

アイコニックな「G」が潜む、新しいグッチのスタイル

今年のバーゼルワールドで発表された、グッチの新しいウォッチ・コレクションがいよいよ登場。クッション形のケースを採用し、ベゼルの処理やダイヤルデザインが異なる2つのタイプを揃えた。

宇田川 淳・写真
photographs by Jun Udagawa
笠木恵司・文
text byKeiji Kasaki



メタリックな質感に、独特のインデックス

「GG2570」。美しい曲面をもつクッションケースがクラシカルな印象だが、ダイヤルに独特のインデックスを植え込んだ現代的で個性的なモデル。中央に段差を設けて周囲に目盛りを配置。その上段を「G」シャドウにアレンジしている。クォーツ、SS、ケース径41㎜、5気圧防水。￥129,600／グッチ（ラグジュアリー・タイムピーシズ ジャパン）

日常的に愛用する「普段使い」の時計選びは意外に難しい。予算に限度があるにもかかわらず、要求水準が高いからだ。品質や精度はもちろん、オンタイムからオフまで違和感がなく、誰もが知るブランドだがさりげなく、洗練された個性を備えていること……。

グッチは1970年代から時計を本格的に開発・製造しており、そうした要求のほとんどを満たしているが、新作の「GG2570」はとりわけ、「洗練された個性」に合致するのではないだろうか。クッションケースとも呼ばれるソフトなカーブのスクエアシェイプだけでも個性的だが、ディテールの処理を変えることで、表情が異なる2タイプのモデルを造形している。

右ページのメタリックなモデルは、ケース全体を優美な曲面で構成。都会的なエレガンスを感じさせる。それに対して左ページの2本は、ダークブルーのダイヤルに目を奪われるが、ベゼル表面部分はフラット。こちらはスポーティさをイメージしており、実はリューズの形状も微妙に違う。どちらもポリッシュとブラッシュの磨きを巧妙に組み合わせて立体感を演出している。

昨年からクリエイティブ・ディレクターに就任したアレッサンドロ・ミケーレによるデザインであり、モデル名の「25」は彼のラッキーナンバー。続く「70」はグッチが飛躍した1970年代にちなんだ。サンブラッシュ仕上げのダイヤルには、「G」シャドウを大胆かつ立体的にアレンジ。ほどよい重量感と質感が心地よい「普段使い」のパートナーとして、末永く使いこなせるのではないだろうか。



クールでスポーティな、ダークブルーダイヤル

ともに「GG2570」。サンブラッシュ仕上げのダークブルーのダイヤルに、立体的なバーインデックスを植え込んだモデル。ダイヤルの周縁を傾斜させて「G」シャドウをアレンジ。ともにクォーツ、SS、ケース径41㎜、10気圧防水。右：グッチカラーが鮮やかなNATOストラップ・モデル￥125,280　左：SSブレスレット・モデル￥129,600／ともにグッチ(ラグジュアリー・タイムピーシズ ジャパン)

●問い合わせ先／グッチ(ラグジュアリー・タイムピーシズ ジャパン)
☎03·5766·2030

Brand Selection

GUCCI



カーデザインの視点を取り入れ、生まれ変わった「STANDARD」



photographs by Jun Udagawa styling by Toshifumi Ishizeki text by Tomohiro Takano



シンプルな美しさを追求し、細部までリファインされた、知的さを宿すメタル製ボストンモデル。MMF-16A-185 95 ¥8,532（度付きレンズ代込み）

デザイン的なアプローチから「真に価値のあるアイウエア」を追求し、生み出し続けるプロジェクト「JINS DESIGN LAB.」。これまで鯖江の職人と協働した「meets Sabae」シリーズなどで好評を博してきた同プロジェクトの次なる試みは、ジンズの定番モデル32型128種類を、新たな「STANDARD」シリーズとしてリデザインするというもの。

その監修という大役を任されたのは、クルマを中心に数多のプロダクトを手がけてきた和田智氏。アウディ時代には日本人として初めて主力車種のデザインを担当した世界的デザイナーだ。

「目指したのは『真に美しい普通』。流れるようなハイライトなどカーデザインの視点を取り入れ、シンプルなラインで構成された美しいプロポーションを追求した」と和田氏は語る。なるほど、このモデルの流麗でいてけれんみのないデザインも、眼鏡の本質的な美しさを際立たせているではないか。

デザインのあり方を見直すことで新たに生まれ変わった「STANDARD」。真の美しさを纏う定番モデルのクオリティを、ぜひショップで確かめてほしい。

削ぎ落としたシンプルさと、磨きあげた美しさ。





ボリューム調整で獲得した、
最適なバランスと快適さ。

一見、きわめてクラシカルなデミ柄のボストンタイプながら、洗練さと快適性を追求し、随所に改良が施された。最大のポイントは重量バランス。よりシンプルで美しいフォルムを実現するため、フロントの厚みの変化を最小限にとどめるとともに、前後の重量バランスを整えるためテンプルのボリュームを若干増量。これにより前後バランスが改善、かけ心地が向上した。また、テンプル内側の段差をなめらかに調整することで、光の当たり方がスムーズになり、透過によるデミ柄の美しさを際立たせるなど、より豊かな表情を獲得している。

異素材がなめらかにつながる、
シームレスで美しいライン。

前モデルのヨロイ（智）に配されていた装飾的なデザインを取り除き、丁番やリムロックが上から見えないようデザインすることで、フロントとヨロイの接合をより洗練されたフォルムへと刷新。また、歪みやねじれのないテンプルラインに変更することで、全体的にシームレスで流線形の美しいラインが強調された。さらに、ボリュームあるテンプル（眼鏡のつる）とのバランスを取るべく、フロントリムの厚さを0.8㎜から0.9㎜へと微調整。都会的なデザインと快適なかけ心地を両立する、クールでスタイリッシュなモデルへと仕上げられている。



洗練をきわめたクラシックモデルが、秋冬の装いに軽快でカジュアルな雰囲気をもたらしてくれる。MCF-16A-187 86 ¥8,532（度付きレンズ代込み）



ビジネスシーンでクールな印象をもたらす、都会的なメタルのハーフリムモデル。MMN-16S-092 96 ¥8,532（度付きレンズ代込み）

JINS DESIGN LAB. × pen with New Attitude

アイウエアの未来をデザインしよう。





技術力がもたらした、すっきりとしたルックス。

フレームサイドに配置されていたリムロック（レンズ留め）をクリングス（鼻当て）と一体化した特殊機構の採用により、すっきりとしたフレームラインへとリファイン。ヨロイからテンプル、そしてモダンへと流れるようなフォルムを表現するため、モダンの合口にメタルパーツが配置された。さらに、フロントもレンズシェイプに沿った繊細なラインを描くことで、あたかも1枚のシートから切り出されたかのような一体感を得ることに成功。シリーズ随一のスマートさを誇る新たな定番モデルは、表情に都会的な印象をもたらしてくれる。

テンプルのハイライトが、横顔に色気をもたらす。

和田氏によるリデザインで大きなポイントとなったのが、クルマのボディのように美しく流れるハイライト。その特徴が最も顕著なのがこのモデルだ。前モデルのテンプルに配された装飾を排除し、また、ヨロイ裏の段差をなくすことで面の歪みがないなめらかで美しいフォルムへと修正。これにより、テンプル全体にハイライトが走り、その輝きはスムーズに流れるモダン（つるの先）へと収束する。フロントのカジュアルな表情は一変、サイドからはエレガントにと、見る角度でガラリと印象が変わる、なんとも色気のあるルックスへとリファインされた。



1枚のメタルシートから切り出されたかのような、流れるラインがスタイリッシュな1本。MMF-16A-181 94 ¥8,532（度付きレンズ代込み）



オンタイムはもちろん、パーティなどの装いにも映えるエレガントなモデル。MCF-16A-197 86 ¥12,960（度付きレンズ代込み）※11月下旬発売予定

●問い合わせ先／ジンズ　☎0120-588-418（10時〜17時　土日祝を除く）　www.jins.com

ISSEY MIYAKE WATCH

時計ファンを惹きつける、力強いフォルム

和田智デザインによる「ダブリュ（W）・オートマティック」は、ISSEY MIYAKEウオッチ・プロジェクトの新作。日本の誇る感性で磨かれた造形が、再び世界を魅了する。

並木浩一・文 text by Koichi Namiki　宇田川 淳・写真 photographs by Jun Udagawa

ISSEY MIYAKEウオッチ・プロジェクトは、腕時計への先入観を覆す傑作を生み続けてきた。その活動の中で初めてのウオッチ・デザインでも揺るがない才能を証明した、異分野からのデザイナーが和田智さんだ。アウディのデザインで世界に知られた和田さんの第2作「ダブリュ（W）・オートマティック」が、もう一度その確かなかたちを世に送り出す。

より鮮明に表現された、腕時計の原点への回帰。

前作「W」で世界を瞠目させたのは、まっすぐなセンシビリティだ。和田さん自身も否定しない日本的な感性が、力強く美しい造形に結実した。そして再び腕時計に立ち向かい、さらに「腕時計らしいもの」の原点へ回帰する。

かさ高い機械式のエンジンを積み、10気圧の防水性を確保することにより、造形的には制約を受けることになる。しかし「W」は、その条件を逆に利用した。大きくなり、重量が増すことであり、機械式腕時計本来の姿に戻ることでもあり、腕時計らしい姿が立ち上がる。その形象のダイナミズムを抑えず、積極的に受け止めた。それどころか、回転ベゼルの外縁など、あえてゴツゴツとした、確かな質感と触感を求めた。

安易ですべすべとした滑らかさと訣別することは、腕時計のゼロ座標に帰還するための、デザインの意思である。一方で、節に向かってしなる竹のような逆Rの曲面をもつ、卓抜なケースの輪郭は堅持した。自然のインスパイアを金属に変換することで得られた初めてのフォルムは、少しもぶれることなく、再び「W」の意思を表象する。文字盤には、タフな防水性能を得た「ダブリュ（W）・オートマティック」の存在証明と意思表明が浮かび上がる。天を指す矢印を戴く円形の平面は、伝統的な羅針盤の心象に行き着くものだ。古い帆船であれ現代の飛行機であれ、およそ海を越えることへの憧憬が、目盛りと数字のロマンに映し取られた。

腕時計らしさを求めることは、既存のカテゴリーに沈むのではなく、日々着けるに相応しいものを生み出すことだった。いつか巡り合っていたような既視感を潜ませ、その時計は時空を超えた憧憬の記憶を起動する。科学への憧れ、将来への希望、まだ所有できなかった腕時計。美しい過去から眺めたもうひとつの未来に「ダブリュ（W）・オートマティック」は重なる。どこかにあると信じた未知のものにだけ、その腕時計は似ているのである。



自動巻き、SS（硬質コーティング）、ケース径45㎜、デイデイト、ウレタン製バンド、10気圧防水。￥76,680（NYAE003）



自動巻き、SS（硬質コーティング）製ケース／バンド、ケース径45㎜、デイデイト、10気圧防水、限定200本。￥87,480（NYAE701）



自動巻き、SS、ケース径45㎜、デイデイト、ウレタン製バンド、10気圧防水。￥73,440（NYAE002）





機械式ムーブメントのバランスホイールの動きが小窓から見ることができる、シースルーバック仕様。

新作「W automatic」の発売を記念して、全国の時計専門店TiCTAC（一部店舗除く）にて、10 月15 日（土）から“イッセイ ミヤケ ウオッチ”フェアを開催。新作モデルを手に入れるチャンスだ。

どこまでも力強い、ケースの造形美。

しなる曲面をもつ「W」譲りのケースフォルムを活かし、ソリッドな逆回転防止ベゼルを纏わせた。外周の4分の1に刻まれた凹凸の触感とクリック音、緻密な赤目盛りの視覚効果など、時計らしい魅力が際立つ。自動巻き、SS、ケース径45㎜、デイデイト、SS製バンド、10気圧防水。￥84,240（NYAE001）

磨きに磨いた普通さは、原点回帰のひとつの原理。

腕時計ジャーナリストの並木浩一さんが「ダブリュ（W）・オートマティック」を手がけたデザイナーの和田智さんに、デザインのこだわりなどを訊いた。

スムーズな触感よりも、存在を感じるものを。

並木　新作は「W」よりも腕時計らしさを強めたという理解でいいですか。

和田　〝毎日できる時計〟というのが「W」の始まりなので、原点回帰した、ということですね。時計は時計らしく、時計らしいとはどういうことかと考えていったわけです。そこには〝新しさ〟を絶対視することへの疑問が生じてきます。逆に、磨きに磨いた普通さは、きっと新しい。それが原点回帰のひとつの原理でもあるのかなと。

並木　初の機械式腕時計というのは、いいきっかけだったのでしょうか。

和田　（手に取って）これ以上小さくもできないし、ある程度重くなってかまわない。海でスポーツもできる腕時計ですから、ガラスも厚いのです。そうした状況を繰り込んだウオッチの手触りは、スムーズな触感というよりは、非常に存在を感じられるものであるはずなのです。ゴツゴツしていて、ベゼルを回すとアナログな音がする。そういった〝当たり前〟を意識しました。

並木　デザインをする上で、特に意識したこと、影響を受けたものは。

和田　「その一見、硬質にみえる造形の



並木浩一
Koichi Namiki
腕時計ジャーナリスト／桐蔭横浜大学教授

●1961年生まれ。腕時計に関する取材歴は20年超におよび、著書に『腕時計一生もの』『腕時計のこだわり』など。出版社に勤務し『TVステーション』編集長などを歴任の後メディアと表象文化論の研究職に転じ、博士号を取得し現職。

和田 智
Satoshi Wada
カー&プロダクトデザイナー

●1961年生まれ。日産自動車から独アウディAG／アウディ・デザインへ移籍、シニアデザイナー兼クリエイティブマネジャーとしてA5、A6、A7、Q7、A1など主力車種を担当。2009年に独立「SWdesign」を設立。

背後にある叙情性」。1964年の東京オリンピックでエンブレムをデザインした亀倉雄策さんを、田中一光さんが評した言葉です。カタチを追い詰めていくと、叙情詩にすらなる。大先輩のこの素晴らしいニュアンスを伝えていかなければ、という使命感のようなものを感じます。できるならば「W」「ダブリュ（W）・オートマティック」をその第1節、第2節としておくことができないだろうかという問題意識が、自分自身にもあったわけです。

並木　具体的なデザインの戦略でいうと、どのように落とし込もうと。

和田　九鬼周造さんの言う〝粋〟。垢抜けていて、張りのある艶っぽさのようなものを、造形家として表現するということでしょうか。欧州の人が言う〝エレガンス〟を日本語にするならば〝情緒〟に一番近いと感じていました。たとえばこの回転ベゼルを回した時に、自分の人生が戻っていくような感覚。カチカチという音とともに過去の自分を思い浮かべるロマンがあってもいい。文字盤デザインは羅針盤に準えていますが、衛星が周回するようなイメージも込め、赤い数字は分度器の印象でもあります。数学的で論理的なものと、〝スピリット〟が重なる。彫刻的な立体が、叙情的で詩的。そうした矛盾を呑み込んでこそ、過去・現在・未来をつなぐような感性の腕時計になるのでは、と思うのです。

Creator's file アイデアの扉

笠井爾示(MILD)・写真
photograph by Chikashi Kasai
細谷美香・文
text by Mika Hosoya

言語と身体を起爆させ、新たな映画表現に挑む。

山戸結希 Ū-ki Yamato

映画監督

●愛知県生まれ。上智大学在学中に映画研究会を立ち上げ、独学で撮影した処女作『あの娘が海辺で踊ってる』で脚光を浴びる。2015年、第24回日本映画プロフェッショナル大賞新人監督賞を受賞。16年には乃木坂46のミュージックビデオ「ハルジオンが咲く頃」の映像監督を務める。

アイドルを夢見る女の子が主人公の、『あの娘が海辺で踊ってる』が大学時代の処女作ながら劇場公開され、『5つ数えれば君の夢』では、渋谷シネマライズで公開された作品の監督最年少を記録。『おとぎ話みたい』はテアトル新宿のレイトショー観客動員を13年ぶりに更新し、山戸結希は20代にして既に、いくつもの〝伝説〟を生んでいる気鋭の映画監督だ。彼女がつくり出す映画には、刹那を生きる少女の切実な叫びが狂おしく刻まれ、新作を発表するごとに熱い信奉者を生んできた。

「大学で映画研究会を立ち上げた時も20人ほどの女子に囲まれていましたし、アイドルのミュージックビデオを撮るという機会にも恵まれました。近い存在である女子の身体を撮ってきましたが、普遍的な人間像を描きたいという思いはいつもあります」

彼女の唯一無二の感性は、詩のような言葉たちが役者の身体を通して起爆し、切り結ぶ瞬間に宿っている。その個性は、大学で哲学を学んでいたという経歴をもつが故に生まれたものかもしれない。デジタルカメラで撮られた作品に衝撃を受け、直感に導かれて映像の道へと進み、自ら映画を撮り始めて「言語によって抑圧されていた自分」に気づいたのだという。

「私が脚本に書いた言葉を役者という他者が物語ることで、出てくるものがある。その多重性を感じた時、映画をつくる面白さを実感したんです。フィクションのもつ飛躍の力に私自身の言葉が救われている感覚があります」

最新作は監督自身が愛してやまない同名コミックを映画化した『溺れるナイフ』。少女を描いてきた監督が、少年の内面に寄り添いながら「いつか男性を偶像的に、フォトジェニックに撮りたいと思っていた」という願いをかなえた作品だ。

そしてこれは、日本映画を牽引する若き役者と職人的な一流のスタッフとともに、映画という表現に妥協なく挑んだ格闘の記録でもある。

「なぜこのカットが私にとってNGなのか、言葉では説明できないけれど、どうしても譲れない時が何度もあって。その時、監督とは無根拠なことへの信仰心を炎のように感染させる状況をつくる存在であらねばならないのだ、と感じたんです。映画は集団で製作するものだからこそ、自分の目で見たことを大切にして進んでいきたい。そう強く思っています」

WORKS



ジョージ朝倉の少女コミックを実写化。『溺れるナイフ』。11/5よりTOHOシネマズ渋谷ほかにて全国ロードショー。配給：ギャガ



時代の息吹を感じさせる音楽も山戸監督作に欠かせない要素。青春映画『おとぎ話みたい』は、11/3にBlu-ray & DVDが発売。



pen

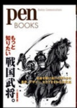
with New Attitude

pen BOOKS

クリエイティブな教養人は読んでいる!

『Pen』で好評を博した特集・連載の書籍化。**ペンブックスシリーズ**

ペン・ブックス 好評既刊



『もっと知りたい戦国武将。』
ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-10202-3

『ルーヴル美術館へ。』
ペン編集部[編]
定価 本体1600円(税別)
ISBN978-4-484-09214-0

『ルネサンスとは何か。』
池上英洋[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1800円(税別)
ISBN978-4-484-12231-1

『茶の湯デザイン』 7刷
木村宗慎[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1800円(税別)
ISBN978-4-484-09216-4

『ロシア・東欧デザイン』
ペン編集部[編]
定価 本体1700円(税別)
ISBN978-4-484-13226-6

『1冊まるごと佐藤可士和。[2000-2010]』
ペン編集部[編]
定価 本体1700円(税別)
ISBN978-4-484-10215-3

『恐竜の世界へ。ここまでわかった! 恐竜研究の最前線』 2刷
真鍋 真[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1600円(税別)
ISBN978-4-484-11217-6

『イスラムとは何か。』 2刷
ペン編集部[編]
定価 本体1600円(税別)
ISBN978-4-484-13204-4

『神社とは何か? お寺とは何か?。』 10刷
武光 誠[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-09231-7

『神社とは何か? お寺とは何か?。2 必ず訪れたい寺社巡りガイド』
ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-12210-6



『美の起源、古代ギリシャ・ローマ』*
ペン編集部[編]
定価 本体1900円(税別)
ISBN978-4-484-14225-8

『パリ美術館マップ』
ペン編集部[編]
定価 本体1600円(税別)
ISBN978-4-484-09215-7

『ダ・ヴィンチ全作品・全解剖。』 5刷
池上英洋[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-09212-6

『江戸デザイン学。』 3刷
ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-10203-0

『千利休の功罪。』 4刷
木村宗慎[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-09217-1

『広告のデザイン』
ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-10209-2

『美しい絵本。』 4刷
ペン編集部[編]
定価 本体1500円(税別)
ISBN978-4-484-09233-1

『やっぱり好きだ! 草間彌生。』 4刷
ペン編集部[編]
定価 本体1800円(税別)
ISBN978-4-484-11220-6

『ユダヤとは何か。聖地エルサレムへ』
市川 裕[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1600円(税別)
ISBN978-4-484-12238-0

『キリスト教とは何か。I 西洋美術で読み解く、聖書の世界』 5刷
池上英洋[監修]　ペン編集部[編]
定価 本体1800円(税別)
ISBN978-4-484-11232-9

『キリスト教とは何か。II もっと知りたい! 文化と歴史』 3刷
ペン編集部[編]
定価 本体1800円(税別)
ISBN978-4-484-11233-6



※表紙はゴッホ「アイリス」

2刷

東京都美術館
「ゴッホとゴーギャン展」開催中。
12／18(日)まで

『印象派 絵画を変えた革命家たち』

ペン編集部[編]

19世紀後半、センセーショナルな「新しい絵画」が生まれた。光を捉え、鮮やかな色彩と大胆なタッチを旨とする印象派である。圧倒的人気を誇るゴッホをはじめ、ゴーギャン、モネ、ルノワール、セザンヌ、マネ、ドガなど、印象派・ポスト印象派を代表する15人を一挙紹介!

●定価 本体1600円(税別)
ISBN978-4-484-10228-3



伊藤若冲 生誕300年!
京都市美術館「若冲展」開催中。
12／4(日)まで

『若冲 その尽きせぬ魅力。』

狩野博幸[監修]　ペン編集部[編]

若冲人気はとどまるところを知らない。その魅力は、精緻な動植物の描写と大胆な筆づかいにある。昨年発見されたばかりの『孔雀鳳凰図』、日本美術の至宝『動植綵絵』と『釈迦三尊像』、水墨画の大作『象と鯨図屏風』を軸に、調査でわかった独自の技法をわかりやすく紹介。

●定価 本体1800円(税別)
ISBN978-4-484-16212-6

CCCメディアハウス
〒153-8541 東京都目黒区目黒1-24-12 TEL03-5436-5721(販売局)
http://books.cccmh.co.jp 全国の書店でお買い求め下さい。
*は電子書籍もございます。

Penのオフィシャルサイト「pen Online」www.pen-online.jp
@Pen_magazine
penmagazine
penmagazine

建築家の自邸から学ぶ、家づくりのアイデア

いま建築家たちが自らの家を建てるなら、どんな住まいをつくるのだろうか。いつになく実験的になるのか、それとも心地よさをとことん追求するのか。家づくりのプロの自邸には、心地よい暮らしへと導く視点が詰まっている。



美和小織　東京都中野区

見落としてしまいそうな細部、そこにこだわる。

●1979年、静岡県生まれ。武蔵野美術大学卒業後、ゼネコン、インテリアデザイン事務所トネリコを経て、2010年独立。www.little-inc.com

設計者ならば自分の思い通りにつくれる自邸の設計に夢をもつに違いないと思いきや、ショップやオフィスのインテリアデザインをおもに手がける美和小織(わさおり)さんに、その願望はなかった。「住宅の設計には、他のどんな仕事よりも冷静である必要を感じます」テンポラリーな空間と違い、住まいはそこでの暮らしを左右するもの。だからこそ自宅では、安らかに生活するための気持ちのよい空間を目指した。

空間の質を読み解き、そぐうものを選ぶ。

中野駅近くの、アーチ窓が印象的なビルの3階に、美和さんと夫の岩井祐介さんの住まいはある。築42年、4階建てのヴィンテージビルは、もともと岩井さんの祖父が始めた音楽学校の校舎兼住居だったものだ。いまも最上階

永井泰史・写真(p144〜147、p150〜153)
photographs by Yasushi Nagai
蛭子 真・写真(p148〜149)
photographs by Shin Ebisu
佐藤千紗・文(p144〜147)
text by Chisa Sato
高瀬由紀子・文(p148〜149)
text by Yukiko Takase
坂口千秋・文(p152〜153)
text by Chiaki Sakaguchi
若村大樹・図面イラスト
plan illustrations by Hiroki Wakamura



障子とチーク材の壁にヘリンボーンの床という個性の強いアイテムが調和するLDK。サイドボードは食器棚兼サービステーブルとして活用。

には両親が住み、岩井さんもそこで生まれ育った。学校は4年前に閉校。愛着のある建物をどうやって引き継ぐか、岩井さんは頭を悩ませていた。

結婚をきっかけに新居を探していたふたりは、3階をリノベーションして住むことを決断。「ビルの欠陥を整えないと、快適に住み続けるのは難しい。今回のリノベーションによる解体に伴って、建物内部の老朽化した設備をメンテナンスする必要もありました」との判断もあってのことだ。

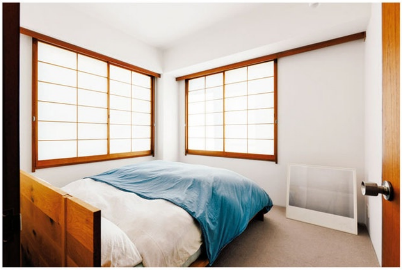
もともと3階には校長室とレッスン室があり、チーク材の壁と建具、雪見障子など、往時の端正なディテールで設えられた美しい空間が残っていた。「いまでは見られない空間の質があって、これを壊して超えられるものをつくれるのかというプレッシャーがありました」と、美和さんは振り返る。リノベーションのテーマは、古きよきディテールを受け継ぎながら、現代的な気持ちのよい空間にすること。

「人に重圧を与えるようなやり過ぎた空間ではなく、ただシンプルにきれいな壁を立てたいと思ったんです」

そんな美和さんの言葉に、岩井さんは次のように言葉をつなぐ。

「建築に関心があって勉強もしたのですが、自分の家に対する夢やこういうモノを置きたいという願望はありませんでした。ただ、気持ちのよい空間はどのようにして生まれるのだろうという興味はずっとあったんです」

ふたりに共通する控えめでニュートラルな態度は、空間を読み解き、現場を手がかりに再編集するというリノベーションの手法にぴったりだった。

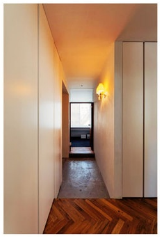


障子越しの穏やかな光に包まれる寝室。ベージュのウールカーペットも、静かで優しい雰囲気。



廊下からリビングを見る。チーク製のドアは、既存の枠意匠を活かして再利用。光採りにガラスを合わせている。





上左：ケヤキ並木に面した建物外観。上右：パウダールームから玄関ホールを見る。ここでも、祖父が使用していた黄色いランプをアクセントに。右の壁面には洗濯機など大型家電を収納している。

まず、窓からケヤキ並木が見える、いちばんよい場所にあった校長室をリビングに。建物にダメージを与えないよう、給排水の位置を変えずに元給湯室をバスルームにすると、レイアウトは自ずと決まっていった。

「設計するにあたり、江戸東京たてもの園でモダニズム建築の復習もしましたね。古いものとも馴染む現代的なものってなんだろうと、雲をつかむような思いで模索しました」

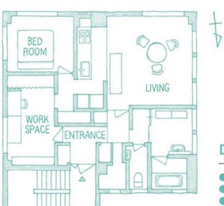
内装はふたりで悩み、リビングの床は残したチーク材の壁に合わせてオーク材のヘリンボーン貼りを選択。パウダールームの床はチャコールグレーのスレートタイル、寝室と書斎の床はウールカーペットと、床の素材感で各部屋の個性を決めた。黒やチャコールといった色み、マットな質感が空間を引き締め、静かな佇まいを醸し出す。

キッチンとリビングを間仕切るサイドボードは建物の竣工と同時代につくられたイギリス製で、友人の家具店から買い求めたもの。かつて音楽学校で使われていた姿見や、美和さんが以前に勤めていたインテリアデザイン事務所がミラノサローネに出品した長椅子など、ふたりに縁があるアイテムは部屋にしっくり馴染んでいる。これらが存在する空間の質を高め、背景となって引き立てているのが、梁や柱の収まり、壁と天井の見切りなど、細部のていねいな仕事だ。

「どうやったらきれいに収まるか詰めて考える」という、美和さんらしい空間の仕上げ。見落としてしまいそうな細部へのこだわりこそが、岩井さんの祖父の時代から受け継いだこの空間への解答だった。やわらかく回る光が、室内に凛とした空気を放つ。

「美和さんのためにと、いつも一緒に仕事をしている職人さんたちが張り切ってくれた」という岩井さんの言葉は、現場を大事にする彼女の日常をよく伝えるエピソードだ。

強いコンセプトをたてたわけではない。物事の基準はあくまで空間で、欲しいものでも合わなければ諦める。一つひとつの判断に、自分たちのいまの感性のフィルターを通す。その絶妙なバランス感覚が、懐かしくも新しい居心地のいい家を生み出した。ふたりが住むようになり、1階には美和さんがインテリアを手がけたワインショップがオープンした。新しい世代に引き継がれ、愛着のある古いビルの再生がいま始まろうとしている。



DATA

- 家族構成：夫婦
- 構造：鉄筋コンクリート造
- 床面積（3階のみ）：93.71㎡
- 改築年月：2014年12月（1974年竣工）



書斎壁面の書棚は、岩井さんの祖父が校長室で愛用したものを移設。特徴的なディテールをもつ家具とバランスをとる、白い天井や壁に揃えた。



光が差し込む、明るいパウダールーム。気持ちよく朝の身支度ができる。窓下のむき出し部分は、解体前の傷跡をわざと残したもの。

半屋外的な気持ちよさを、家の随所に宿らせる。

小松一平 奈良県奈良市

●1984年、奈良県生まれ。大阪芸術大学卒業後、建築設計事務所を経て、2010年独立。http://kmta.jp

開放的な印象の家は数あれども、ここまで家全体がオープンな造りはそうはない。3階建ての住まいの各階の窓とカーテンを開け放つと、L字に大きく開口し、潔いまでに筒抜けの空間となる。テラスはもちろん、室内にいても半屋外的な開放感に包まれるのだ。

「同居する両親も、東南アジアでよく見られる内外が曖昧な空間を好みます。だから、この家の開けっ広げな雰囲気も気に入ったようです」と、設計を手がけた小松一平さんは語る。

擁壁の閉塞感をなくした、街と緩やかにつながる家。

小松さんの家が立つのは、奈良市の小高い山の中腹。1970年代に山を切り拓いて造成した住宅地、そこに構えた実家を建て替えたものだ。現在の雰囲気からは想像できないが、以前は高い擁壁（ようへき）の上にそびえ立っていたため、街と分断されたような環境だった。

「開放的な空間をつくりたいという希望に反して、擁壁は閉鎖的な印象をもたらす。この矛盾をどう解決するかが課題でした」

斜面に盛り土をして人工的に平らにされた土地を支えていた擁壁は、高いところで3mほどにもなり、強度にも不安があった。そこで小松さんは盛り土された敷地を段々状に掘り、それぞれに新しい擁壁を設けて負荷を軽減するプランを立案。擁壁が低くなったことで周囲への圧迫感もなくなり、敷地と前面の道路が緩やかにつながった。

「ここで生まれ育ち、自分が長くこの場所に住んでいたからこそ、建物を新しくするだけでなく、土地から改良しないと根本的な解決にはならないと判断できたのだと思います」

新たな擁壁を築いた後は、「敷地の形状に素直に従った造りにした」と小松さん。建物のバランスが取れるような位置にL型の壁を立てて床をのせていくことを繰り返し、半地下のアトリエをもつ3階建ての家が完成した。1階は共有のLDK、2階は両親の空間、3階は小松さんの空間だ。3階のテラスからは、東大寺や若草山までが見晴らせる素晴らしい眺めを楽しめる。両親ともども、テラスに椅子を置いて寛ぐひと時を満喫している。

それにしても、開口部を開け放ったときの爽快感は格別だ。建物をコンパクトに抑えたぶん、庭をたっぷりと取ったため、内と外が一体化したような広がりが感じられ、風通しも抜群。

外の通りからは家の反対側の風景まで抜けて見え、近所の人にも「住宅地の風景が明るくなった」と言われるそう。住まいを住宅単体で完結させず、周囲の環境とのかかわりを常に考える若き建築家ならではの、街と心地よくつながった家が完成した。

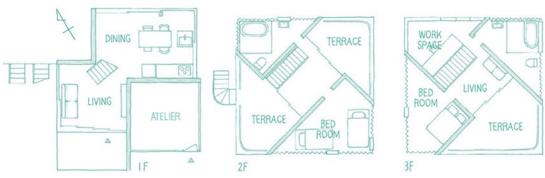




上：1階のダイニングキッチンからリビングを見ると、庭まで見渡せて奥行き感たっぷり。左：3階の小松さんのワークスペースから、テラス方向を見渡す。テラスに出なくても、半屋外的な心地よさは満点。左手の浴室からの眺めもいい。

DATA

- ●家族構成：夫婦＋息子
- ●構造・規模：鉄骨造＋鉄筋コンクリート造3階建て
- ●敷地面積：186.38㎡
- ●建築面積：51.84㎡
- ●延床面積：108.87㎡（1階29.80㎡、2階36.73㎡、3階42.34㎡）
- ●竣工年月：2015年3月





各階のＬ字壁を異なる方向に積み重ねたことで、視界がさまざまな方向に開けている。家が角地にあるため、ことさら視界の抜け感が大きい。

100年先を見据えた、現代的な和の住まい。

寶角陽輔
愛知県名古屋市
●1970年、兵庫県生まれ。愛知工業大学卒業後、建築設計事務所を経て、99年独立。 www.houzumi.com



北西に面した、雨樋などがないシンプルな外観。なだらかに曲線を描くむくり屋根で重くなりがちな瓦にやわらかい表情を与えた。軒高は2m。

美しく敷き詰められた瓦の屋根と、深くて低い軒。日本的な美意識をもつこの家の主は、愛知で住宅設計を中心に行う建築家の寶角（ほうずみ）陽輔さんだ。彼にとって住まいの原風景はやはり、実家にあるという。戦時の空襲を逃れた築120年強の町屋で、瓦や漆喰、板塀といった日本的な佇まいに、幼い頃から〝かっこいい〟と思い続けてきた。

「120年前の家にいまも魅力を感じるということは、おそらく100年先にも同じことを思えるはず。実家は現在も瓦を葺き替え、漆喰をやり直し、佇まいを保ち続けている。4つの部屋をもつ田の字型の間取りで、襖を外せば大きな広間にもなるので、いまも自由に使えます。リフォームの必要を感じることもありません」

ちょっとしたゆとりが、家族の大切な時間を生む。

寶角さんは自身が魅了されてきた日本の住風景を未来につなぎたいと、設計する住宅に和の表情をもちこむ。自邸では、曲面を描く瓦屋根の構造〝むくり〟を採用。横長の建物にただ瓦を乗せては住宅街に圧迫感を与えるため、やわらかいカーブで周囲の風景に馴染ませている。軒も地面から2mの位置まで下げ、道や建物に影を落とす。平屋のように見えるが、2階建てだ。

1階は直線上にリビング、ダイニング、キッチンを配置。大きな窓の向こうに四季を楽しむ庭が広がる。天井の高さも2・18mと低く抑え、視点を横長に広げた。さらに庭側にも軒をせり出させ、軒下にある御影石のデッキはまるで縁側のよう。結果、室内と庭が連続した空間のように感じられる。

「限られた予算を使い、家族にとっていちばん大切な時間をつくりたい。せっかくいいリビング・ダイニングがあっても、その空間から見える景色が貧しくては意味がない。ほかの住宅も含め、庭を含めて提案することが多いですね。身構えられてしまいがちですが、自邸を見ていただいて、そのよさを認識してもらっています」

自邸では、就寝時以外は家族がここで過ごすようにと、2階にある主寝室と子ども室は予算をぐっと抑えた。庭だけではなく、椅子を除いて家具はすべて特注したもの。もうひとりの施主である妻はパンづくりの教室をもつほどの腕前で、キッチンのサイズも動きを想定して細部までつくりこんだ。庭や家具、調度品まで、家のなかでそれらをどう納めていくか。一つひとつの動きが積み重なって、家は生まれる。

「図面ではわからない、体感で得られる豊かさ。家の中にちょっとしたゆとりや遊びがあることで、気持ちよさが生まれるのでは。そうしたことを大切にしていきたいですね」



リビングから庭を見る。せり出した軒によって夏は日差しを遮り、冬は光を取り込む。内外が曖昧な軒下の空間によって庭と内部が連続する。



4OWN RESIDENCES

DATA

- 家族構成：夫婦＋子ども1人
- 構造・規模：木造2階建て
- 敷地面積：248.94㎡ ● 建築面積：127.01㎡
- 延床面積：152.10㎡（1階113.92㎡、2階38.18㎡）
- 竣工年月：2014年3月





4間（7.28m）の開口部を設けたリビング・ダイニングで庭を楽しむ。カーテンや網戸は天井内部に収納している。

アサノコウタ

福島県福島市

新陳代謝を繰り返し、進化し続ける未完の住宅。

●1983年、福島県生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了後、2009年に設計事務所を設立。街づくりやアートプロジェクトまで多岐にわたり活躍中。www.bhis.jp

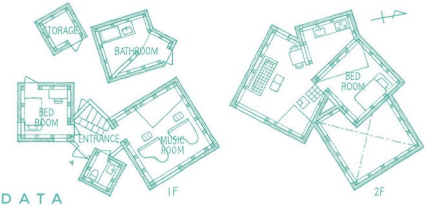


T字路の突き当たりに立つ家はとても目立つ。次は同じ構造の郵便ポストをつくり、わずかに増殖させる。





上奥：設計の絶対条件だった母のピアノ教室。上部にせり出した母の部屋から見下ろすことができる。
上：エントランスはピアノ教室、自身の作業場、トイレ、リビングの4つのハコが交差する路地のよう。



DATA

●家族構成：母＋息子　●構造・規模：木造2階建て　●敷地面積：104.09㎡　●建築面積：55.58㎡　●延床面積：69.85㎡（1階40.42㎡、2階29.43㎡）　●竣工年月：2016年1月

福島市を拠点に活動する建築家、アサノコウタさんの自邸は、大小9つのキューブを積み上げたような外観が特徴だ。ピアノ教室を営む母とふたり暮らし。自分のアトリエ兼寝室、母の教室、リビング、キッチンなど、生活の機能を独立したハコに分け、それらを噛み合わせることで、ひとつの住空間をつくっている。

角度をつけ、高さを変えて、互いのハコに食い込みながら内側へと広がる空間は、「説明は聞いていたけど、実際見た時は驚きました」と母の洋子さんが言うように、間取り図上では空間把握が難しくて少し戸惑ってしまう。

等身大のメタボリズムで、住まい方を模索し続ける。

一見、複雑な構造をしたキュービックな建物だが、分解していくと、同じ木造工法を採ったボリュームの異なる9つの立方体となる。組み合わせ方次第で幾通りもの展開が可能な、実はシンプルで素直な考え方なのだ。

アイデアの下敷きは、大学時代に研究した古民家の暮らし。家を支える梁や柱を見ながら、必要な時に手を入れてきた昔の人のように、建物は住まい手が手をかけることで長もちする。"竣工して完成"ではなく、その後の暮らしの中で建物も人も新陳代謝を繰り返す「身の丈に合ったメタボリズム」を、アサノさんは提唱する。骨組みの柱をあらわにした自邸は、自分が志す建築の理想に日々向き合う、永遠に未完のコンセプトホームなのだ。

理想のために住み心地を犠牲にしては本末転倒だが、あくまで自邸。住まい方は自分で決めればいい。足を痛めている洋子さんが「リハビリの家」と称するように階段も多い。ハコの凸に頭をかがめる箇所もあちこちにある。でも、それが空間に変化を与える。角度のある窓で外からの視線は遮られ、内側は開放的で明るく、「住み心地はいい」と母。親子仲はあまりよくないと笑うが、幼い頃と変わらずピアノの音が聞こえ、開口部からは互いの気配が伝わる。それぞれの関係性がそれとなくつながり、家になる。

「住宅ではなく、住まう環境をつくりたい」というアサノさん。暮らす時間の中で、建築と人のかかわりも変化する。その時、専門家の手を借りずに自分の手で変えていける面白さは、福島に戻り、専門外の人々とものづくりをしたことで学んでいったことだ。

将来は、敷地内にハコを増殖させてコミュニティにも開いていきたいという夢もある。新陳代謝していく自邸は、故郷に暮らし、さまざまな領域に建築家としてコミットしていくアサノさんが、いまここで迎えたい未来のかたちでもある。



明るい天井高6.8m のリビング。むき出しの柱のグリッドは無限の棚。大小のキューブが角度をつけて重なり、空間にさまざまな表情が生まれる。

pen

with New Attitude

連合広告企画

スタイルを育む、自分仕様の住まい。

独自の視点で理想の家づくりを心がければ、毎日の暮らしに豊かな広がりが生まれ、心を揺さぶるスタイルが出現する。情報を見極め、自分仕様の住空間を手に入れよう。

青野 豊・写真 photographs by Yutaka Aono (p155~157)　江口恵子・スタイリング styling by Keiko Eguchi (p155~157)
山澤健治・編集&文 edit & text by Kenji Yamazawa

HOME by design











イエロー×ネイビーのコンビネーション。右の3人掛けと同サイズのモデルながら、華やかな色合いと金属脚がより軽やかな印象を与える。



ソファ本体にモスグリーン、アクセントラインにホワイト色の革を配した「MU-A0026」の3人掛けソファはシックな佇まい。W237㎝。



職人の技が光るていねいなステッチや上質な天然革の質感や風合い、ツートーンの仕上がりなど、ディテールも惚れ惚れするほど美しい。



脚は標準仕様の金属脚と木脚の2タイプを用意。木脚の色は、写真のダークブラウン色のほかに、ナチュラル色をセレクトすることも可能。

ワタリジャパン

触発する、欧州デザインの革ソファ

世界的レザーソファ・メーカー、ＨＴＬ。欧州テイストの意匠も美しいプレミアムライン「ミューズ」の「ＭＵ・Ａ００２６」が日常を触発する。

近年、デザインを取り巻く環境は劇的に変化を遂げている。さまざまな分野でグローバル化が進み、デザインはアートに接近。その結果、クラシックなデザインにモダンが息づき、伝統を受け継ぎつつも現代的な遊び心も満たす、多彩な意匠が誕生し続けている。

高級感と遊び心のある、ツートーンという選択。

革の品質への強いこだわりと徹底した製造哲学で知られる世界最大級のレザーソファ・メーカー、ＨＴＬ。そのプレミアムライン「ミューズ」のソファにも、近年のデザインの潮流は顕著だ。イタリア人プロデューサー兼デザイナー、ロベルト・ベンディーニを擁するデザインチームは、常に革新的でスタイリッシュなコンテンポラリー・デザインのトレンドを追い求め、欧州デザインと機能性を融合させる極上の革張りソファを生み続けている。

もちろん、リビングの中心から暮らしの中心へと存在感を高めるソファだから、追い求めるべきは美しいだけのデザインではない。「暮らしにひらめきを与え、生き方をインスパイアする」、そんな日常を触発するソファこそが、「ミューズ」が追求するヨーロピアン・デザイナーズ・スタイルのソファだ。所有する歓びに加え、座る至福や眺める悦楽といった、日々の暮らしを豊かにする感情を五感で感じてこそ、「ミューズ」のソファの醍醐味は味わえる。

「ＭＵ・Ａ００２６」は、そんな日常を触発する極上レザーソファだ。品格すら漂うシンプルなフォルムに、遊び心あふれるアクセントラインを加えた、大人のエスプリをも感じさせる佇まいは、欧州デザインのいまを見事にとらえた美しい意匠である。革にこだわるＨＴＬらしく、アクセントラインにも革を使用。本体にもアクセントラインにも、厚さや加工の異なる5種、50色の高級天然革からお気に入りをセレクトでき、脚も金属製と木製の2種、3色から選ぶことができるので、誰もが自分仕様の革張りソファを手にすることができる。背クッション、座クッションともにフェザー入りのため、ソファの原点ともいえる、1日中寛げるやわらかで居心地のいい座り心地を実現。上質な革ならではの優雅な肌触りもあいまって贅沢な気分へと誘う。

日本の住環境に合わせた製品の研究・開発を推し進め、サイズの調整からアフターサービスまでを提供する、ＨＴＬグループの日本法人ワタリジャパンの存在意義も今後さらに高まるだろう。期待したい。

HTL JAPAN

革本来の表情が際立つセミアニリン仕上げのレザーは、どれも発色鮮やかでやわらかな高級天然革。豊富に用意された5種、50色の中から、クールなシルバーと優しいイエローをチョイスして、高級感と遊び心のバランスも絶妙なスタイリッシュなツートーン・ソファに。使い込むほどに増す、上質な厚革の味わいも織り込み済みの選択。ソファ本体とアクセントラインの革や色を同じにオーダーすることも可能。「MU-A0026」片肘ソファ3EL（W198×H84×D99×SH45㎝）、カウチ1.25 COUR（W119×H84×D155×SH45㎝）



●問い合わせ先／ワタリジャパン　東京☎03･5368･1935　大阪☎06･6229･7171　www.htljapan.co.jp

BENTO HOUSE

夢が叶う、日本のスタンダード住宅。

ベツダイが人気建築家と共同開発した新発想の規格住宅「BENTO HOUSE」。住み手が育てるこの家が、いつか日本のスタンダードになる。



2つのドアがつなぐ開放的な土間は、アウトドア感覚の家具を置いて趣味を楽しむ快適空間に。グリーンを置けば、室内はよりオープンエアな雰囲気になる。アイデア次第で無限に使いこなせるユーティリティスペースとして活用したい。年月が経つといい表情に変わるラワン材の室内壁も、室内に温もりを醸し出す。開口部となる窓は、目線よりも高い位置に設置。セキュリティとプライバシー保護に配慮した都市型住宅らしい設計。

おしきせの間取りではなく、自分仕様に空間づくりができる〝未完成な家〟の人気が年々高まっている。未完成な家とは、いわば自由に編集して暮らすことができる住宅である。「実験的に安い家を購入し、自分の好きなようにつくり直して住みたい」という想いが若い世代を中心に広がりを見せているのも、「家を育てる」という能動性が住み手の間に浸透している証拠だろう。

自分仕様に育て上げる、開放感あふれる大空間。

1000万円からの家づくりを可能にした箱型の規格住宅「ZERO-CUBE」で業界の常識を打ち破ったベツダイと、独自の視点と自由な発想が国内外で熱く支持される建築家、谷尻誠氏と吉田愛氏率いるサポーズデザインオフィスが共同開発した新規格住宅「BENTO HOUSE」は、まさに最先端を行く〝未完成な家〟。ご飯やおかずで弁当箱の中身を思いのままにアレンジするように、住み手が居室を自由に演出することで自分仕様のインフィルを構築し、育て上げることのできる新発想の都市型住宅である。

サポーズデザインオフィスにとっては、初めて設計・監修をする規格住宅



BENTO HOUSE

となったわけだが、独創的で包容力のある設計はさすが。世界から見た、日本のスタンダードな住宅をつくるとの想いが、住み手が決めたテーマやルールを心地よく暮らしの中で実践できる、開放的な大空間に結実している。それはまるで、布団を敷けばそこが寝室になり、ちゃぶ台を置けばダイニングになった、昔の日本の民家にあった自由度の高さを、現代のたぐいまれなるセンスで甦らせたようにも映る。

なにより印象的なのが、エントランスドアを抜けると目に飛び込んでくる、天高3・8mの大空間に広がる、10㎡の土間スペースと30㎡の開放的なLDKだろう。自転車が趣味ならば、そのまま土間に愛車を停め、そこで整備ができるし、サーフィンが好きなら、濡れたサーフボードをそのまま持ち込んでもOK。散歩の行き帰りでペットと戯れるのもいいだろう。そんなことが玄関先でできれば、そこはもはや部屋の一部だ。その同じ空間には、食事を用意したり、読書をしたり、子どもたちが走り回っていたりする、ゆとりあるLDKが広がっている。ソファを置けばリビングに、テーブルを置けばダイニングに、と空間づくりも自由自在。なんと楽しいワンルーム空間だろう。ひとりの時間が欲しければ、ドラマティックな階段を上がるだけ。寝室などプライベートな個室が待っている。

これほど豊かな有名建築家の家が、1800万円（税抜、本体価格）で手に入るのだから驚き以外のなにものでもない。規格住宅なので待たずに購入できるのも魅力だろう。楽しみはますます募るばかりである。



立ち位置によって異なる使い方が楽しめる、全長約5.4mのオリジナルDIYキッチンは魅せる収納を。



天高3.8mのダイナミックな空間が広がる、1階LDK。浮遊しているようなアート階段が2階へ誘う。



造作の美しいオリジナルクロゼットも印象的な、2階寝室。こもり部屋として最適なコージーな空間。



外壁と屋根には、高耐久なメタリックシルバーのガルバリウム鋼板を採用。家形のフォルムも愛らしい。

●問い合わせ先／ベツダイ 0120・422・260 bento-house.com

アイフルホーム

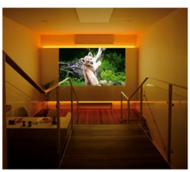
家族の命と財産を守る、先進的な家。

アイフルホームの次世代レジリエンスホーム「家＋X」が新登場。有事には家族の命と財産を守る、これまでにない新発想の住宅に注目したい。

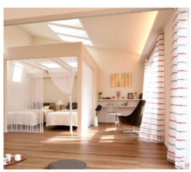


EYEFULHOME

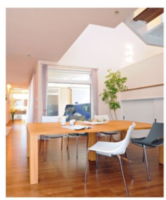
耐震等級3相当を実現する堅牢な躯体と先進の設計思想で家族を守る、住まいの本質を具現化した次世代レジリエンスホーム「家＋X」の外観。モダンなデザインのファサードがプライバシーを確保しつつ、スタイリッシュな佇まいを表現する。子どもの安全・安心に配慮した家づくり思想も健在で、キッズデザイン賞を9年連続受賞。暮らしの快適を生む。なお、すべての写真とパースはイメージなので実際のプランとは一部異なる。



階段スペースで映像が楽しめるオープンスペースシアター。暮らしを演出する空間設計の好例。



豊かな光が天窓から注ぐ、広いファミリースペースの一角。一室空間設計で家族の絆も深まる。



部屋としても活用できるビルトインガレージは、将来を見越し、室内への移動をバリアフリーに。

住まいの将来像を打ち出すコンセプトホームを発表し続けるアイフルホーム。10月発売の「家＋X」は、ネット・ゼロ・エネルギー・ハウスに対応する「次世代レジリエンスホーム」である。

レジリエンスホームとは、平時には省エネルギーで生涯コストを最小化でき、災害などの有事には家族の命と財産を守る家のこと。高い耐震・耐風性能を備えるだけでなく、災害時にライフラインが寸断されても約1カ月間は安心して暮らせることを念頭に設計された先進的な未来住宅だ。

その発想は、斬新にして革新。毎日の生活では北海道基準の省エネルギー住宅とガスエンジンコージェネユニットで生涯にわたってエネルギーコスト最小化を目指し、停電時、LPガスで自家発電できるシステムを採用することで、ライフラインが停止しても約30日間、電気とガスの供給が可能に。水道水の循環備蓄や給湯ユニット、雨水タンクを活用し、大人4人で3日分の36ℓの飲料水と290ℓの生活用水も確保。その結果、有事でも電気やガス、水が使え、普段どおりの生活が送れるのだ。ジャパン・レジリエンス・アワード2016受賞も納得の性能である。「家＋X」の登場で、住まいの選び方はきっと変わることだろう。

●問い合わせ先／LIXIL住宅研究所 アイフルホームカンパニー 0120・126・406 www.eyefulhome.jp

素箱 木造スケルトン住宅の自由な暮らし。

「素箱」は、建築家の視点から必要なものだけで設計された木造スケルトン住宅。住む人のニーズを引き出し、受け入れる自由な家の登場だ。

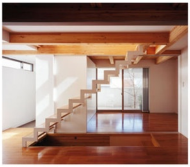
家族の成長に合わせて家も成長させることのできる、素箱の木造スケルトン住宅。木造建築では最高等級となる耐震等級3を実現する強靭な構造体と、家全体をすっぽりと包む外断熱工法などによる快適な温熱環境を提供し、内装や設備などのインフィルは住み手に任せる。その結果、達成されたデザインと価格のバランスもまた、このスケルトン・インフィル住宅の魅力だろう。大きな窓から気持ちのよい光が差し込む、素顔のような部屋を仕上げるデザイナーは、住む人自身。夢が広がる。

SUHACO





プライバシーに配慮し、外部には閉鎖的な外観デザイン。内部には逆に開放的な中庭が広がる。



空間を広く見せる、軽やかな意匠の鉄骨階段を標準で採用。通風や採光面でも威力を発揮する。



間仕切り壁を設置すれば家族構成の変化に柔軟に対応する、木造スケルトン住宅らしい大空間。

決められた間取りに、杓子定規なプロの提案。自分仕様の家づくりをいくら目指しても、結局は家に暮らしを合わせるのがいままでの常識だった。

その点、「安全で身を守れて、あたたかい巣であること」という家の本質を実現した「素箱」の木造スケルトン住宅は、内装や設備を暮らしに合わせて変えることのできる家。「構造体」、「温熱環境」、「飽きのこないシンプルなデザイン」という必須条件を満たしつつ、1000万円台という価格を実現するために、建築家の視点から必要なものだけで設計がなされている。

SE構法によって建てられた強靭な躯体は耐震性と可変性に優れ、柱や間仕切り壁の少ない開放的な大空間を創出。デザインを標準化したコストメリットを活かし、外断熱や温水床暖房を標準装備した。木造のよさを凝縮した住宅だから、暮らしに快適が生まれる。

堅牢で美しい"箱"の中は、住み手が家族構成やライフスタイルに合わせ、自由に育て上げていけばいいという発想も、時間や予算のプレッシャーを軽減してくれる。10月末には東京・吉祥寺に、木造スケルトン住宅の魅力を伝える「素箱 吉祥寺コンセプトハウス」がオープン予定。その目でぜひ確かめてみてほしい。

●問い合わせ先／素箱　☎03-5335-7357　www.suhaco.com

資料請求＆アンケート

この企画をご覧になって、さらに詳しいことをお知りになりたい方は、
添付のはがきにて資料をご請求ください。なお、アンケートにもご協力いただければ幸いです。

アンケート項目

Q1 現在のお住まいは？

1. 一戸建て持ち家　2. 分譲マンション　3. 中古一戸建て持ち家　4. 中古分譲マンション　5. 賃貸　6. 社宅　7. その他

Q2 現在の住空間について、ご不満な点はありますか？

Q3 快適な住空間づくりにおいて、こだわるポイントは何ですか？（複数回答可）

1. 価格　2. デザイン　3. 機能　4. 使いやすさ　5. その他

Q4 住宅の購入・建て替え・リフォームのご予定はありますか？

1. ある（一戸建てまたはマンションの購入・建て替え・リフォーム・その他）　2. ない

Q5 Q4で「ある」と答えた方、ご予定はいつ頃ですか？

1. 半年以内　2. 1年以内　3. 2年以内　4. 2年より先

Q6 住宅に関して、もっと知りたいことは何ですか？

Q7 ご意見など、ご自由にお書きください。



PRESENT

図書カード5000円

すべての資料を請求された方の中から抽選で20名様に、
図書カード5000円を差し上げます。

応募要項

＊とじ込みはがきに必要事項をご記入の上、ご応募ください。

＜締切＞ 11月30日（水） 当日消印有効

＜発表＞ 発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。

住所・電話番号・氏名・年齢・職業などをお書きの上、下記までお願いします。

〒153-8790 東京都目黒区目黒1-24-12
CCCメディアハウス 「Pen」メディア・プロモーション局 11月1日号 住空間連合企画アンケート係

●はがきの資料請求欄の、ご希望の項目にチェックをしてください。

1. すべての資料請求を希望　2. BENTO HOUSE　3. アイフルホーム　4. 素箱　5. 東京ガス

※住所などの個人情報は、賞品の発送または、ご請求の資料をお送りする場合に限り利用します。

pen
with New Attitude

pen
with New Attitude

text by Noriko Kawakami

ART［アート］

撮影：大平あさき



撮影：ヨーガン レール







撮影：大平あさき

上奥：素材は海洋投棄された廃棄物。右：拾い集めたゴミ。上：本人撮影。ほかにレールが評価していたクリス ジョーダンの作品も（プラスチックを食べたミッドウェー諸島の鳥の死骸の写真）。レールは1944年、ポーランド生まれのドイツ人。パリやNYでテキスタイルデザイナーとして活躍後、日本に移住。

幻想的な光が伝える文明の危機、デザイナーの心の痛みが伝わる。

川上典李子　エディター／ジャーナリスト

『On the Beach ヨーガン レール　海からのメッセージ』

開催中〜2017/2/5　十和田市現代美術館　☎0176・20・1127
㊎9時〜17時　※入館は閉館の30分前まで　㊡月　㊖一般¥600　www.towadaartcenter.com

「遠目には美しく見える砂浜なのに、こんなことになってしまっている。誰でもない、人間がしたことです。これは文明の終わり……私にはそう思えてなりませんでした」――ヨーガン レールが2014年に記した文章だ。

1970年代初めに日本に移住、デザイナーとして活躍する一方で、「ファーマー」として自身の農園と住まいを設けたのが、沖縄の石垣島だった。

毎月の三分の一は海辺の家で過ごしていた彼は、貝殻や珊瑚のかけらを拾いながら愛犬と散歩を楽しむ浜辺で深刻化する大量のゴミに、悲しみと憤りを感じていた。心を痛めつつ拾い続けたプラスチックゴミを色ごとに分類、照明器具を作り始める。

「醜いプラスチックのゴミを大量に見せただけでは、その恐ろしさをわかってもらえないのなら、私はそのゴミを使って、何か自分が美しいと思うものを作り出す努力をします。ただ美しいだけのオブジェではなく、もう一度、人の役に立つ実用的なものに変えましょう。これは、ものを作ることを仕事にしている私の小さな抵抗です」

スウェーデン、東京、京都で紹介されて反響を呼んだ作品を美術館空間に合わせて構成した本展は、2014年秋に不慮の事故で他界したレールの最後の仕事、メッセージを伝えるものでもある。彼は海の写真も撮りためていた。かつての海の美しい風景と、海洋投棄されたゴミで無惨な状況を見せる浜辺の様子。見る者の胸に突き刺さる対比が、文明の危機を伝える。

十和田の晩秋や雪景色の中で放たれるランプの光。レールらしい遊び心や詩情が、一方で状況の深刻さを際立たせ、それらふたつの世界への複雑な思いとなる。「世界に伝えたい」と語った彼のメッセージからさまざまなことを考えずにはいられない。

りんごを軸に、異なる地の手仕事や道具に目を向ける。

『青森 りんご リトアニア』展



生活のためにつくられる道具やクラフトと自然環境とのかかわりに興味を抱くデザイナーとキュレーターチームが、「りんご」をキーワードに青森と東欧リトアニアの状況を紹介。多様な青森のりんご袋（写真）、双方の地域で愛用されている手かご、冬の道具まで、文化の違いを超えて存在する創造の力、日々の工夫が浮かび上がる。10月29〜30日には映画監督ジョナス・メカスの『リトアニアへの旅の追憶』の上映、映像作家の山中有が青森で撮った新作映像の上映とトークも併催。

10/24〜30　HOLE IN THE WALL　㊎12時〜19時（10/24〜28）11時〜19時30分（10/29、30）　無休　入場無料
㊒holeinthewall@hikohiko.jp　http://holeinthewall.tokyo

紙を使わず、「リンカク」で「紙らしさ」に迫る。

nendo『un-printed material』



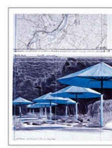
「日常の小さな“！”を感じてもらう」を活動のコンセプトとしてデザイン界の第一線を走り続けているnendo。グラフィックデザインを中心に紹介する本ギャラリーでの新作展にあたって、nendo代表の佐藤オオキが考えたのは、なんと紙を使わない展示「ポスターのないポスターの展覧会」だ。ものの輪郭のみを抽出、紙のクセや痕跡を捉えることで表現された「紙らしさ」に注目を。

開催中〜11/17　クリエイションギャラリーG8
☎03・6835・2260　㊎11時〜19時
㊡日、祝　入場無料　http://rcc.recruit.co.jp/g8

かつての「アンブレラ」プロジェクトを、振り返る。

『クリストとジャンヌ=クロード アンブレラ 日本=アメリカ合衆国 1984–91』

NY在住のクリストとジャンヌ=クロードにより、6年の準備を経て1991年に実施された巨大傘の「アンブレラ」プロジェクト。カリフォルニアの丘陵地帯に1760本の黄色傘、茨城の水田地帯に1340本の青色傘が同時に配置され、景観が一変した。その舞台となった地域を含む6市村で芸術祭が開催中の茨城県で開幕した本展。ドローイングや傘本体など貴重な展示だ。



©Christo, 1986 Photo: Wolfgang Volz

『アンブレラ 日本とアメリカ合衆国のジョイント・プロジェクト』1986年　2枚組のコラージュ

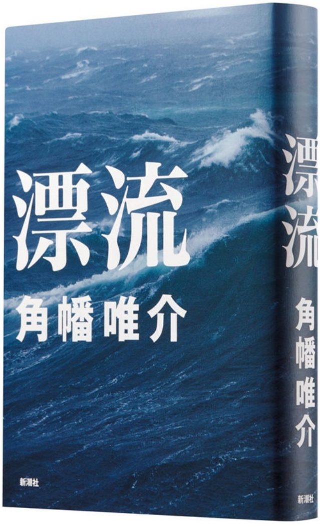
開催中〜12/4　水戸芸術館現代美術ギャラリー
☎029・227・8111　㊎9時30分〜18時
※入場は閉館の30分前まで　㊡月
㊖一般¥800　www.arttowermito.or.jp

pen

with New Attitude

text by Aiko Imaizumi

BOOK ［本］



37日の漂流から生還した男に、海に生きる人々の業を見る。

今泉愛子 ライター

『漂流』

角幡唯介 著　新潮社　¥2,052

フィリピンのミンダナオ島沖合で、9人の男を乗せた小さな救命筏が発見された。船長の本村実と8人のフィリピン人船員を乗せたマグロ漁船第一保栄丸が姿を消してから37日目の、1994年3月17日のことだった。

探検家でノンフィクション作家の著者が彼らの漂流に興味をもったのは、漂流期間の長さもさることながら、彼らが冒険家ではなく、海に生きる漁師であることが大きいという。だからこそ、パニックを起こさず、運命に身を委ねることができたのではないか。

そんな予想をもとに、船長の本村実の消息を追った彼は、取材開始早々に思わぬ事実に行き着く。彼は再び、海上で姿を消していたのだ。最初の漂流から8年後のことだった。本人に話を聞くことは難しい。それでも著者は、沖縄へと出向く。果たしてそこには、海の男たちの物語が待っていた。

本村実は、沖縄県伊良部島の東側にある佐良浜の生まれ。古くから遠洋漁業で栄えた集落だ。彼らは池間島からの移住者で、先祖は海を漂流して池間島にたどり着いた者たちだ。海洋民としての文化をもつ彼らは、抜群に漁が上手い。その血を引く本村だからこそ、最後まで海との縁を切ることができなかったのかもしれない。

著者は、丹念に取材を重ね、生と死が隣り合わせにある海の男たちの生き様を掘り下げていく。さらに、男たちを支える島の女たちや、漂流中、船長を殺して食べようと相談したフィリピン人船員たちの話を聞き、ミクロネシアの海で操業するマグロ漁船にも乗船した。海の男たちがもつ誇りと諦念が、しだいに明らかになっていく。

海は、圧倒的な力で人間を翻弄する。それでも彼らは、海に支配される人生を選ぶ。人間の業を浮かび上がらせる展開は、圧巻だ。

人間国宝が認めた椅子は、組み立て時間わずか15分。

『ゴッホの椅子』



ゴッホの作品『アルルの部屋』に描かれている2脚の椅子。細い丸太を組み合わせた武骨な椅子に魅せられた木工家の黒田辰秋は、1967年、スペインの椅子職人のもとを訪れる。のちに人間国宝となった彼は、宮内庁から皇居の椅子制作を依頼されたばかりだった。日本の椅子文化の未熟さを痛感していた木工家は、現地で椅子づくりの原点に触れる。著者は、黒田とこの椅子との出合い、スペインの工房訪問の様子から、椅子のつくり方までを紹介。日常の道具の在り方を改めて問い直す。

久津輪 雅 著
誠文堂新光社
¥2,484

悪魔、美女、死……、西洋美術の裏にある恐怖。

『あやしいルネサンス』



ルネサンス絵画に描かれたのは、愛らしい天使や優しい聖母だけではない。斬首された血まみれの男、長い手足をもつ悪魔など、“あやしい”モチーフも数多く描かれている。本書では、そんな絵画を50点以上紹介。各作品の背景にある、当時の人間たちの恐怖心を解説する。たとえば恐ろしい姿をした悪魔は、病や天災などの避けられない惨事を説明するために不可欠だった。男を堕落させる女や、厚かましい異教徒らの姿は、どこかユーモラス。画家の風刺的な視点にもハッとする。

池上英洋 監修・著
深田麻里亜 著
東京美術
¥1,944

小さな実践の積み重ねから、アートの輪郭を捉える。

『素手のふるまい アートがさぐる〈未知の社会性〉』



哲学者で、京都市立芸術大学学長の著者が、アートのあるべき姿を、学生やアーティストの実践をもとに考察を重ねる。東日本大震災の被災地にある写真館で、店主に代わり小中学校の卒業アルバムの編集を始めた藝大生や、老職人がつくった蛸壺を無人販売所で売る大学職員らの取り組みは、これからの社会とアートの関わりを示唆。他方、アートが含有する「訳のわからなさ」をどう昇華していくかなど、アートが抱える課題を明確に提示する。

鷲田清一 著
朝日新聞出版
¥1,728

特別イベント招待

Pen × パナソニック LAMDASH

日本が誇る伝統「盆栽」に虎ノ門で出会う













小林健二氏による“景色盆栽の実演トークショー”

今回で3回目を迎える
「Pen」×「パナソニック ラムダッシュ」
特別イベントを虎ノ門で開催いたします。
今回は景色盆栽家の小林健二氏をゲストに迎え、
日本が世界へ誇る「盆栽」と、日本の最新技術により
革新を続ける「ラムダッシュ」を体感いただきます。
小林氏の新たな盆栽の嗜み方と、
ラムダッシュの密着、深剃りを是非実感ください。



PROFILE

小林 健二 こばやし けんじ

景色盆栽家。
日本独自の四季を切り取り、モダンでシンプルな鉢に表現、空間を彩る景色として、様々なライフスタイルに合った緑を創作。
建築、インテリア、鉄、木工など様々な分野とのコラボレーションを精力的に行う。

同時イベント！

「ラムダッシュ」5枚刃体験！！



最新モデル「ラムダッシュ ES-LV9B」

読者イベントご招待 ［男性100名様］

日 程	2016年11月21日(月) 開場19時 開演19時30分(予定)
開催場所	アンダーズ 東京 51F Tokyoスタジオ ［東京都港区虎ノ門1-23-4］
お申し込み	下記ペンオンラインよりお申し込みください。 http://www.pen-online.jp
締 切	2016年11月4日(金) 24:00

※応募は男性のみとさせていただきます。
※応募にあたってCCCメディアハウスのメルマガ会員登録が必要です。
※厳正なる抽選の上、当選者を決定させていただきます。当選者の発表は、招待状の発送をもってかえさせていただきます。住所、氏名などの個人情報は、招待状を発送する目的に限り、使用いたします。

主催 / Pen パナソニック ラムダッシュ

text by Mika Hosoya

CINEMA［映画］

アーティスト、ローリー・アンダーソンが、パートナーだったルー・リードの闘病と他界を経て完成させた作品。ヴェネツィア国際映画祭のコンペティション部門に正式出品されたほか、NYタイムズが選ぶ2015年ベスト10にも選出されている。



優しい声で紡ぐ、思索の織物。

畠中 実 NTTインターコミュニケーション・センター（ICC）主任学芸員

『ハート・オブ・ドッグ ～犬が教えてくれた人生の練習～』

監督／ローリー・アンダーソン
2015年　アメリカ映画　1時間16分　10月22日よりシアター・イメージフォーラムほかにて公開予定。

本作の監督であるローリー・アンダーソンは、マルチメディア・パフォーマンスの先駆者と言うべきアメリカのアーティスト。１９８０年代には日本でも最先端の芸術表現として紹介され、音楽、美術、映像、舞台といったジャンルを横断する、総合的なアートフォームを体現する存在だった。

最新作となる『ハート・オブ・ドッグ』は、彼女が監督したドキュメンタリー映画である。もっとも、それは自身のモノローグと愛犬ロラベルの目を通して見た世界によって描く、非常に繊細に綴られたエッセイであり、記憶と思索の織物といった趣の作品だ。

映画の全編を通じて語られるモノローグは、彼女を一躍有名にした81年の曲『オー・スーパーマン』のような電子的に変調された声ではなく、ゆっくりと優しく語りかけるような、生の声によって語られる。９・11直後、ニューヨークで行われたコンサートで、「まったく新しい世界」に生きるために「勇気と思いやりをもって行動する」ことを聴衆に語りかけた、その声。

森の中でハゲタカに襲われそうになったロラベルが、それ以後、空から何者かに襲われるのを恐れながら歩くようになったというエピソードに、彼女は９・11以降のアメリカの姿を重ね合わせる。この作品には９・11や、長らく生活をともにした夫である音楽家ルー・リードと母親との死別といった出来事を乗り越え、自身の半生を振り返り、その失ったものたちとともに前に向かっていこうとする、彼女の省察が重く詰まっている。しかし、その語り口は軽やかで、優しささえ感じられるものだ。

それは、死に行くものと生きるものを見つめながら、それらへの「共感」という、いま私たちにいちばん必要なものを考えさせる。

友情と情熱が背中を押す、実在の数学者の挑戦。

『奇蹟がくれた数式』



1914年、ケンブリッジ大学。数学教授ハーディのもとに、新たな数式を記した手紙が届く。ハーディは差出人である名もなきインド人青年をイギリスへと招き、ともに数式の証明に取り組むが……。数学への情熱だけを拠り所に海を渡り、孤独や病と闘った実在の数学者の挑戦の日々を描いた人間ドラマ。人種も身分も宗教も超えてつながっていく２人の友情が、美しい光を放っている。

監督／マシュー・ブラウン　出演／デヴ・パテル、ジェレミー・アイアンズほか
2016年　イギリス映画　1時間48分
10月22日より角川シネマ有楽町、Bunkamuraル・シネマほかにて公開。

混沌とした世界の真実は？ ル・カレの小説を映画化。

『われらが背きし者』



モロッコで休暇を過ごしていたイギリス人大学教授とその妻。旅先で知り合ったロシアン・マフィアから、組織のマネーロンダリングに関する情報をMI6に渡してほしいと依頼されたことで、壮大な亡命劇に巻き込まれることになる。スパイ小説の巨匠、ジョン・ル・カレの原作を映画化。混沌とした世界の中から愛と裏切りが鮮やかに浮かび上がる、最後まで先読みできないサスペンスだ。

監督／スザンナ・ホワイト　出演／ユアン・マクレガーほか
2016年　イギリス・フランス合作映画　1時間47分
10月21日よりTOHOシネマズ シャンテほかにて公開。

日常に潜む恐怖をあぶり出す、曲者俳優の監督デビュー作。

『ザ・ギフト』



カリフォルニア州郊外の一軒家に引っ越し、新たな暮らしを始めた夫婦の前に現れたのは、夫の同級生だったという男。再会を喜ぶ彼は、夫婦のもとへと次々に贈り物を届けるようになる。しだいにエスカレートしていく行為が、得体の知れぬ恐怖を醸していくサイコ・スリラー。曲者俳優ジョエル・エドガートンが、自ら緻密な脚本も執筆し、監督としての確かな才能を印象づけた。

監督／ジョエル・エドガートン　出演／ジェイソン・ベイトマンほか
2015年　アメリカ映画　1時間48分
10月28日よりTOHOシネマズ 新宿ほかにて公開。

pen

with New Attitude

text by Kenji Yamazawa

MUSIC［音楽］

原点に回帰したノラによる、充実の最高傑作。

『Day Breaks』



4年ぶりとなったノラの6枚目は、デビュー盤以来となる、ピアノ弾き語りスタイルでジャズを奏でる原点回帰作。ニール・ヤングなどのカバーも、ノラらしい実にほっこりとした仕上がり。ウェイン・ショーター（サックス）からブライアン・ブレイド（ドラムス）まで、新旧ジャズの俊英が参加したサウンドも音に深みがあり聴き惚れる。癒し効果満点の最高傑作。

ノラ・ジョーンズ
UCCQ-1065　ユニバーサルミュージック・ジャパン　¥2,700

インターポール×ウータン・クラン、異色コラボに酔う。

『Anything But Words』



ロック・バンド“インターポール”のフロントマン、ポール・バンクスと、ヒップホップ集団“ウータン・クラン”の総帥RZAによる、NY発の異種コラボ盤。RZAがつくったビートにふたりの演奏とポールのダークでキャッチーなメロディを乗せ、RZAの強烈なラップが絡み付く、ロック×ヒップホップの濃厚な1枚。3年かけて練り上げた、ゲストも豪華な大作。

バンクス&スティールズ
WPCR-17447　ワーナーミュージック　¥2,138

インプロビゼーションが生む、ミニマルな音の渦。

『nemutte』



日本を拠点に活動する先鋭音楽家、ジム・オルーク。世界デビューも果たす才媛ピアニスト、石橋英子。UAの作品などでも活躍するドラマー、山本達久。世界から注目を集める3人の即興演奏を元にジムが再構築した初スタジオ作。1曲39分。延々と続く、ミニマルでアンビエントなサウンドの緊張感漂う揺らぎが、美しい音の渦となって心を奪う。革新の音像盤。

カフカ鼾
PECF-1141　フェリシティ　¥2,592





オーウェンことマイク・キンセラが率いる、ロック・バンド。1998年にEP、99年にアルバムを1枚リリースしたのみで解散し、エモ・ロックの伝説的バンドとして知られる。2014年にリユニオンを果たし、今年、17年ぶりとなる本作を発表した。

伝説のインディーズ・バンドが、17年ぶりに奏でる“時代の音”。

天井潤之介 音楽ライター

『American Football』

アメリカン・フットボール　HSE-3756　ホステス・エンタテインメント　¥2,690　10/21発売

2年前に15年ぶりの再結成を果たす以前、アメリカン・フットボールが活動していたのは1990年代終わりのわずか3年ほどにすぎない。残したアルバムは1枚のみ。にもかかわらず、その音楽は解散後も時代の流れに埋もれることなく聴かれ続け、その評価や価値を確かなものとしてきた。

80年代のパンクやハードコアの流れを汲んだエモーショナルなメロディと歌唱。そして、ジャズや現代音楽の要素も取り入れた構築的で起伏に富んだ演奏。その混交が見せる彼らの音楽は、当時アメリカのインディ・シーンで台頭した「エモ」と「ポスト・ロック」のあわいに生まれた、まさに〝時代の音〟だった。と同時に、そのふたつの大きな潮流がこの20年近い間で支持を広げていくなか、彼らの唯一のアルバム『アメリカン・フットボール』は〝クラシック〟となった。

その前作と同じタイトルとなる17年ぶりの最新作『アメリカン・フットボール』は、そんな彼らの音楽を初めて聴いた時の記憶を鮮やかに甦らせてくれる。機微に満ちた演奏と瑞々しい歌が織りなす音の美観は、いまもまるで損なわれていない。加えてメンバーが4人となり、音色に奥行きと厚みを増したバンド・アンサンブルが印象的だ。アンビエントな音の揺らぎが美しい「ボーン・トゥ・ルーズ」は、ボン・イヴェールなど昨今のモダン・フォーク勢との共鳴もうかがわせる。

地元の大学生だった結成当時、彼らの音楽は同世代の「思春期や多感な年頃の子たち」に向けられたものだった。それから長い年月を経て、音楽的な懐の深さという円熟味さえ備えた今作は、かつての若者たちはもちろん、世代を超えて聴き手の琴線に触れる、彼らの新たな〝クラシック〟となるにちがいない。

木村宗慎 利休によろしく ⑨

●茶人。1976年、愛媛県生まれ。神戸大学法学部卒業。少年期より裏千家茶道を学び、97年に芳心会を設立。京都、東京で稽古場を主宰しつつ、雑誌やテレビ番組、映画、展覧会などの監修を手がける。グルマン世界料理本大賞など受賞多数。著書に『茶の湯デザイン』（CCCメディアハウス）など。

物事の本意に寄り添う、「倣う」という日本古来の概念。

蛭子 真・写真 photograph by Shin Ebisu
小長谷奈都子・編集 edited by Natsuko Konagaya



染付羊向付
加藤静允作
2014年 制作

一見、明代の古染付の模しのようでありながら、そうではない。自家薬籠中の物（自分の思うままに使える技術）、という語そのままの闊達さ。五客一組の羊は、その表情も染付の具合もすべて異なり、伸びやかな筆致、独特の飄逸（ひょういつ）な雰囲気が魅力。

「倣う」――独自のクリエイティビティ、個性が声高に叫ばれる時代に、あえて問いたい、物事と向き合う姿勢です。模し倣う、あわせて模倣という言葉は昨今あまり好まれるものではありません。独自性を、また個性を阻害するきらいがあると目されるからです。果たして本当にそうでしょうか。

「古人の跡を求めず、古人の求めしところを求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅もまたこれに同じ」。これは芭蕉による、弟子の森川許六との離別にあたっての文章です。南山大師とは弘法大師・空海のこと。空海の『遍照発揮性霊集』に「書もまた古意に擬するを以て善しとなし、古迹に似るを以て巧みとなさず」とあるのを、芭蕉がひも解いたのです。

古に心を寄せて、反骨や愛情を積み重ねる。

古の人がなにを求めたのか、そこに心を寄せるのが善、既にできあがったかたちに似せるだけでは巧みの技ではない。いかがでしょう。時に反骨、時に愛情、さまざまな気持ちが積み重ねて残される。たとえば、「稽古」という言葉も同じことです。古事記の冒頭、「稽古照今（いにしえをかんがみていま



古染付菊向付

明時代末 制作

中国・明代の天啓・崇禎年間（1621～1644年）に景徳鎮で焼成された染付磁器。菊を大胆にアレンジした絵付けと形が面白い。向付とは、茶事懐石の席上、なますや造りなどの料理を盛り付けるための器。膳の上、飯、汁の椀の向こう側に供されることから名が付いた。

をてらす）」の一文。古きを学ぶのは、いまを照らすため。数多の名筆によって残された同根のメッセージからは、分野が違えど、みなが歩いた一本の道筋が見えてくるはずです。

左ページの器は、明時代、天啓・崇禎年間に日本の茶人の発注により中国・景徳鎮で焼成された磁器の向付。俗に古染付と呼ばれるもののひとつです。描かれたのは菊の花と葉。花弁や葉脈を大胆にアレンジした造形は、いま見ても面白く、斬新です。完璧精緻を求める中国の官窯品と異なり、あえて下手の民窯にオーダーすることで可能になった自由で伸びやかな線。

もう一方は、現代の染付。この羊の向付の箱には「観古遊楽」と記されています。作者の加藤静允師は、陶芸家ではありません。本業は小児科の医師です。現代稀な〝文人〟のありようを体現する師は、素人の余技、というスタンスをけして崩そうとはしません。ひとつとして同じものはない、五匹の染付の羊。手に取って楽しく、目に愉快なのは、つくり手の愛情と、本物の自由がそこに注がれているからです。模し、倣うとはどういうことか。教えてくれる器です。

なにも、古典を学び、型にはまるのがよい、と言いたいのではありません。我が国の「模す」「倣う」というふるまいは、英語でいうコピー、またはよりネガティブに捉えたフェイクをつくろうとするものではないこと、一度立ち止まって考えてほしいのです。無から有、まったくゼロから生み出される新しい美などというものが本当にあるのか、ということもあわせて。

島地勝彦

そして怪物たちは旅立った。

－50－

後藤新平の生きざまを、小池百合子は知っているか。

paper cut-out by Risa Fukui

1920年代に東京市長を務めた後藤新平、あなたはいま、小池百合子東京都知事が腕まくりして、都政の改革に挑もうとしていることをご存じでしょうか。しかも、これは昔から言われているような、いわゆる「女の腕まくり」(『大したことはない』の意)では終わらない男顔負けの迫力なのです。

あなたが東京市長を引き受けたのは大正9年でしたね。東京市議が満場一致であなたを市長に推したのでした。あなたの側近たちは、副総理格の内務大臣を務めた大物のあなたが、はるかに格下となる東京市長に就任することに猛反対したそうですが、あなたは「人生、一度は貧乏くじを引いてみるか」と、悠然として東京市長を引き受けたのです。

あなたは政治家として「大風呂敷」と揶揄されていましたが、あなたの目は100年後の東京を見据えていたように思えてなりません。時代の流れは愚かにも、そんなあなたの偉大さを忘れ去ろうとしています。実際、あなたほど伝記になった人物はいないのですよ。いまの日本人は本を読まなくなってしまいました。スマホをいくらいじっていても、後藤新平の偉大なる業績はわかるはずもありません。

わたしはあなたの伝記が好きで、若いころから読んでいました。そこに掲載されているあなたの顔が素敵です。男の顔は40歳までは両親の作品ですが、40歳からはその人の作品です。あなたのお顔は迫力、品格、色気に満ちあふれています。そして、あなたがこの世を去る前に言い残した言葉が大好きです。

「よく聞け、金を残して死ぬやつは下だ。仕事を残して死ぬやつは中だ。人を残して死ぬやつは上だ。覚えておけ」

これぞ、いまの世の中にいちばん足りない叡智だと思います。あなた自身、東京市長になった時、3人の助役を選んでいます。すべて自分の影響下にあって、あなたが育ててきた人物でした。しかも、その助役に用意した年俸は、それまでの3人の合計2万4、000円よりもはるかに高い、3万7、000円でした。市長の年俸は1万5、000円から2万5、000円にアップ。しかし、自分の年俸は全額東京市に寄付し、所得税まで払ったというではないですか。



©HIROSHI YAGI/orion/amanaimages

●1857年岩手県生まれ。台湾総督府民政長官、満鉄初代総裁などを経て、1920年に東京市第7代市長に。マッカーサー道路と呼ばれる虎ノ門～新橋間は、後藤新平が帝都復興計画において策定したもの。71歳にて死去。

いま、小池知事は年俸を半額にしてほしいと言っているそうです。彼女が後藤新平伝を読んでいたら、そんなことは言わずに、あなたの驥尾(きび)に付して、全額もらって半額を寄付すればいいことに気づいたはずです。もちろん所得税は払ってのことですよ。当時の東京市民は「さすがはわれらの市長！」と拍手しあなたの人気はますます高まったそうではありませんか。

正力松太郎は警視総監を目前にして虎ノ門事件が起こったため、退職金ももらえず免職されたとき、あなたは傷心の正力を自宅に招いてこう言ったそうですね。

「あせってヘンな仕事に手を出すなよ。ここに1万円ある。君に進呈する。2、3年ゆっくり骨を休めろ」

そしてまもなく無聊を託(かこ)っていた正力に「10万円都合できれば赤字続きの読売新聞を任せる」という話が飛び込んできたのです。そして正力は再びあなたを自宅に訪ねています。その時のあなたの言った言葉は、読むたびに正力が号泣したように、わたしも感泣せざるを得ません。

「よし、わかった。少し待てば出してやる。しかし失敗したら、無理に返済することはないぞ。それからおれが出したことは内密にしておいてくれよ」

正力は命がけで働き読売新聞を立て直し、借金はやがて全額返済しました。正力自身、10万円という大金は、きっとあなたが、どこかの実業家に出させたと思っていたそうです。でも、あなたの死後、遺族からその出所を聞いて、また驚愕し号泣したそうですよ。

10万円は、あなたの麻布の自宅を担保にして金策したものだったそうではありませんか。あなたは、この世に正力松太郎という大人物を残して、この世を去ったのです。

1年で最も日本がカラフルになる、秋。
それは、食の楽しみが最も増す季節でもある。
心と身体の贅沢を、存分に味わってみよう。

「リシャール・ミル」が落札金額を寄付！チャリティオークションに特別モデル出品。

東日本大震災、交通安全キャンペーンを対象に、「リシャール・ミル」が2016年のチャリティオークション第2弾を実施。レーサーのカーナンバーをインデックスにデザインした、世界で唯一の特別制作モデル「RM 011 フライバッククロノグラフ」を出品する。参考価格¥12,900,000（税別） www.richardmille.jp ☎03・5537・6688 リシャール・ミル GINZA



「ボトコラックス ブラック」に新ライン、大人の男性が社交シーンで纏う香りを。

遊び心のある華やかさとエレガンスさを兼ね備えたジントニックをイメージ。男性向けエイジングケアブランド「ボトコラックス ブラック」から、大人の男性が社交シーンで纏う香り「ル・ディスコーク」ラインが登場。フレッシュさと心身の安らぎ、相反するような二面性が新鮮な印象。http://botocollaxblack.jp 100㎖、¥5,800（税別） ☎03・5815・5707 ウエニ貿易



『ルイ13世』が世界に3点のみのオーダーメイド！オークションの売上は映画保全団体へ寄付。

世界最高級のグランド・シャンパーニュ・コニャック「ルイ13世」。今回、エルメス、ピュイフォルカ、サンルイとコラボレートした世界に3点のみの限定品「ロディセー・ダン・ロア／王の旅路」がサザビーズのオークションに登場。売り上げの全額を歴史的映画の保全を行うザ・フィルム・ファウンデーションに寄付。☎03・6441・3025 レミー コアントロー ジャパン



世界が注目する酒類コンペティションで、「いいちこスペシャル」にカテゴリー最高賞。

新しい酵母で醸した原酒を長期熟成させた本格焼酎。三和酒類の「いいちこスペシャル」が、世界的な酒類コンペティション、インターナショナル・ワイン&スピリッツ・コンペティションで、カテゴリー最高賞「トロフィー」を初受賞した。ストレート、オン・ザ・ロック、水割りで、味わい深い世界をじっくり楽しもう。720㎖、30度、¥2,469（税込） ☎0978・32・1431 三和酒類 お客様相談室



ジェイアール名古屋タカシマヤに注目！「セリーヌ」ブティックがリニューアル

国内初使用の大理石をちりばめたテラゾー床などによる温かみあるファサードが特徴。ジェイアール名古屋タカシマヤ店3Fの「セリーヌ」が10月22日（土）リニューアルオープン。記念に、素材とデザインが際立つ2016年秋冬の新作バッグ「TRAPEZE」（トラペーズ）のプレシャススキン¥495,000（税別）を限定発売。www.celine.com ☎03・5414・1401 セリーヌ ジャパン



「ブレゲ」が全面支援して六本木で開催、過去最大のマリー・アントワネット展へ。

マリー・アントワネットが愛したプチ トリアノン宮殿が「ブレゲ」の支援で全面改修。そのパートナーシップによる「マリー・アントワネット、ヴェルサイユの王妃」展が、六本木の森アーツセンターギャラリーで開催。王妃のため複雑機構と最新技術による時計をつくるなど、ゆかりある「ブレゲ」ならではの大規模展。10月25日（火）～2017年2月26日（日）。☎03・6254・7211 ブレゲ ブティック銀座



LED付き！キッチン用湯水混合栓、スイス・KWC「ZOE」発売中。

スパウトの先端にLEDライトを搭載。水の流れる様やシンク、食器を優しく照らし、キッチン空間を幻想的な雰囲気に演出。セラトレーディングから、スイス・KWCのキッチン水栓「ZOE」シリーズ発売中。なめらかな動きのレバーハンドルを備え、スパウト部分を伸ばせる引き出しタイプ。泡沫・シャワーの切り替えもボタンひとつでスムーズ。www.cera.co.jp ☎03・3796・6151 セラトレーディング



「積水ハウス」が都市生活でのときめく暮らしを、「TOKYO DESIGN WEEK 2016」で提案。

これからの都市の快適な暮らしは、例えばこういう家かも知れない。毎日がときめくような暮らしを楽しむアイデアを盛りこんだ「積水ハウス」の提案が、「TOKYO DESIGN WEEK 2016」に登場する。明治神宮外苑絵画館前で、前期・10月26日（水）～31日（月）、後期・11月2日（水）～7日（月）。www.sekisuihouse.com/tokimeku2016



「ジースター ロゥ」の新ショップが、東京・二子玉川と千葉・柏にOPEN

NYの五番街にアメリカ最大規模の旗艦店を誕生させるなど、世界的に展開中のオランダ発デニムブランド「G-Star RAW」（ジースターロゥ）が、去る9月、国内店舗を2カ所オープン。東京は二子玉川ライズ・ショッピングセンター タウンフロント3F、千葉は柏髙島屋ステーションモール S館6F。記念に、RAWとペイントされた数量限定特製デニムトートを。☎03・5765・3301 ジースターインターナショナル





気付いていない興味、ありますか？

もともと興味あるものを手に取るのでどうしても同じようなものに偏りがち。この食わず嫌いが視野を、世界を狭めていると思いませんか。ワクワクしながら次号の特集を待つ定期購読が、あなたの世界を、知識を、幅広く、奥深いものにし、知的好奇心や審美眼も刺激してくれるはずです。

あなたの気付いていない興味が届く、それが定期購読の愉しみです。

いま、新たに定期購読をお申し込みの方全員に「オリジナル マルチスタンド」をプレゼント!

スマホはもちろん、タブレットPCもしっかりホールド。エコ素材「ラバーウッド」製。冊子版のご契約1件につき、1個進呈。
（W70×D110×H24mm／本体カラー：ナチュラル／ロゴカラー：メタリック・シルバー）＊スマートフォンはプレゼントに含まれません。



※プレゼント商品は購読料受領確認後、2週間ほどで発送いたします。プレゼントは変更する場合がございますので予めご容赦ください。

お申し込みは今すぐ！［送料無料!］

- 1 年（23冊）……………14,300円
- 2 年（46冊）……………28,600円
- 3 年（69冊）……………42,250円

最大4,000円以上お得！
特別定価号も定価で！
1冊定価650円／表示価格は税込

0120-467-489 ［受付：平日 9:30～17:30］

Web **www.pen-online.jp**

※お申し込みの際にご連絡いただいた個人情報は、本誌定期購読サービスの提供、本人確認、関連するお知らせ（臨時増刊や再購読のご案内など）、おすすめ情報提供サービス（不要の場合はお申し出ください）のために利用し、これ以外の目的には使用しません。

pen Online

まるごと一冊ダウンロード！
www.pen-online.jp



イメージ写真

海外旅行や出張にも便利なデジタル版なら、気になったあのバックナンバーも売り切れなし！

PC、スマホ、タブレットなどの端末で、インターネットに接続できる環境なら、いつでもどこでも閲覧OK。

pen 次号予告 11月1日発売

【創刊20周年記念・永久保存版】

ハリー・ポッター完全読本。





小説は79言語に翻訳され、発行部数は4億5,000万部を突破。その映画作品は累計約9,268億円と、「スターウォーズ」や「007」を超え、シリーズものの興行収入1位を記録している。世界が夢中になる「ハリポタ」の秘密を徹底取材するとともに11月23日公開『ファンタスティック・ビーストと魔法使いの旅』をいち早く紹介する、永久保存版の大特集です。

壮大な物語の創世主、J.K.ローリングとは誰だ?

『ファンタスティック・ビースト』どこよりも早く徹底解剖!!

〈ハリポタ新シリーズの映画・キーパーソンにインタビュー〉

- デイビッド・イェーツ 監督
- デイビッド・ヘイマン プロデューサー
- エディ・レッドメイン 俳優
- キャサリン・ウォーターストン 俳優
- コリン・ファレル 俳優
- コリーン・アトウッド 衣装デザイナー

……ほか

小説7作+映画8作の楽しみ方、教えます。
8番目の物語『ハリー・ポッターと呪いの子』とは。
魔法の世界を日本語で伝えた、翻訳家の情熱。
ストーリーを動かす、魅力的なキャラクターたち。
これだけは覚えておきたい、魔法の呪文集。
「ハリポタ」のビジュアルを決定づけた、伝説の美術監督。
全シリーズが撮られた、リーヴスデンのスタジオへ!
映像にリアリティを加えた、イギリスのロケ地を巡る。
イラスト版「ハリポタ」を知っていますか?
部屋でとことん浸りたい、書籍・DVD・グッズ紹介。

特集企画は、場合によって変更することがあります。